
ヴェスタラ戦記

槇原勇一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェスタラ戦記

【Nコード】

N5636N

【作者名】

槇原勇一郎

【あらすじ】

ヨルパ大陸北方の半島、スカーディナウイア。元々小国でしかないヴェスタラ公国は、僅か二代の間に公国から王国に、王国から帝国へと躍進を遂げ、半島全体を支配するに至っていた。安定したかに見えた半島の状況は初代皇帝アンデルス一世の崩御によって一変する。

手紙配達人の元騎士団員スヴェン、帝国第二騎士団長クリストフエル、皇族の血を引き、女性ながら近衛騎士団長を務めるレーナ、亡国の宰相アルヴァなど、様々な武将、策士達が戦いを繰り広げる、

群雄割拠のスカーディナウエア半島を舞台にした仮想歴史小説です。

農園の流血

ヴィルゴット・クラインはもはや正気ではなかったかもしれない。ただただ、目の前にいる敵一人一人を斬ることしか、考えられなくなっていた。彼の剣技を以てすれば、襲いかかってくる騎士たちなど、相手にはならない。と言っても、相手はこちらの百倍、一対百の戦いである。どんなに技量に差があろうとも体力がもつはずがなかった。彼らはヴィルゴットの力量と気迫を眼前にしても怯む様子はない。全て承知の上のことだった。命のやり取りになることを前提にして、たった一人に百人で戦いを挑んできたのである。

すでに二十数名の騎士が、彼と娘の住む小さな屋敷の前に屍を晒していた。

一人の騎士と切り結んでいるうちに、別の一人が背後から斬りかかる。大人数とは言え、一人の人間に同時に斬りかかることが出来るのは、せいぜい四、五人程度、騎士たちの用いる長剣を振り回してでは、同士討ちを恐れてせいぜい二、三人でしかない。ある程度の犠牲は覚悟の上だった。すでに事切れた二十数名のうち、その三分の一程度は同士討ちによって命を落としていた。

ヴィルゴットは背後の騎士の突きを、振り返りもせずには躲し、腕を脇に抱え込んだ。前方の騎士が好機と見て飛び込んだ瞬間、仲間の剣の切っ先が彼の胸板を突き破る。その瞬間には突き刺さった剣の持ち主の首が胴体から離れていた。

ヴィルゴットの動きは人間の域を超えていた。素早いなどという言葉では追いつかない。躲すと同時に斬り、斬撃を受けるのではなく反らし、他の騎士との同士討ちを誘発させる。速さ、膂力、技

量、そして咄嗟の判断力の全てにおいて百名の騎士たちを圧倒していた。百名の騎士たちはそのことを十分承知している。それでも、百対一である。尋常ではない被害が出ることは分かっていたが、目の前の男が一人で戦っているのであれば、いずれは力尽きる。この男が仮に十人程度の兵士を率いてたとするなら、千人の軍隊を以てしても、勝利はおぼつかなくなるのだ。

小さな家の二階の窓からはウイルゴットの娘がこの地獄絵図を眺めていた。死をかけた父の戦いを自分の目に焼き付けていたのだ。戦いの理由は娘にはわからない。娘の名はフレデリカ。今年で十四歳になったばかりである。

ウイルゴット・クライン。この農園の主は十九歳で当時の第一騎士団に入団した。彼に実の両親はいない。貴族の出身ではあったが、権門とは言えず、財産も殆どなかった。彼はわずか五歳で両親を流産で失った後、ステファン・エリクソンに養子として引き取られる。エリクソン家はヴェスタラでも有数の旧家ではあったが、ステファンは直接政治や軍事に関わることを嫌い、武術と学問の探求に一生を費やした。子のない彼は五十歳を過ぎた頃、自分の修めた武術と学問を次の世代に引き継がせたいと考え、ウイルゴットを含む三名を養子にする。ウイルゴットだけが年長で、三年ほど早くエリクソン家に入ったが、残り二人を実の弟のようにかわいがっていた。

ステファン・エリクソンの手ほどきで、ウイルゴットの武術と学問はどこに出しても恥ずかしくないものとなった。養父は彼を友人であるカール・ビランデル将軍に依頼して、第一騎士団に入団できるように手を打つ。時はアンデルス王の五年、ブレーキング公爵が散発的にヴェスタラに対する反乱を起こしていた時期である。

ウイルゴットは寡兵、それほもろくに訓練も施されていない、民兵によって、何度もブレーキング公の軍隊を翻弄してみせた。一度は騎士団長であるカール・ビランデルの命も救っている。その功績から、宮廷の警護とヴェスタラ直轄地の治安維持を担う近衛騎士団へ移籍することになった。

だが、ウイルゴットは僅か一年で近衛騎士団を退団する。騎士団長には一身上の都合とだけ、伝えられた。権門の若殿ばかりの近衛騎士団に、まともな家名の追わぬ若者が入団していたのである。空気が合わないのならば、無理に引き止めるのも悪いと思ったのか、近衛騎士団長は何も言わず退団を許可した。

その後、彼は王都から少し離れたこの地に農園を作った。資金はステファン・エリクソンが用意した。農園主となったウイルゴットは一人の赤子を連れていた。その赤子がフレデリカである。農園の使用人達もフレデリカがウイルゴットの実の娘なのかどうかは知らない。周囲には「養女」と言っていたが、どこことなく、面影が似ているところもあった。

そのフレデリカも今は十四歳。歳の割には小柄だが、聡明で美しい少女に育っていた。

その日は刈り取りも終わった農閑期で、家畜の世話以外は特に仕事もない暇な時期だった。使用人達のうち、独身で実家のある者には休暇を出し、家族と住んでいる者も、自宅で自由な時間を楽しんでいた。フレデリカとウイルゴットも余暇を楽しんでいたのだ。養父と共に久々に近くの沼まででかけ、鱒釣りを楽しんで返ってきたところだった。

まだ、空が黄昏るには早い時刻、フレデリカはこの日の釣果である大きな鱒を料理しようと台所にいた。父と娘二人だけの生活だが、四年ほど前から食事の用意はフレデリカが担当している。器用なフレデリカは子供ながら、ウィルゴットとは比べ物にならないほど、料理が得意であった。

「お父様。今晚はこの一番大きなやつを食べましょう」

「じゃあ、残りは納屋で燻製にしよう。今日辺りスヴェンの奴が来るかもしれないからな。ご馳走だけでなく、旅中の土産を持たせてやらないと」

スヴェンとは、ウィルゴットの義理の弟の一人である。エリクソン家の養子の一人で、十年前にステファンが病死した直後はその遺言に従って騎士団に所属したが、いくつかの功績を上げたところで、軍隊生活が性に合わないと辞めてしまった男だ。今は手紙配達人やキャラバンの護衛などの傭兵稼業をしながら、国中を放浪している。武術ではウィルゴットに勝るとも劣らない人物で、今一人の義兄弟、クリストフェルとは同い年であった。

スヴェン自身、手紙配達人を生業としている。手紙配達人とはヴエスタラ商人が考え出した制度で、国内各地の都市にある詰所で受け付けた手紙を、国内のどこにでも運ぶという仕事だ。手紙配達人はほとんどは小規模な行商人や芸人、傭兵などの流浪の民が副業として行うもので、旅費の足しとするために配達を引き受ける。大きな都市への手紙であれば、そこに向かうキャラバンを見つけ、頼めばいいが、田舎に届けることを頼むことは難しい。流浪そのものが目的であるようなこれらの旅行者たちであれば、ついでとばかりに引き受けてくれるのだった。スヴェンなどは、特に当てもなくさまようことを好む男なので、頼めばどこにでも行ってくれると、手紙

配達人組合の詰所でも評判の人物であった。

そのスヴェンが、農園から近い村への配達があるので、近々寄らせてもらうとの手紙をよこしてきた。その手紙はたまたま商用で近くの町に出かけていた、農園の使用人に預けられてきた。ばったり偶然であったのでという話で、それがなければ、何の前触れも無しにいきなりクライン家を訪れたことであろう。

鱒を納屋で燻製にする準備をウィルゴットが始めたとき、招かざる客が現れた。軽装ではあるが、明らかに戦闘用の武装をしている百名の男たち。服装からすれば、第二騎士団の騎士たちだが騎馬ではなく、徒歩であった。百名もの騎士が騎馬で街道を走れば戦争が始まったと大騒ぎになってしまう。あくまで平常の訓練を装うためであったのだろう。

彼らが近づいてきたのを気づいたウィルゴットは、台所にいたフレデリカにこりと笑って、二階にいかせた。

「スヴェンの前に招かれざる客が現れたようだ。お前は二階に隠れていなさい」

「お父様・・・いったい・・・」

「今は詳しくは話せない。いずれ来るべきものがきたということだ。スヴェンが来てくれるのは丁度いい。詳しくは彼から聞きなさい」

「お父様・・・？」

そのまま何も言わず、滅多に持ち出すことのなかった騎士時代に愛用した長剣を手に、ウィルゴットは玄関に立った。

「第二騎士団の方々だと思われるが、この農園にいかなる御用か？」

「我が騎士団長からの命令で、お嬢様を引き取りに参りました。理

由はお察しのことと思われませんが・・・」

「そうか。それにしても、ご苦労なことだな。十年以上も前に現役を退いた私相手に、これだけの人数を集めてくるとはね」

唇の端が嘲りの帯びた笑を浮かべていた。

「騎士団長はあなたのことをよくご存知です。これぐらいの人数を犠牲にしても、貴方を制することは難しいとおっしゃっておりますたもので」

「そうか、じゃあ、試してみるかね」

壮絶な斬り合いの始まりとしては、間抜けて聞こえてくる問答であった。だが、『試してみるかね』といった次の瞬間には三人の騎士が同時にウィルゴットに斬りかかっていた。

ウィルゴットは時間稼ぎをしているように見えた。スヴェンがこの家を訪れてくるのは今日とは限らない。だが、とにかくスヴェンが現れるまでの間は、この騎士たちと斬り合うつもりなのだ。

すでに、死者は五十人に達しようとしていた。ウィルゴット自身も無数の傷を負っているが、それでも次々と騎士たちを斬殺していった。だが、ウィルゴットも人間であることには変わらない。戦いはすでに三時間ほど続いていた。

フレデリカは農園を横断する真っ直ぐな道のはるか向こうに、二頭の騎馬の姿があるのに気づいた。農閑期だが、このような時間に

はほとんど人通りはない。使用人の家もここからは遠く、夕方にこの道を通るなら、クライン家に泊まる予定でなければ、野宿をするしかない時間帯だった。

『スヴェンおじ様だっ！』

直感したフレデリカは、躊躇することなく、自室のカーテンを引きちぎるように窓から外し、燭台のろうそくにかざして火を付けた。窓から身を乗り出し、火の付いたカーテンを振り回す。

『気づいてくれるはず・・・』

二つの騎影は飛ぶような勢いで走りだした。

農園の流血（後書き）

性懲りもなく、また連載始めちゃいました。一個も完結していないのに何作も書いて、放置しているのはよくないと思っっているんですけど……。

何がしたいかといえば、西洋風の世界（今回の場合は北欧を想定しています）で、三国志とか戦国モノみたいなを書いてみたいと思っただけですね。『不死騎』などよりも、ちょっと硬いノリになりませんが、読んでいただけると嬉しく思います。

スヴェンとニルス

「ニルスっ！一人行ったぞっ！」

髭面の、だがまだそれほど歳のには見えない男が大きな声で叫んだ。男の手にはすでに何名もの血を吸った長剣が握られている。足元には数名の野盗と思しき男たちの死体が転がっていた。少し離れたところには数台の荷馬車が止まっており、積荷の上で荷主と思しき商人と、御者や使用人と思われる男たちが震えながらこちらを見ていた。

恐怖に震えているのではない。最初はそうだったのだが、今は護衛として雇った二人の働きに身震いをしているのだ。荷主はノール公領から帝都郊外にある大市場まで積荷を届ける途中であった。商用の旅であれば、野盗に襲われる可能性は常に考慮しなければならぬ。と言っても、大規模な護衛など雇うことはできないので、ある意味では関係者に体裁を繕うために、腕利きと言われている傭兵二人を雇ったに過ぎなかったのだ。その護衛がたった二人で数十名の野盗たちを圧倒している。

ニルスと呼ばれた方は、小柄で背格好からすれば、十四、五歳の少年であった。やたらと目が細く、しかもタレ目であるため、生真面目で大人しい印象を受ける。とても、護衛が務まるとは思えないので、荷主が金を払ったのは、もう一人の髭面だけなのだが、連れだということで行方を許していたのである。

少年の手にある長剣もすでに血に染まっている。髭面ほどではないが、すでに何名もの敵を屠っていた。荷主たちにしてみれば、少年の働きは驚くべきもので、野盗に襲われてから数十分の間、彼は

一度も足を止めていない。少年としては恐るべき体力で、小さな体をさらにかがめた低い姿勢のまま、疾風のごとく走りまわり、野盗たちの主に足首を切り払っていた。野盗たちは誰も少年の動きを捉えることが出来ていない。

その少年が、髭面の声に顔を上げて反応した。一人の男がこちらに向かつて斧を掲げながら走ってくる。だがそれを見ている間も、一切足は止まってなかった。斧を持った男は走ってきたものの、そこにいると思われた場所にたどり着いたときには、少年の姿を見失っていた。次の瞬間・・・

「小さな商隊を襲って金を得ようなんてケチ臭いこと考えるなら、もう少し逃げ足は速い方がいいと思いますよ」

少年は男の背後にいた。いつの間にかすぐ後ろに回りこまれていたのだ。少年の剣は正確に男の足の腱を切り払った。

気づいたときには野盗たちは全滅していた。一人も逃亡にすら成功していない。生きている者も三分の一ほどは少年が足首を切り払ったために動けなくなっており、残り三分の二は髭面に片腕を切り離されていた。

「無抵抗の人間を殺そうとして、しっぺ返しにあったんだ。これぐらの罰は受けてもらわんとな。無傷で逃したらまたやるだろうし。ほれ、足が無い奴と腕がない奴でちゃんと協力しあって帰りな」

髭面の言葉を合図に五十名はいたと思われる野盗たちの半数がすこ

すごとその場を離れていった。

「いやあ、スヴェンさん、本当に助かりました。まさかあんな人数をお二人で始末してしまうなんて・・・」

「はは、ちゃんと報酬の分は働かせてもらいますよ。あのガキの分は、ま、本人の修行のためです」

そう言っつて、商隊から離れたのは、目的地まで続く大きな商道にたどり着いたところであつた。山間部には野盗は出るが、帝国が管轄している商道は人通りもある程度有り、騎士団が治安維持に務めているので、安心であつた。契約ではここまでがスヴェンの仕事であつたのだ。

「よろしければ、このまま大市場までいきませんか？大きくはありませんが、屋敷を持ってますから。おもてなしさせてください」

荷主は懇願するように言つたが、スヴェンは事もなげに断つた。

「いえ、手紙の配達もついでに請け負つてましてね。ここまでは同じ方向ですが、届け先は帝都とは別方向。日数もかけるわけにはいかないのです」

「そうですか・・・、帝都にお越しの際は是非お立ち寄りください」「ああ、そうさせてもらいますよ。それじゃ、日が暮れる前にイエテポリの町に辿りつかないといけないので」

「ええ、どうかお達者で！」

イエテポリは帝都から少し離れたところにある小さな町だが、周

辺には複数の農園があり、帝都の食料を備蓄する大倉庫がある。手紙配達人であるスヴェンが請け負ったのは、イエテポリのさらに向こう側にある大農園の主に当てた手紙であった。遠方に嫁いだ農園主の娘からの近況を伝える手紙である。今回は傭兵としての護衛の仕事のついでだったので、一通だけの配達でも元は取れるのだ。

二人がイエテポリに着いたのは、夕方であった。刈り取り後の時期である。大量の食料が倉庫に持ち込まれて町はごった返していたが、どうにか安宿に部屋を取ることはできた。ニルスを部屋で休ませておいて、スヴェンは一人で何度か使ったことのある酒場を訪れる。ひよつとしたら、商用で義兄であるウイルゴットもこの街に来ているかもしれないと思つてのことだが、いないならそれで、手紙を配達してから直接農場へ顔を出せばいいだけの事だった。

「スヴェン様？スヴェン・ホシユベリー様ではありませんか？」

カウンターでビールを注文した直後に声をかけてきたのは、見知った顔であった。

「ズラタンじゃないか！」

「はい。こちらにお越しだったのでですね。農園にもお立ち寄り下さいますので？」

「ああ、だが、手紙を配達してからだ。明日の夕方が明後日には顔をだすからウイルゴットに伝えておいてくれよ」

「承知いたしました。スヴェン様もお元気そうで何よりです」

「フレデリカも元気かい？」

「ええ。お嬢様もすっかりお綺麗になられましたよ」
「そうか、もう十四だもんなあ」

話しかけてきたのは、ズラタン・エドベリ。ウイルゴットの共同経営者であった。農場経営など素人であったウイルゴットがここまでやったのはこの男の協力があつてのことである。ズラタンをウイルゴットに紹介したのもステファン・エリクソン老であった。エリクソン家の家令を務めていたこともあり、自分の農場が戦禍に巻き込まれて途方に暮れていたところを、ウイルゴットの共同経営者として連れてこれられたのである。

ズラタンは小一時間ほどビールを片手に話したあとで、酒場を後にした。朝一で農場に戻る予定らしい。これでウイルゴットには自分が行くことを伝えられたので、どうやら、農園に着いたときには旨い酒と料理にありつけそうだった。ニヤリとしながらスヴェンも酒場を後にしたのである。

「ニルス。この前の野盗どもを退治した時だが・・・」
「わかつてます。先生」

ニルスは、特有の生真面目な口調で答えた。別にすねているわけでも、怒っているわけでも、悔いているわけでもない。ただ、淡々と事実だけを述べる口調で、反省を述べる。

「素早く動き続けることに気を奪われて、何度か敵の正面に立つことがありました。野盗程度なら大丈夫ですが、武術の修行をした兵士であれば、その隙を逃しません。周囲の状況を把握しきれてない

点があつたと思います」

剣術の弟子として共に旅をしている少年の言葉に、ふう、と小さくため息をついてから、スヴェンは一言だけ答えた。

「ま、分かっているならこれ以上言うまでもないな」

すでに手紙の配達を終えて、ウィルゴットの農園へ向かう途中であつた。イエテポリで馬を購入したので、配達先にはすぐに着いたのだが、娘の嫁ぎ先の様子を知りたい農園主が是非にというので、一泊することとなって一日遅れたのである。

その後は一時間ほどの間、二人は一言も口にせずに馬を走らせ続けた。走らせると言ってもそれほど急かしているわけではない。夕方までに農園につければいいのである。手紙の配達も終わり、特に急ぐ理由もなかった。ゆつくりと農園に行つて、今晚は昔話でも肴にしなから、ウィルゴットと飲み明かそうと考えていた。

「先生！あれは・・・？」

空はすでに黄昏初めているが、ウィルゴットの家まではあとわずかというところまで来ていた。赤い夕焼けの下、屋敷がある辺りに奇妙なものが浮かんで見えた。二階の窓のあたりに炎の輪のようなものが見えたのだ。二人にはすぐにはわかるはずもないが、フレデリカがカーテンに火をつけて振り回して作った炎の輪である。

「ニルスっ！急ぐぞ！」

「はいっ！」

思い切り馬の腹を蹴った二人は矢のような勢いで走りだした。

屋敷に近づくと、数十名の死体が転がっている。全て農園の使用人ではなく、軽装ではあるが鎧を来た騎士であることにスヴェンは気づいた。

「ニルスっ！訓練された兵士だっ！斬らなくていいから、とにかく攻撃を躲してひっかき回せっ！」

「はいっ！」

元気よく返事をしたニルスは、乗馬の上から思い切りよく飛んで武器を持った騎士たちの中に舞い降りた。騎士たちは突然の闖入者に驚きはしたはうるたえてはいない。すぐさまニルスに向かつて剣を振るったが、刃は少年をとらえることはなかった。受け太刀すら必要としない。ニルスはやはり一度も立ち止まらずに、低い姿勢のまま集団の中を走り続けた。騎士のうち数名は少年を狙って振り下ろした別の者の斬撃を浴びて軽傷を負っている。

スヴェンは騎馬のまま、騎士たちの上を飛び越えた。ウイルゴットが一人で奮戦しているのが見えたのだ。すでに無数の傷を負いつつも、多勢の敵にまったく遅れを取ることはない。だが、限界まで疲労していることは一目でわかった。傷の深さはわからないが、たとえ重症を負っていても、ウイルゴットが戦い続けるということスヴェンは知っていた。

高く舞い上がるように跳躍したスヴェンの馬はウイルゴットの手前に前足を着いた。その瞬間、スヴェンは大きく腰をひねる。イエテポリで購入した、普通の乗馬用の馬である。戦闘用に鍛えた軍馬ではないのだが、スヴェンの技量があればそんなことは関係なかつ

た。彼の馬はスヴェンの動きに反応して、前足を支点に体を大きく振り回した。五名ほどの騎士たちが、馬体や蹄をたたきつけられ、ウィルゴットの周りから弾き飛ばされる。

「第二騎士団の者たちよっ！まだやるといふのなら、この先は、スヴェン・ホシユベリーがお相手するっ！すでに半数以上が命を失ったようだが、これ以上は全くの無益だぞっ！」

騎士たちにはスヴェンの素性はわからない。服装からすればただの旅人か、せいぜい流浪の傭兵にしか見えない男だが、その馬術を目の当たりにして相当な手練であることはわかる。男の連れと思われる少年（騎士たちにはただの小柄な男としか思われていないが）も、これだけの人数を相手に一太刀も浴びずに走り回っていた。ここまででは、一人も斬られてはいないが、同士討ちで数名が怪我を負っている。追い回そうとすれば、ますます混乱を呼ぶだけであろう。

首領格と思われる騎士が手を上げたのを切っ掛けに、生きている騎士たちは無言でそこを立ち去った。死体はそのままである。その数は七十を数えた。退いた者たちもほとんどが怪我を負っている。ウィルゴットの働きは鬼神と見紛うものであった。

「スヴェン・・・どうにか持ちこたえてやったぞ・・・」
「お父様っ！」

二階から降りてきて走り寄ってきたフレデリカがウィルゴットの顔を覗き込んだ。次の瞬間、信じられないような顔で自分の手を見つめる。ウィルゴットの胸に置いた手は大量の血で瞬く間に真っ赤に染まった。スヴェンが到着する直前に受けた斬撃で受けた傷であった。

「スヴェン……もてなしてやることもできずに申し訳ないが……後のことを頼む。農園はズラタンに任せてくれればいい……フレデリカを……フレデリカを……」
「ウィルゴットっ！」

ウィルゴットはすでに虫の息であった。数時間、百名の騎士たちと一人で戦い、七十名を死神の元に送ったのである。致命傷は胸に受けた傷であるが、それ以外にも無数の斬撃を浴びていた。全身は返り血と自分の血で真紅に染まっている。

「フレデリカ……すまなかった。ちゃんと言ってやれなくて……お前は本当の私の娘だ……どうか……幸せに……」
「お父様っ！」

ウィルゴットは娘の胸に抱かれたまま逝った。享年三十五歳。死の直前の言葉は初めて娘に自分の実子であることを告げたものだった。

スヴェンとニルス（後書き）

世界観とか登場人物の説明もなしに話が進んでますが、そのうちちやんと書くのでどうかお赦してください。というか、そんなことも書かないうちにもう死者が・・・。

フレデリカ

どれぐらいの時間が経ったのか、その場にいた三人には無限の時間が過ぎたかのように思えた。すでに夜の闇が広がりがつつある。三人は何も言えず、しばらくの間そこに立ち尽くしていた。

最初に口を開いたのはスヴェンであった。

「ニルス、あそこのに見える厩舎の向こう側にいくつか家がある。一番大きい家にズラタンという男がいるから、事情を話して、男手を集めて来てくれるように頼んでくれ。死体を片付けないといけないし、今後のことを話し合う必要もある……」

この場の空気にいたたまれなくなっていたのだろうか。ニルスは返事をする、勢い良く馬に飛び乗り、飛ぶような勢いでその場を離れていった。それを見送ると、ウィルゴットの死体を抱いたままのフレデリカの肩に手を置いた。

「フレデリカ、このままにはしておけない。ウィルゴットの体を洗ってやらないと……」

放心していたフレデリカはすつくと立ち上がった。目からは涙が伝ってはいるが、気丈にも顔を上げて答えた。

「わかりました。裏に井戸があります。それから納屋は燻製を作るのに使っているのでダメですが、台所の地下にも物置があるので、今日はそこに……」

スヴェンは無言でうなずき、ウィルゴットの死体を抱き上げて、井戸へと向かった。

ズラタンが、使用人たちを連れて屋敷についたのはそれからしばらくしてからだった。ニルスは馬で向かったが、使用人たちはいつも働きに出る時に使っている大きな馬車に乗ってきていた。使用人たちの家と農園主であるウィルゴットの屋敷は遠くはなれている。農園は広大であり、徒歩で行き来するには一時間ほどを要する。時刻はすでに夜。皆夕食を済ませた後であった。すでにウィルゴットの死体はスヴェンの手によって洗い清められ、地下室に安置されている。七十名に及ぶ騎士たちの死体の処理に、使用人たちの手を借りる必要があったのだ。

使用人たちは一様に沈んでいた。自分たちの尊敬する主が死んだということが信じられない様子だった。事情はすでにニルスが話している。七十名もの死体を目の当たりにした彼らは、絶句し、その場に立ち尽くしてしまっただ。

「ズラタンさん、父の体はすでにスヴェンおじ様が洗い清めて地下室に安置してあります。この方々についても取り扱いはおじ様の指示に従ってください」

フレデリカの気丈さが使用人たちに落ち着きを与えた。ズラタンはフレデリカの様子に逆に感情が揺さぶられたが、それでも自分の勤めを果たさなければならぬと思ひ直した。大人たちがあわてふためいているわけにはいかない。

「スヴェン様、どのようにいたせば・・・」

「死体は一つずつ樽に入れて、明日の朝にでも荷馬車に載せてくれ。蜂蜜酒が大量にあるならそれで樽を満たそう。できるだけ腐敗は抑えたい」

埋葬するのかと思えば、どこかに死体を運び出すつもりであるらしい。だが、ズラタンは何も言わずにそれに従って、使用人たちに指示をだし、血に汚れた地面も綺麗に掃除をした。

作業が終わったのは深夜である。使用人たちは再び馬車に乗って帰ったが、ズラタンだけは屋敷に残った。フレデリカとスヴェン、ニルスはこの時間まで夕食を取っていない。フレデリカは台所で準備を始めた。すでに動揺した様子はまったくなく、その所作に乱れもない。同年代のニルスが手伝いを申し出た。何もしないでいることに耐え切れなかったのだが、父親を失った少女と一緒に台所の手伝いをして、何をしゃべって良いのかわからず、返って気まずく思うのだった。

「スヴェン様・・・いったいこれから私たちはどうしたら・・・」
「心配するな。ウィルゴットがいなくなっても、この農園はそのままだ。元々半分はズラタンのものだろう？ウィルゴットから引き継いで農園を続けてくれ」

その場からフレデリカがいなくなると、ズラタンは再び沈んでしまっていた。年少の主ではあったし、農場経営については自分の方が遥かにベテランであったが、ウィルゴットの人柄を尊敬し、崇拝すらしていたのだ。なによりフレデリカのことを考えるといたたまれない気持ちになる。

「できたら、この屋敷に移るか、フレデリカを引きとってやってくれ。ズラタンならウィルゴットも安心するだろう」

ズラタンが泣きながら頷いたとき、フレデリカとニルスが二つの鍋を持って現れた。二人は初対面で、自己紹介もできていない。ただ、ニルスには今は何も話しかけない方がいいように思っていた。少女の求めに従い、大鍋に入った料理を盛りつける。

カーリカーリリート（ロールキャベツ）と、大きな鱒の焼いたもの、フォーリコール（羊肉とキャベツのシチュー）、それにルイスレイバ（ライ麦のパン）が並べられた。スヴェンとズラタンのためにワインも用意する。ウィルゴットがスヴェンと夜通し語り合ったために、蔵から出してきたものだった。

こんな時であっても、フレデリカの用意した料理はうまかった。それがこの娘の気丈さを際立たせる。わずか十四歳で、唯一の肉親を失ったのだ。ウィルゴットはこの美しい娘を溺愛しながら、決して甘やかすことなく育てていたことがよくわかった。

「スヴェンおじ様・・・お食事中なのにこんな話をしてごめんなさい。騎士たちの死体はどうされるのですか？」

やや、無感情な声色ではあるが、しっかりとした口調でフレデリカは尋ねた。

「・・・彼らにも身内はいるだろうから、そこに帰してやらねばならない。騎士たちは上官の指示に忠実にしたがっていただけだから。だから、その上官のところに行く。向こうから引取りに来る可能性もあるが、こっちから持つて行って、場合によっては一発ぶん殴ってやらないと気が済まないからな」

「おじ様は・・・何か知っているのですね・・・さつきも一目見ただけで、彼らのことを『第二騎士団の騎士』と仰ってました。父も

彼らと斬り合いになる前に同じことを言っていました……」

スヴェンは沈黙で答えた。フレデリカは知らないのだ。だが、その理由をここで語っていいものか……。

「お、お嬢様……今日はもうおやすみなられては……」

ズラタンはうろたえながら、フレデリカの話を止めようとした。それを彼女はうつすらと美しい笑みすら浮かべて無言で拒絶してみた。

「第二騎士団であることは、装備を見ればわかる。俺もウィルゴットも騎士団にいた事があるからな」

「でも、それだけではありませんね……」

フレデリカの口調には責めるような調子はなかったが、その視線がはぐらかすことを許さなかった。

「こんなことまでやるとは思えないが、騎士団を動かせる人間でウィルゴットの情報を知っているのは一人しかいない」

「誰ですか？」

「第二騎士団長クリストフェル・フィシュテンフェリー、いや、ステファンから家督を継いだクリストフェル・エリクソンだ。俺と同様、ウィルゴットの義弟にあたる」

「その方がなぜ父を……いえ……なぜ私を必要としているのですか？」

「……！」

スヴェンは驚いていた。フレデリカの洞察力にである。彼らがしやにむになってウィルゴットを殺そうとしたのは、フレデリカを得

るためにはそれしか方法がないからである。生半可なやり方では、ウィルゴットはフレデリカを連れて逃亡するに違いなく、それを阻止することは不可能だった。百名の騎士を九十九名にまでも犠牲にして構わない、そういう戦法を取った理由は、娘を連れて逃げるという選択をさせないためである。娘を戦闘に巻きこまないためには、一人で戦うしかない、そういう状況に追い込む必要があったのだ。フレデリカはそのことを状況をみて察していたのである。十四歳にして恐るべき洞察力であった。

「それは・・・今は話せない・・・」

「では、私もそのクリストフェルという方のところまで一緒に行きます。その方の口から理由を聞くまではこの屋敷には戻りません」

「お、お嬢様っ！」

「奴は君の身柄を必要としている。そのことはもう分かっているはずだ。行けば拘束され、監禁されることになる」

フレデリカはまだ食い下がった。

「だから、おじ様と一緒に行くのです」

「俺は、ウィルゴットじゃない。百人も相手に斬り合いをするつもりはないぞ」

「父は私を巻き込まないために、一人で戦いました。でも、おじ様なら私を連れてその場を逃れる方を選ぶのではないですか？多少の危険があっても・・・」

スヴェンは無言でフレデリカの目を見ていた。決して視線を外そうとはしない。この娘は、自分の父親の欠点を理解していた。ウィルゴットは自分の娘を危険に晒したくないあまり、可能であったはずの、逃亡という手段を放棄していたのである。娘の手をひいて、百名の敵を切り払いながら、厩舎まで走り、そのまま逃亡する。騎

士たちは徒歩であった。先に馬にさえ乗ってしまえば、ウィルゴット程の騎手に追いつく術はない。その可能性に賭ける決断ができないことを、おそらくはクリストフェルも読んでいた。

「……もう寝なさい。明日は早くにここをでないといけない……」

「わかりました。おじ様とお連れの方と、ズラタンさんのお部屋を
用意したら……」

そう言つて、二階へと去っていった。

「……ふん……ウィルゴット、お前の娘は両親にそっくりだ……
頭はいいのに頑固で向こう見ず……」

スヴェンは独りごちしながら、半分ほど残っていたワインを一気に流し込んだ。

「スヴェン様……お嬢様は……」

「明日は連れていくしかあるまい。最悪の場合は斬り合いになるが、俺とニルスがいれば、どうにかフレデリカを連れて逃げるぐらいはできる。よく分かっているよ、フレデリカは……。母親のことも話してやらねばならん。いつかは……こういう日がくるはずだったんだ……」

「お戻りになつたあとはどうされますか？」

ズラタンはウィルゴットとフレデリカの秘密を知っていた。クリストフェルのことも知っている。スヴェンが一緒であれば、危険はあつても、フレデリカを奪われる様なことはないと確信していた。

「状況次第だな。追つ手に狙われる様な状況なら、そのままどこか

に姿を暗ます必要がある。そうでなくとも、やはり、クリストフェルに居場所を抑えられているのは危険だ。フレデリカは俺が預かるしかないな」

「・・・どうか・・・お嬢様をお願いいたします・・・」

「ああ、農園を頼む。彼女の帰る場所はここしかないからな」

翌朝、使用人たちが運んできた二台の大きな荷馬車に、騎士達の死体の入った樽が乗せられた。イエテポリまで農産物を輸送するのに使うものだが、七十個もの樽を載せるには二台が必要だった。農園の使用人数名がその輸送を手伝う。スヴェンとニルスは乗ってきた馬にまたがった。フレデリカはスヴェンの後ろに座っている。

「スヴェン様、よろしくお願いいたします・・・」

ズラタンの言葉は、おそらくは三人が農園に戻ってはこれない事を承知してのものだった。

「ああ、済まんが、ウィルゴットの埋葬と葬式を頼む」

スヴェンはその一言を残し、馬に拍車を掛けた。

フレデリカ（後書き）

なんだか、ノックから暗い話ですが、シリアスな展開で行こうと思
ってますんで。まあ、流れ次第ですけどね。

クリストフェル

スヴェン、ニルス、フレデリカと十名程度の使用人たちは、重い荷物を抱えながらも全速力で街道を進んだ。行き先は第二騎士団長クリストフェル・エリクソンの居館である。本来第二騎士団は北方二公領、ブレーキング公領とポッテン公領が管轄で、領境沿いの帝国本領内に駐屯している。

帝国が誇る四つの騎士団の長には、一代侯爵位が与えられていた。これを通称四剣候と呼ぶ。騎士団の駐屯地は侯爵領として当たara得られたものであり、その税込によって騎士団は維持されているのである。だが、軍の主力を率いる騎士団長は侯爵領に常にいるわけではない。軍の重鎮である彼らは戦時中以外、一年の半分を帝都で送る必要がある、帝都の中か、その郊外に邸宅を構えるのが普通であった。第二騎士団長クリストフェル・エリクソンも帝都から程近い場所にその居館を構えている。

文官と違い、あくまで軍事の担当者である彼らは帝都の内部に家を構えることを好まない。都合上、どうしても、武装した兵士が入入することになるから、街中では何かと差し障りがあるのだ。元々ほとんど無人の土地を選んで邸宅を構えるのだが、多くの兵士が集まることから、商魂逞しい者達が近所に店を構える。騎士団長の屋敷を中心に、小さな村のような集落が形成されていた。邸宅は高い丘の上にある。

騎士団長公邸という正式名称で呼ばれる建物の周りには、その警備の名目で数百名の騎士たちが駐屯していた。昨日、クライン農園を襲撃した騎士たちも、この公邸の警備を任務とする者たちに相違なかった。

早朝から飛ばして来たが、すでに夕刻を過ぎている。二台の大型の荷馬車が公邸前の門前に到着すると、あたりは騒然となった。警備の騎士たちが集まり、周囲を囲む。使用人たちは震えてその場に立ち尽くしてしまった。

「ここは帝国軍第二騎士団長クリストフェル・エリクソン侯爵の邸宅である。何者がどんな理由をもってここに現れたのか？積荷は何か？」

警備の責任者であろうか。高圧的な態度で詰問してきたために、スヴェンはムツとした。

「我々はクライン農園の者だ。お前たちの仲間が、農園に大切な物を忘れていったので届けに来てやったのだ。そのような態度でいいのか？道理と礼節をわきまろ」

口調は強くはない。だが、挑発というよりも相手を怖気付かせるための返答だった。その時、邸宅の門が開いて別の騎士が現れた。新たに現れた騎士はケガをしているようで、腕を吊り、左目にも包帯を巻いている。

「スヴェン・ホシユベリー殿ですね？」

スヴェンはその騎士に見覚えがあった。先日の斬り合いの際、退却を指令した人物である。あの百名の指揮官であったのだらう。腕と顔のケガは、スヴェンの馬術によって、馬体と蹄をたたきつけられてできたものである。そして、おそらくは、ウィルゴットに瀕死の重傷を負わせた張本人でもあった。

「名は？」

スヴェンには答えずに、騎士の名前を問うた。

「ベール・エストマンと申します。騎士団長から一隊の長に任じられております」

男は僅かに震えていた。疲労困憊していたとはいえ、ウィルゴットに致命傷を負わせたほどの剣士である。しかし、それゆえにスヴェンにはかなうまいということも理解していた。

「心配するな。あんたに復讐しようなんて思つてはいないさ。積荷の樽の中は、先日ウィルゴットと戦つて果てた騎士たちだ。蜂蜜酒に漬けてあるから、腐敗はしていない。ただ、首と胴体が離れていた死体には取り違えがあるかもしれないから、確認してから遺族に届けてやって欲しい」

「お心遣い、かたじけなく・・・」

「嫌な役回りばかりで気の毒ではあるが・・・」

「いえ・・・、クリストフェル侯爵がお会いになります。どうか中へ・・・」

スヴェンは使用人たちに積荷を下ろしたら荷馬車と共に農園へ帰るように命じた。すでに夜であるから、イエテポリにある農園の宿舎で一泊するのが良いだろうと、フレデリカが付け加えた。使用人たちの心配そうな視線を浴びながら、スヴェン、ニルス、そしてフレデリカが公邸の中に入っていった。

「スヴェン、相変わらず元気そうだな」

「愛想のいい挨拶なんぞ貴様には似合わんし、俺もいらぬ。なぜあんなやり方をした？」

スヴェンは冷静ではあるが、声には怒気がこもっていた。後ろから付いてきた、ベールがビクリとする。負傷した身ではあるが、主のことは命に変えても守らなければならない。

「ベール、そう身構えなくていい。この男はこちらから何かしない限りは、手を出してはこない。粗野に見えるが、道理にはこだわる男だ」

「答える気はないのか？」

「いや。およそのことは予想が付いていると思うが、まず、お前の知らないことを話してやるわ」

部屋の中には五人だけである。クリストフェル、スヴェン、ニルス、フレデリカ、それにベールという騎士である。五人とも立ったままで話していた。応接室でも執務室でもない、おそらくは何かの小規模なパーティーなどで使うようなホールのような広い部屋である。

「帝が病臥されている。医師の話ではそう長くないとのことだ。内密にされているがな」

「そうか・・・」

スヴェンは言葉を詰まらせた。この一言だけで全ての事情がわかる。

「陛下はまだ正式に立太子されておられない。直系の継承候補は幼いお二人のみ。五歳のアーギュスト大公と三歳のアストリッド大公だ。まだまだ内心、独立の機会を狙っているスコーネ、セーデル両公爵に加えて、北方にはつい最近まで反乱の軍を維持していたブレーキング公爵がいる。他の諸公とてどう動くかわからない。そうなれば・・・傍系とは言え、唯一生存している成人した皇族、陛下の

妹君を推戴しようという動きも出てくる。女帝とは言え彼女であれば……」

「レーナ侯爵夫人が私の母ですか？」

「っ？」

フレデリカの言葉に、スヴェンとクリストフェルの両方が意表を突かれた。

「クリストフェル卿、あなたが私を必要とする理由はそれ以外思い浮かびません。皇妹にして、宰相閣下の婦人、そして、四剣侯として女性ながら近衛騎士団を統べるレーナ・クルーガー様が私の母、そうなのですね……」

長い沈黙が彼女の言葉を肯定していた。

「なるほど……その洞察力が正しくそれが真実であることを証明している。フレデリカ内親王殿下……」

「内親王とは帝の嫡出の女子、皇孫の女子、皇姉、皇妹に与えられる称号のほず……」

「いずれあなたは内親王たる資格を得ることとなる」

「それがあなたの狙いですか？」

フレデリカはまっすぐにクリストフェルを見つめた。

「私は認知されていない皇族のほず。どんな政治力を駆使するつも

りかわかりませんが、皇婿となられるクルーガー侯爵が認めるはずはありません。あなたはむしろ、私の存在を使ってレーナ侯爵夫人の推戴を阻止しようと考えておられるのではありませんか？女帝推戴派に亀裂を入れるために……」

誰もが、フレデリカの洞察力に舌をまいた。自分自身の出生の秘密を確信しながら、冷静にその意味を捉え、クリストフェルの狙いまで読んでいる。

「そこまでお分かりなら……」

「だからと言って納得しているわけではありません。どうして、父を……いえ、あなたの意図はわかります。わからないのはあなたの心です！」

クリストフェルはフレデリカの意表をついた発言にうろたえることこそなかったが、一瞬、呆然としていた。信じがたいほどの洞察力を持つフレデリカだが、言葉に感情がこもれば、彼にとっては子供である。この一言がクリストフェルを冷静にした。

「あなたにとつても父は身内のはず……」

「それも、今におわかりになります。政治とは、時として人の心を捨てて行わねばならない……」

「あなたの意図通りであれば、私が政治のことなど考える必要はないでしょう？」

「いえ、皇族であれば、政を無視することなどできません。政治にかかわらないつもりであっても、存在自体が政治的な意味を持つ。逃れられるものではないのです」

スヴェンは一瞬だけ、クリストフェルの目に光るものを見た。だが、彼の顔からは感情が消えている。昔からそうであった。クリス

トフェルが『何を考えているのか』はわかる。付き合いは長い。兄弟として育ったのだから。だが、『何を思っているのか』はわからなかった。子供のころからずっとである。

突然、フレデリカは一瞬倒れるかのように前方に体を傾けた。すぐ横にいたニルスが支えようと身を屈めた瞬間、ことは起こった。

ニルスには何が起こったのかわからなかった。ベールも、スヴェンですら身動き一つできなかった。フレデリカの動きに僅かにでも反応できたのはクリストフェルだけである。そして、それがなければ、クリストフェルは命を失っていた。

彼の腕からは血が滴り落ちていた。

「これが血筋と言うものか・・・ウィルゴットが剣術を教えていたとは思えないが・・・」

フレデリカの手にはニルスの腰から抜き放たれた長剣が握られていた。クリストフェルは剣を抜く暇もなく、それを右腕で受けたのである。

「ケダモノっ！あなたはケダモノよっ！人の心を失ってまで、権力が欲しいのっ?!」

フレデリカの言葉には答えず、クリストフェルは腕を振って刃を抜いた。フレデリカはさらに斬撃を浴びせようとした瞬間、カアツンと言う音と共に長剣が大理石の床に落ちた。

「フレデリカ……ウィルゴットはお前に復讐者になって欲しいとは思っていない……」

長剣をたたき落とししたのはスヴェンだった。それがなくとも、クリストフェルは後ろに飛び、いつの間にかベールはその脇に回っていた。ベールは腕を吊っており丸腰である。スヴェンがそうしなれば、フレデリカの斬撃を身代わりになって受けているはずであった。

ゆっくりと、ニルスが近づき、長剣を拾った。几帳面に胸にしまつてあつた布で血をぬぐつて鞘に収める。その動作にはこの場の空気を落ち着ける効果があつたのかもしれない。

「スヴェン……フレデリカを私の元に置くのは諦めよう……。だが、他の者には利用されたくない。これから、帝国は戦禍に見舞われる。彼女を連れて安全な場所に隠れていることだ。できれば、海に向こうにでも逃げるのが一番いい」

「なぜ俺がお前の思惑通りに動かないといけないんだ？」

「俺の思惑など関係ない。それが、たぶん、お前の考えにも沿うと思つたからだ」

スヴェンは落ち着いていた。だが、その目には怒気がみなぎっている。

「お前が一緒だった時点で、さっきの考えはもう放棄していた。ウィルゴットとお前は違つ。わざわざ目立つように騎士たちの死体を運んできた。屋敷の外では軽い騒ぎになっているだろう。ここでさ

らに斬り合いなどしたら、ごまかしようがなくなる。不都合なことが多すぎる。そうなったとしても、お前はフレデリカを連れて逃げてしまうことだろう」

お互いの考えは全て分かっていた。だからこの二人の間で勝ち負けがあるとすれば、ほとんど運だけのものだった。クリストフェルにとっては、ウィルゴットの農園にスヴェンが訪れた時点で負けだったのである。

「これを持っていけ」

おもむろにクリストフェルは、側のテーブルに置かれていた革袋を投げて寄越した。ずしりと重い。

「半分は金貨、残りは宝石にしてある」

「金で言うことを聞かせようつてのか？」

「元々お前のものだ。エリクソン老の遺産の持分を俺に押し付けていったら？その一部だ。できれば全部返してしまいたいが、根無し草のお前にはどんな形にしても持ち切れないからな」

その言葉を聞いて、スヴェンは革袋を腰に縛り付けた。

「クリス・・・二度とフレデリカに手を出すな。その時は・・・必ず俺が殺す」

剣は抜いていない。睨みつけているわけでもない。ただ、淡々とセリフを読むように話しただけである。だが、それを聞いたベール

の額には汗が浮かんだ。殺気とは言葉や視線に宿るものではない。この時ベールは初めてそう確信していた。

「お前に命を狙われるのは、百人の敵に一人で戦わねばならない状況よりも面倒だ。十万の軍勢に囲まれていたって油断できないからな。肝に命じておこう・・・」

クリストフェルは振り返りもせず、会談の会場となったホールから出て行った。

「フレデリカさん、行きましょう・・・」

そう声をかけたのはニルスだった。フレデリカはその場にしゃがみ込んでしまっていた。そして、父親が死んでから初めて声を上げて泣いていた。

クリストフェル（後書き）

この話・・・自分でもびっくりするぐらいシリアス展開だなあ・・・
もう、今更、軽いノリに持っていくのは無理ですかね・・・

旅立ち

追手はなかった。クリストフェルは無用に約束を破る男ではない。そして、彼が最後に口にしたことは本音だった。スヴェンに命を狙われるとなれば、何処にいても安心できなくなる。放浪の民であるスヴェンは、何処にでも潜り込むことができる。いや、こそこそせよとも、屋敷に侵入してくることを誰も止めることはできない。仮にベール・エストマンが万全であったとしてもである。

スヴェン自身もそう確信していた。そのため、一度、農園まで戻って十分に準備をしてから、旅に出ることにしたのである。クリストフェルの公邸を出たのはすでに夜であった。まさか、公邸の周りの集落に泊まるわけにもいかず、暗闇の中、馬を駆ってイエテポリの宿舎についたのはすでに深夜である。

使用人たちはまだ誰も眠りについていなかった。主を失い将来への不安を覚えているのもあったが、そこについては、ズラタンが心配ないと言ってくれている。心配なのはフレデリカのことであった。だから、スヴェンやニルスと共にフレデリカが宿舎に現れた時は、みな一様にほっとしたのである。

翌朝早朝にイエテポリを発つて、夕刻に農園についたときには、先日から涙腺が緩みつばなしのズラタンが号泣して喜んだ。

「ズラタン、帰っては来たがすぐに旅立たねばならない。これから帝国は荒れる。フレデリカを巻き込まないためには、一箇所にとどまることは危険だ……」

「そうですか……致し方ありません……」

「農園は任せるが、直接戦禍に巻き込まれるようなら、無理せず逃

「げてくれ。なに、いつでもやり直しは効く」

そう聞いて、ズラタンはニヤリと笑ってみせた。

「立ち直りの早さが私の売りです。また、一から作り直せばいいのです。今度は、スヴェン様と一緒にいかがですか？」

「冗談めかして言うてみせた。この涙もろい男は、これでもかなり豪胆な質であった。」

「俺にそんなものが向いているわけがないだろう？」

「意外とお似合いかもしれませんよ？騎士団よりはマシじゃないでしょうか？」

「言うてくれるじゃないか」

悲嘆にくれてばかりでは入れなかった。ズラタンがこのように立ち直ったのは、フレデリカの様子を見てである。農園を発ったときに比べて、なんと弱々しいことが。今になって、父親を失った悲しみを理解したかのようであった。力なくうなだれ、一言も話さないフレデリカを見て、逆にズラタンは明るく話しかけた。

「さ、お嬢様。お疲れでしょう？今日はもうお休みになってください。ああでも、夜食を用意しておきましたから。お嬢様のお好きなグラフラックス（鮭のマリネ）もありますよ」

だが、フレデリカは何も言わず寝室に向かおうとした。まるでズラタンの声も聞こえていないかのようであった。それに気づいたズラタンがフレデリカに近づこうとしたのをスヴェンが留める。ふいに、ニルスがフレデリカを引き止めた。

「フレデリカさん。食事は取ったほうがいいです。明日には準備を済ませて、明後日には旅立たないとならないんですから。少しでも体力をつけておかないと、体がもちません」

「・・・」

フレデリカは不思議なものを見るような目でニルスを見た。実を言えば昨日の夕方からまる一日以上一緒にいるのに、まともな会話をしたのも始めてだった。食事の準備の手伝いの時や、騎士団長公邸でも多少の言葉は交わしていたが、まともに目を見て話したのは始めてである。

「亡くなった方の分まで、前を向いて進んでいかないといいけません」

静かな、静かな声だった。十四歳にしてはあまりにも大人びたセリフであったが、不思議とそうは感じさせなかった。それだけのものが僅かな言葉の中にこめられていたのだ。だが・・・

「あつ・・・あなたに何がわかるのっ!？」

フレデリカはズラタンが肩を竦める程の声を上げ、キツとニルスを睨みつけた。これほど感情を表に出すのはフレデリカには極めて珍しいことだった。ズラタンは息を飲んで、スヴェンを顔を見る。だが、スヴェンは腕を組んで何も言わない。ズラタンが何事かを言おうと口を開いた瞬間、スヴェンが視線でそれをおしとどめた。

ニルスは懐から何かを取り出した。

「私の・・・両親の遺髪です」

はっとしたように、もう一度フレデリカはニルスの顔をまじまじ

と見つめた。ニルスはニコリと笑ってみせた。

「両親とも8年前のセーデル公領での反乱に巻き込まれて亡くなりました」

「・・・」

「ヴェスタラの騎士達が暴走し、兵士でもない父を惨殺して、母は蹴りものにしたあとで、やはり殺されました。私は母に押し込まれた隠れ場所で、ずっとそれを見ていました」

ニルスはフレデリカから視線を外さず、まばたきすらせずに話続けた。淡々とよどみなく、笑みを浮かべたままで。

「私が無事だったのは、騎士たちの暴拳に気づいたスヴェン先生が家に駆け込んで来たからです。先生はリーダー格の男を斬り捨てましたが、それ以外の者は部下たちに取り押さえさせて、軍法会議にかけました。隠れ場所を見つけて私を保護した先生に私は言いました。あいつらを殺してやりたいって」

気づくとズラタンは再び涙を流していた。情の厚い男である。いや、三人と共に農園に戻った他の使用人たちもいつの間にかニルスの話を聞きいつていた。

「先生は言いました。昨日と同じように。私の両親は私が復讐者になることを望んではいないと・・・。今でも、あの騎士たちが憎い。殺してやりたいと思うこともあります。でも、それでは、前に進むことはできません」

ここで、ニルスはしばらく言葉を切った。フレデリカは視線を落とし、どうしていいかわからないような様子だった。

「フレデリカさん、泣いてもいいし、甘えてもいい。でも、投げやりになつてはいけません。今は、立ち止まっている余裕はないんですから」

それだけ言うと、ニルスは黙ってフレデリカを見つめた。それを見たスヴェンは、手を振って使用人たちに変えるように合図をし、ズラタンの背中を押して、屋敷の中に入っていく。

「スヴェン様・・・あの、ニルス君ですか、彼の話・・・」

「ああ、本当だ・・・ちなみに、その騎士達は位の高い貴族の遠縁の者達でね。騎士団からの除籍だけで、あとはお咎めなし。俺が斬つた首謀者以外は全員生きている。それで嫌気がさして俺は騎士団を辞めたのさ」

言葉には多少は自重の響きがあった。

「ニルスはある人に預けてあつたのが、一年ほど前に再会してな。剣を教えて欲しいと言って聞かないものだから、連れて歩いている言つとくが、あいつが剣を学んでいるのは復讐の為じゃない。自分が大切な人間を守れる程度には強くなりたいたんだとさ」

スヴェンはわざわざ外のフレデリカにも聞こえるように大きな声でそれを言った。フレデリカは立ち尽くしたま動かない。ニルスはそれ以上何も言わなかったが、そのままフレデリカを見守って立ち続けていた。

「スヴェン様・・・お嬢様は・・・」

「ニルスがいるから大丈夫だろ」

「しかし・・・」

「腹が空けば入ってくるさ」

「ニルスさんは・・・」

「あいつの我慢強さと意地っ張りは筋金入りでね。フレデリカが食べると言わない限り食べないし、家に入らないならそれにも付き合っただろうさ」

スヴェンは勝手に棚からワインを取り出し、自分で注いで一気にあおった。ズラタンにも注いでやったあとは、ビンから直接ラツパ飲みを始める。続いて、むしゃむしゃと料理を口に運び始めた。

「旅慣れた人間には当たり前のことだ。食べられるときには腹いっぱい食べて、眠れるときにぐっすりと寝る。たとえ何があるうとな前を向いて進むつてのは、ま、人生つつう旅を立ち止まらずに続けるって言うことだ」

一気にワインをあおったせいか、スヴェンは急に饒舌になった。ズラタンは幾分呆れたような顔をしたが、入り口の方に目を向けると、驚いたように動きを止めた。

フレデリカがそこに立っていた。ニルスも後ろに、まるでエスコートするかのよう立っている。

「おじ様・・・その・・・ニルスさんも・・・お腹がすいていると

思うし・・・私・・・あの・・・」

「ん？別にまだ二人の分にまで手はつけてないぜ。おっ、しかし、このグラフラックスは絶品だな・・・早く座れよ。全部食っちゃまうぞ。疲れたときの俺の胃袋は底なしだからな」

スヴェンのうまくもない冗談に笑顔こそ見せなかったが、フレデリカは席についた。几帳面なことにちゃんと短く祈りの言葉を口にしてから食事を始める。それを確認してからニルスも食べ始めた。スヴェンはもぐもぐと口を動かしながら、多少は呂律の回らない感じで話し続ける。

「ところでだ、もう自己紹介も不要かもしれないが、お前らまだ酒も飲めないようなガキ同士がお互いに『さん』付けて呼び合っているのはちょっと気色悪いぜ。これからしばらく一緒に旅をするんだ、ま、仲良くしてくれ。ほどほどにな」

最後の一言には多少下品な意味がこめられていたようであるが、生真面目な二人は酔い始めたスヴェンの言葉を丁重に無視した。スヴェンはニヤリと笑って、再びワインをラツパ飲みする。ニルスだけは知っていたが、これがスヴェンにとつての弔いの儀式だった。そしてそれは義兄たるウィルゴットのみならず、彼との戦闘で死んでいった騎士たちにも向けられてのものであったのである。

早朝、スヴェンは農園を見下ろすことができる近くの小高い丘の上に立っていた。目の前には真新しい墓標がある。スヴェンたちが騎士団長公邸に向かっている間にズラタンが使用人たちと作ったものだった。農園に戻ってからすでに二晩が過ぎている。昨日のうち

に旅の準備は済ませてあった。

「おじ様！納屋で燻製にしていた鱒も積み込みました。父がおじ様のために、用意していたものですから」

ニルスとともに小走りで駆け上がったフレデリカが明るく言った。すでに悲嘆にくれる様子はない。

「ウィルゴット、相変わらず気の効く兄貴だな・・・」

スヴェンはそう言って、手に持っていたビンからコスケンコルヴァ（ウオッカに似た酒）を墓標に注いだ。それが最後の別れの挨拶であった。

「よし、行くぞっ！」

「何処へ向かうのですか？」

聞いたのはニルスである。風来坊の師は手紙の配達や護衛の仕事でもない限り、いつも目的地を決めるのは出立の直前だった。

「とりあえず、居眠り公のお膝元にも行くか。何かがあっても、危険が迫るのは一番最後だ」

「ノール公領ですか？」

「ああ、まあ、行ってみて、その時の状況次第だな。そこからエスラの港まで行って、海を超えてフリップ王国とやらに向かうのもいいかもしれん」

「私、あんまり遠くまで行ったことはないから楽しみです」

フレデリカの言葉にスヴェンは意地の悪い笑顔で答えた。

「ま、そのうち帰りたいって泣きべそかくかも知らんがな」

フレデリカの抗議の声は聞かず、スヴェンは丘の下に止めてある馬車に向かって歩き出した。少しだけ肌寒い風がせまる冬の気配を思わせつつも、陽の光が暖かに三人を包んでいた。

旅立ち（後書き）

第一部完・・・というわけでもないです。どちらかというところ、プロローグが終わったぐらいでしょうか。ちょっとだけ、明るい雰囲気が出てきました。

感想いただけると嬉しいです。あんまり反響がないようなら・・・このまま売れない漫画みたい中途半端に連載停止とか・・・やだなあ。

ヴェスタラ小史 上

現在（アンデルス帝十一年時点）、ヴェスタラ帝国の定義上の領土はスカーディナウイア半島全域に広がっているが、元々は縦に長い半島中央部西側の小国でしかなかった。現在帝国は本領と呼ばれるその直轄地に加え、地方公爵が支配する7つの公領と、一つの自由としからなる。本領はさらに外領と内領に別れ、元々の領土は現在の帝都レールムを中心とするごく狭い内領のみであった。

古代のスカーディナウイア半島の様子については、今から八百年ほど前、ラウラ国の冒険家、カイタスの著書、『スカーディナウイア』の記述を引用しよう。

『スカーディナウイアの地はヨルパ大陸北方、フリップ王国の北方海岸部から望む海を超えたところにある。大陸とは地続きではあるが、人の足を阻む極寒の山岳地帯が半島の付け根から、ゲルマタニアの北東部あたりまで続いており、陸路での行き来は不可能である』

『スカーディナウイアはその付け根から南に向けて、ゆるい弧を描く用な形で伸びている。その海岸線沿いには、複雑に入り組んだ入江が巨大な絶壁をなしており、これをフィーヨルドと言う。ごく一部を除いて、海岸線は極めて生活に適さない。また、農耕については南部にて僅かに広がりを見せつつあるとのことだが、北部は寒冷過ぎる気候から農耕には適さず、そこに住む者達は主に狩猟と漁業、僅かな家畜の放牧によって生活を立てている』

『半島には無数の小規模な部族が存在し、ここ百年程度で戦いを繰

り返しながら、九つの力の強い部族が現れはじめた。地域ごとに寄り集まったこうした部族たちの代表者は自らを「公^{プリンツ}」と呼び、文明的な生活を目指し始めたという』

八百年前は要するに、やっと人々がまとまりだしたというだけの半原始的な状態の時期であった。その後、しばらくの間は信ぴょう性のある史料にはスカーディナヴィアの状況は記されていない。だが、その五百年後、ヨルパ大陸全域でこの半島の民のことを思い出さざるを得ない事件が起きている。

フリップ王国の北西海岸沿いへのノルマ人の上陸である。ノルマ人はスカーディナヴィア南西部に大勢力を持った部族であり、優れた航海術と獣じみた勇猛さを有していた。それまでの五百年でフィーヨルドの絶壁を船舶基地として使えるようにするだけの技術を得た彼らは、瞬く間に現在のルワーズ伯領にあたる地域を占拠した。フリップ国王が苦肉の策として、ルワーズ伯位を与える懐柔策を取らなければ、フリップの半分程度はノルマ人のものとなっていたのかもしれない。

しかし、完全にフリップ化していったノルマ人たちは、故郷のことを忘れ始めた。ごく一部の細々としたものを除き、現在にいたるまで、スカーディナヴィアとヨルパ大陸西部の諸国との連絡は散発的なものでしかない。ただし、この入植（というよりも侵略）の最初期においては、入植者たちを載せた船舶は何度か往復しており、スカーディナヴィアに比べて温暖な別天地、ルワーズの地が南方の楽園として、半島に残っていたノルマ人達の間を広まっていた。それと共に、フリップの文化や技術が僅かに導入されていたが、多くのノルマの若者たちは過酷なスカーディナヴィアの地捨てて、ルワーズに渡ることとその前途をかけたのである。

そのため、スカンディナヴィアのノルマ人はその半数以上がルーズへの航海に挑み、その故郷においては衰退していった。そのころ、スカンディナヴィア全域においては、五百年前にカイトスが記述した力をつけた九部族が、それぞれに国といえる制度化された集団を形成していた。

半島北部のブレイキング、ポッテン、中央部にヨンショー、スコーネ、スオメル、スウェーダ、ヴェスタラ、南部にはセーデル、そしてノルマ人が建国したノールが公国を名乗り、政治制度らしきものを確率しつつあったのである。

上記九つの公国の中で最も力をつけたのはスウェーダであった。スウェーダ公国の何代目かの君主ホーコン一世は周辺のスオメル、スコーネ、ヨンショーを侵略しその領土を広げ、その晩年にはフリップをならって王号を使い始める。スウェーダ王国は次代のハルステンの時代にスカンディナヴィアの全勢力を屈服せしめ、その君主たちを臣とするにいたる。スウェーダ王国の栄華は二百年以上に渡って続いた。その間には細々としたヨルパ大陸西部との貿易からその文明を吸収し、土地に合わせた独特の文化を築いていった。しかし、スウェーダ王国とその臣下である公爵を君主とする藩国との関係は、隷属以外の何者でもなく、度重なる搾取の中で八公国は衰退していった。

大きく代わったのは今から五十年ほど前である。スウェーダ王国誕生以降、スカンディナヴィアでは、半島全体を支配する君主の名を用いて年号としているため、以降はそれを使って述べる。

約七十年前にあたるインゲ一世の二年、一人の名君が藩国の一つ

であるヴェスタラ公国で生を受ける。ヴェスタラ公爵ヤーノ・ステンロースの長子ヨハン・ステンロースである。ヨハンは父親の死により二十三歳で公爵位を継承し、インゲ一世の継承者たるインゲ二世の十五年、二十五歳のヨハン・ステンロースは搾取される一方の公国の状況を打開するための政治を始める。

ヴェスタラはスカーディナヴィアの他の公国と比べても極めて貧しい国で、比較的標高が高いために農耕には全く適さず、その生活は文明的と言えるかどうかぎりぎりの状態であった。しかし、この地に生きる人々はその分極めて器用であり、金属の優れた加工技術を有していた。ヨハンは武器や生活用品、装飾品などの製造を奨励し、鉱山資源豊かな南方のノール公国から原材料を大量に仕入れ、加工工業を発展させた。

続いてヨハンは、若手の商人たちに融資を行ない、それらの商品を公国の外で大量に売りさばく販売網を確立する。一説によればヨハンはノール公国に上陸したという、メデイサラ商人からそのアイデアを享受されたとも言われている。その結果、インゲ二世の二十五年にはこの販売網がスカーディナヴィア全域に広がり、ヴェスタラ公国は大いに潤い、また、スウェーダ王国の搾取に苦しむ各藩国も、優れたヴェスタラ製の道具類の普及によって、農耕、漁業、狩猟、遊牧などの生産力が著しく向上し、次第にスウェーダ王国の圧倒的な優位性は過去のものとなっていくかに見えた。

このことを憂慮したインゲ二世はその即位から二十七年目にヴェスタラ製品へのスカーディナヴィア全域における特別関税の導入という強引な手段で、この貿易網の崩壊を企図する。それがスウェーダ王国終焉への序曲となるのはインゲ二世は思ってもいなかった。

ブレーキング、ヨンシヨ、スコーネ、ウブサラ、スオメル、五

公国がこの関税の実施を拒否したのである。五公国は特にヴェスタラ製品によつて、著しく生産力を増大させており、関税の導入は公国経済に大きな影響を与えるからであつた。それ以外の、ポツテン、セーデル、ノールの三公国も全ての藩国が導入するまでは、自分たちも保留する旨をインゲ二世に伝えてきた。

臣下であるはずの藩国に始めて齒向かわれたインゲ二世は激発する。ヴェスタラと隣接し、最も早く関税の実施拒否の意向を示したスオメル公国に対して、討伐の軍を發したのである。スオメルは藩国の中でも最も国力の充実した公国であつたが、軍事力は不十分であつた。わずか一ヶ月で公国首都ヘルシンフォスが陥落し、公爵の一族は根絶やしにされてしまう。

インゲ二世にしてみれば、これは当然の討伐であつた。宗主国の意向に逆らふことなど、許されるはずもなく、真つ先に反抗の態度を示したスオメルを滅ぼすことで、他の藩国は素直に従うようになると考えていたのである。だが、結果は思惑とは正反対の物となつた。インゲ二世の誤算は急成長した藩国の力を見誤つていたこと、藩国同士が連携して反抗することなどないとかをくくつていたこと、仮に手を結んで反逆を企てるにしても、その中心となれるような国はスオメル以外にはないと考えていたことによる。スオメルに変わつて、藩國中第一位の国力を持つようになったのがヴェスタラであつた。そして、ヴェスタラ公爵ヨハン・ステンロースこそが、スオメル公爵以上に反抗勢力の象徴となりえる人物だつたのである。

ヴェスタラ小史 下

ヴェスタラ公ヨハンは、すでにその経済政策によって高い評価を得ていた。そうでありながら、インゲ二世の関税導入に対して沈黙を守っていたのは、各藩国の対応を伺っていたのである。決して好戦的な君主ではなく、あくまで治世の人との評価であって、それゆえにインゲ二世はヴェスタラに対して直接武力に訴えることを最初は控えていたのである。

スオメル進軍はヴェスタラに対して直接の驚異となった。元々スウェーダ本国とヴェスタラの領土は直接接してはおらず、間には最大の藩国たるスオメルが存在していた。元々は国力も最弱でしかない。しかし、ヨハンの継承以降、急激に経済を成長させたヴェスタラは、人口不足であるにもかかわらず、巨大な経済力を背景に軍事力も密かに強化していたのである。

ヨハンはまずスウェーダ王宮内に味方を作り始めた。スウェーダ王宮内においても独裁傾向の強いインゲ二世に反発する勢力は存在していたのである。彼らは王太子ホーコンの元に集い元々父親と不仲であったホーコンは関税の導入にも反対の立場を取っていた。ヨハンはその間隙を付き、王太子派の宮廷人たちに賄賂を送るとともに、反乱の準備を進めさせたのである。

それと並行して、スオメルの壊滅によって衝撃を受けた各藩国に激を飛ばし、反スウェーダ同盟を結成し、その盟主となった。これはインゲ二世の三十一年、スオメル公国壊滅の翌年のことであった。

だが、時代の動きはヨハンの予想すら超えて加速する。翌年、インゲ二世と王太子派、そして反スウェーダ同盟の対立が激化する中、当のインゲ二世自身が急病で崩御したのである。一説には王太子派の一部の過激派が毒を盛ったとも言われているが真実は定かではない。そして、死に際のインゲ二世自身が、スウェーダ王国崩壊の直接のきっかけを作ってしまう。インゲ二世は王太子派を呪うあまり、正式に立太子したはずのホーコンを差し置いて臨終の間に次男ハルステンへの継承を遺言したのである。

このことにより、スウェーダ王宮は長子ホーコン派と次子ハルステン派に二分され、継承者が定まらずに空位時代に入る。そのため、反スウェーダ同盟への対応も定まらず、同盟側も二派の対立を注視して息を潜める状態が三年も続いた。

沈黙を守る反スウェーダ同盟が動き出したのは、混迷を深めるスウェーダの宮廷内でホーコン派の一派が藩国との妥協によって、その軍事力を味方に付けようとしたこと画策したことからだった。ホーコン派の重臣であるアルヴァ・シベリウス侯爵の独断で、反スウェーダ同盟に対し、『ヴェスタラ製品に対する特別関税導入の撤回』、『旧スオメル公国領の分割譲渡』、『各公国に対する内政干渉権の縮小』と言う破格の条件を提示し、後継者争いへの軍事介入を依頼。その結果、王都スタクファルムに進軍した反スウェーダ同盟軍によってハルステン派は一掃され、ハルステン本人は旧スオメン公国首都ヘルシンフォスに幽閉、王太子ホーコンが登極し、ホーコン三世となる。

ホーコン三世の後見人であり宰相に就任したアルヴァ・シベリウスは、事前に提示した三つの条件を遺漏なく履行した。ただし、それには一つの思惑が働いていた。旧スオメル公国領の分割譲渡につ

いて、同盟での区割りを同盟国同士の議論にあえて任せたのである。スオメル領の分割の議論は紛糾。一度まとまらずの藩国同盟は崩壊の危機に瀕し、さらにアルヴァ・シベリウスは各公国重臣たちに賄賂を送って切り崩しを測った。

策士としての面目を施したはずのシベリウスに誤算が生じるのは藩国同盟によつてではなく、王国の内側からであった。人望はありながら、決断に安定性を書き、機を見る慎重さに欠けるホーコン三世は崩壊の危機に瀕死したと思われた藩国同盟に対して反逆討伐の名目で親征を決意する。それは、憎んでいたはずの父王と同じ発想であった。亀裂が走った藩国同盟に対してスウェーダ軍が攻めかかると、恭順を示し、アルヴァの与えた特権を返上する公国が出てくるとたかをくくっていたのである。

事態はホーコンの予想とは逆の経緯をたどった。もつとも、ホーコンの判断で失敗だったのは、進軍の先がヴェスタラであったことである。同盟の要であるヴェスタラがあっさり破れてしまえば、あるいはホーコン三世の思惑は実現していたかもしれない。しかし、ヨハン三世は腹心の將軍カール・ピランデル、宰相グスタフ・ストーメア、そして無位無官ながら秘密外交官として活動したステファン・エリクソンら三傑の協力の元、数カ月を渡ってスウェーダの軍勢を支えて見せた。

その様子を注視していた各藩国領主達は、ヴェスタラ公爵ヨハンを旗印にスウェーダ討伐の為に再度まとまり、スウェーダ王国首都スタクファルムに進軍する。これは、ステファン・エリクソンが自ら各国を回つての外交工作の成功であった。王都への複数の公国軍の進軍を察知したホーコンは慌てて踵を返して撤退しようとしたが、これは整然としたものではなかった。カール・ピランデルを先頭にしたヴェスタラの騎兵部隊は疾風のごとき勢いで、統制の十

分に取りれていない撤退中の軍を強襲。ホーコン三世は雑兵に返送して逃亡しようとしたところを惨殺され、時を同じくして藩国同盟軍によって王都スタクファルムは落城。スウェーダ王国はここに潰えたのである。ホーコン三世の登極からわずか6年ことであった。

各藩国はスウェーダの軛から抜け出し、独立の道を歩むかに見えた。スオメルに加えスウェーダの領土の分割交渉は、神業とも言えるヴェスタラ宰相グスタフス・ストーメアの調整と、秘密外交官ステファン・エリクソンの綿密な根回しによって、特に大きな混乱もなく解決。しかし、各公国はそれぞれが独立してやっていくには力不足であった。戦後の混乱が一応落ち着いた翌年、各藩国はスウェーダに代わってヴェスタラをスカーディナヴィアの盟主となることを求める。これに対してヴェスタラ公爵ヨハンは数度に渡ってそれを固辞したが、ウブサラ公爵ゲオルグ・ワルドナーの説得により、スウェーダに代わって王号を用いることを決意。ステンロー朝ヴェスタラ王国の建国が宣言されたのである。

だが、新たななるスカーディナヴィア半島における王権はまだ不安定であった。セーデル、ブレーキングなどスタクファルム攻略の主力となった公国が再度ヴェスタラ中心の体制からの離脱を宣言、度重なる反乱に悩まされながら、ヴェスタラ王ヨハン一世はわずか五年でその在位を終える。あとを継いだのはわずか二十五歳の王太子アンデルスであった。

この状況でも、ヴェスタラに味方したのは、アンデルス王の後見となったウブサラ公爵ゲオルグ・ワルドナーであった。ゲオルグはセーデル、ブレーキング以外の公爵に働きかけ、アンデルス王に

忠誠を誓わせ、さらにその独立権を放棄させ、ヴェスタラの地方領主としての地位に下ることを認めさせる。これは、セーデル、ブレーキングの二国の狙いがヴェスタラに代わる地位を狙ったものであったことから、無益な戦乱が継続することを望まない世論と武断的な正確の強いセーデル、ブレーキングよりも経済大国たるヴェスタラの元にこそ、スカーディナヴィアがまとまりうるとの考えからであった。

その動きに対し、ウブサラに隣接するセーデル公がウブサラに進軍する。アンデルス王はこれをウブサラに対してではなく、王国全体に対する攻撃であるとし、自らの親征によって鎮圧に向かう。これにより、セーデル公は全面降伏し、他の公国と同様、藩国ではなく一地方領主としての公爵位に甘んじることをしむしむ認めることとなる。ブレーキング公は三年に渡り散発的に軍を上げるもの、ヴェスタラが整備した騎士団の力に屈服し、やはり、他の公国と同様の体制に組み入れられていったのである。その後も、セーデル、ブレーキングは散発的に反乱を起こし続けてはいたが、ヴェスタラの体制を覆す力はなく、アンデルス王は測位から十年後、スウェーダ以上の権威を持ってスカーディナヴィアを統一する君主として、皇帝位に各公爵たちの手によって推戴され、ヴェスタラ帝国が半島全体の唯一絶対の君主と認められる事となった。

アンデルス帝誕生から十一年、まだ四十一歳の皇帝は突然病に倒れる。生まれたばかりの帝国は再び戦乱の時代を迎えるのであった。

重臣一同に会し次帝の即位を論ずる

旧スウェーダ王国王都スタクファルムは、二十六年前の第一次藩国同盟による占領と、二十年前の第二次藩国同盟による落城によって王城は跡形もなく破壊されたが、戦略上の要地であることから、王城跡の上に改めて、以前よりは小規模な城が建設され、第三騎士団の拠点となっていた。スタクファルムを中心とする地域が四剣候たる第三騎士団長が預かる領地である。

第三騎士団の拠点たるスタクファルムの城砦は、現第三騎士団長ハンス・アクセル・フリースの指揮によって建設されたもので、小なりと言えども堅牢な城砦であり、かつ、ある意味で彼の個人的な趣味から、極めて壮麗であり、他の騎士団領や公爵領、帝都からの交通の便も良いことから、国政や全軍に関わる会議、地方公爵との折衝の場として利用されることも多い。通称『フリース城』はヴェスタラ本領の外にありながら、政治的に重要な建物であった。

フリース城の中で、そうした重要な会合に使われる部屋はいくつか存在する。その中の一つ、それほど広くはないが、もっとも装飾の壮麗で奥にある部屋、『白雪の間』にかつてないほどの帝国の重臣が集まっていた。フリース城の持ち主である第三騎士団長の家宰が、一人一人の肩書きと名前を読み上げる。

「帝国宰相ヴィクトル・クルーガー侯爵！」

その肩書に比して、ホールに入ってきた人物には威厳が欠けているように思われた。ヴィクトル・クルーガーは三十八歳。政治家としては若輩ながら文官の最高位たる宰相に登ることができたのは、一つにはその政治的手腕からであり、今一つはアンデルス帝の妹を

娶った事による。しかし、仮にそれがなかったとしても、その智謀があれば、いずれは政権の首座に登ったであろうというのが大方の認識であった。クルーガー家は元々権門でも何でもなく、アンデルス帝登極後に爵位を与えられた新貴族である。武官であれば、騎士団長に上げれば一代侯爵位を与えられるが、文官の身で侯爵の地位を新たに得たのはヴィクトルだけであった。

「宮廷最高顧問グスタフ・ストーメア侯爵！」

御年六十八歳の男は、頭は禿げ上がり、貴重な頭髪も全て白髪となっていた。体型は上背もなく小太りであり、風采は全く上がらない老人である。しかし、この老人なくしてはアンデルス帝の登極も、それ以前にヨハン王が王号を用いることすらなかったのである。『ヨハン王の三傑』の一人は、帝国の政治の第一線からは身をひいてはいるが、最高顧問の肩書きで、無視しえぬ発言権を維持していた。

「財務卿アンデシュ・セーデルストレム伯爵！」

ヴィクトルよりもさらに若い三十二歳の男はやや緊張した顔でホールに入ってきた。クルーガー侯爵の懐刀と呼ばれる人物である。小柄で細身。人の良さそうな顔をしており、見た目からは決して傑出したものは感じられない。しかし、この男が財務卿に就任して以降、帝国の税収は数倍に伸びており、極めて優れた政治家としての実績を上げている。

その他十名ほどの文官に続いて、軍部の高官が呼び出される。

「帝国元帥にして第一騎士団長カール・ビランデル元帥！」

銀色の髪と髭を蓄えた堂々たる偉丈夫が現れる。五十四歳。爵位

は一代侯爵を賜っているが、武人であるため、武人としての称号で呼ばれる。元々は男爵家の出身である。四剣候の筆頭であり、騎士団長としては他の者と同列ではあるが、帝国最大の宿将には非常時には皇帝に代わって軍事の全権を握るために、唯一元帥の称号が与えられていた。

「第二騎士団長クリストフェル・エリクソン將軍！」

四剣候の中でも最年少の男はまだ二十七歳の若輩であるにもかかわらず、その威風は最年長のカール・ビランデルに劣るものではなかった。硬い表情だが臆してのことではなく、感情を表さぬためにそうしている。側近たちの間でも笑った顔を見たことがないと言われる青年であった。

「第三騎士団長ハンス・アクセル・フリース將軍！」

およそ、武人とは思われないような秀囲気の男であった。三十四歳。線の細い、どちらかというと文官か、むしろ芸術家や若手の学者と思われるような風貌の持ち主である。だが、その武術は一流であり、かつ、戦略と戦術には定評がある。また武人でありながら、政治の駆け引きや謀略にも優れており、戦功だけで騎士団長に上り詰めたわけではない。『見た目に騙されるな、油断ならない男だ』と年配の武人たちが部下たちに言い聞かせるのに格好の教材とされていた。

この城の主ではあるが、この重要な会議を取り仕切るのは帝国宰相たるヴィクトルであり、この一室と運営に関わる人員を提供しているだけで、会議室内では一参加者でしかなかった。

「近衛騎士団長レーナ・クルーガー將軍！」

この部屋の中で唯一の女性であった。三十二歳。女性というだけでなく、皇室の血を引いており、かつ、宰相たるヴィクトル・クルーガーの婦人でもある。異例づくめの人物であった。その姿は、女性としても小柄でありながら、戦の女神のごとく威厳をたたえており、事実、兵士たちからはそう崇拜されていた。女性でありながら異数の剣士であり、兵を率いても負けなし将帥である。

そしてこの場で唯一、皇位の継承権を主張できる人物でもあった。

四剣候たる四人に続いて、主力である四騎士団以外の小規模部隊を率いる将帥や他の高位の武官たちの名が全て呼び終わった。フリース家の家宰は部屋を出て行った。帝国政府および軍部の幹部たち以外は、全てこの部屋から締め出され、以降は帝国宰相を司会として会議が進められる。

「すでにお聞きのとおり、まだ公表はされておりませんが、十日前、皇帝アンデルス陛下がお隠れになりました」

感情を押し殺したような宰相の言葉の後に、数瞬の沈黙が続いた。僅かに嗚咽の声も聞こえたが、誰のものかを確認しようとする者はなかった。ここは皇帝の死を悼むための場ではない。

「ここに集まる方々は私を含めてすべて陛下の恩恵を受けた方々。心痛はお察しいたしますが、だからこそ、我々には陛下の遺志を継いでヴェスタラの発展を支える責務があります」

「宰相閣下のおっしゃるとおりだ。ここで女々しく悲嘆にくれていい時ではない。これからのことを考えねばならぬのだ」

野太い、腹に響くような声を上げたのは、武官の最高位に位置す

るカール・ビランデルであった。巨大な会議卓を囲む数十人の中で、未だ嗚咽をやめぬ者に対する叱咤であった。

「元帥閣下のおっしゃるとおり。我々は今重大な決断をせねばなりません。陛下は二十日ほど前の夕食後、突然倒れられ、以後、一度も言葉を発することなく亡くなられました。陛下のご子息たるお二人の大公殿下はまだ幼く、正式に立太子されておりません。陛下のご意思が明確でない以上、我々があなたを皇帝として推戴するかを決める必要があります。今日はそのために皆様にお集まりいただきました」

再び、沈黙が流れた。今度は嗚咽も聞こえない。

「まず、次の皇帝としてふさわしいと思われる候補者を挙げていただきますでしょうか。それにはストーメア侯爵がふさわしいと存じますがいかがかな？宰相閣下……」

極めて実務的な、取り方によっては不謹慎にも思える冷静さでその提案したのはハンス・アクセルであった。年少で彼と同列にあるクリストフェルと比較して、『おしゃべり』と言われているが、クリストフェルに比べれば誰であってもそういう評価になることである。決して余計なことを言うような人物でもない。

「そうですね。国家の元勳にしてこの場の最年長たるストーメア侯爵にお願いしましょう」

若年の宰相の言葉に恐縮したようにグスタフ・ストーメアは立ち上がってそれに答えた。

「僭越ながらそのお役目をお受けいたします。まず、陛下の嫡子に

して最年長あらせられるアーギュスト大公殿下、次子アストリッド大公殿下がまず挙げられます。次にまだ幼いお二人に対して、すでに成人されている血縁の近い皇族としては、そこにおられるレーナ・クルーガー内親王殿下・・・すでにご結婚され、形式的には皇籍から外れてはおいでですが、レーナ侯爵夫人の戴冠も念頭におくことができず。それ以外には、先君、ヨハン王のご兄弟のご子息にまで広げる必要があり、そうになると、候補者は数十を超えることとなります」

誰もが承知ししている、極めて難しい問題がここにあった。単純な継承順位からすれば、その筆頭にあるのは、長子たるアーギュストであるが、未だ五歳の幼年であり、かつ、生まれつき体が弱く、不幸なことに盲目であった。生母はウブサラ公の娘であるが、やはり体が弱く出産後に亡くなっている。次に挙げられる次子アストリッド大公は僅か三歳。異母兄と違い今のところ健やかに育ってはいないが、その母親はブレイキング公爵の娘であった。つい数年前まで独立、というよりもスカーディナウエアの覇権をかけて争っていたブレイキング公との和解の条件として腰入れしてきた女性である。その推戴にはやはり慎重にならざるを得ないのだ。

アンデルス帝から三親等以内では、幼い二人以外には皇妹たるレーナしかない。ヴェスタラ帝国はやっと二代皇帝を推戴する新しい王朝であるため、特に継承に関する明確な取り決めはできていない。女帝であっても不都合はなく、また、レーナ・クルーガー自身は女性ながら武勲豊かな武人であり、皇帝にふさわしいだけの人望もある。

だが、彼女にもまだ問題があった。三十二歳、結婚後八年は経っているというのに、妊娠の兆しがないのだ。これでは、彼女が戴冠したとしても、その次は続かないことになる。

「すでに各公国は帝国に伏し、ここ数年は平穩に過ぎております。幼帝であつても我々が全力を持つて盛り立てて行けば問題ないのではありますまいか？」

「本当にそのように思つておるのか？」

若輩ながら優秀と言われる司法卿アルフレード・バウエルの言葉に厳しい口調で問いかけたのは、やはり若輩の財務卿アンデシュ・セーデルストレムであつた。アルフレードはやつと三十代に入ったばかりであるが、文官ながら武人と見紛う偉丈夫であり、秀才の名も高い。だが、小柄でお人好しにしか見えないアンデシュの言葉に窮した。相変わらずニコニコとしているが、その言葉には後輩をたしなめる厳しさが籠められていた。

「ここ数年、確かに各地方公爵は帝国に反抗する兆しはありません。しかし、ブレーキング、セーデルの二公爵は常に隙あらばと伺つております。少なくとも幼帝を推戴するならば、摂政を置いて国内を纏めておく必要があるでしょう」

アンデシュの言葉に高官たちは頷いた。ここまではほとんどの者にとつて当たり前の議論でしかなかつた。秀才言われるアルフレードは、その当たり前を嫌つて、賢しげに意見を述べてみたものの、その見識の甘さを露呈しただけであつた。宰相の懐刀と言われるアンデシュに対する対抗心もあつたのではないかと思われた。

しかし、摂政を置くことを決めたとしても、まず、誰をもつて摂政とするのか、それ以前に、幼帝を推戴するにしても、アーギュスト、アストリッド両大公のどちらとするかが問題となる。実は摂政

を置くとすれば、レーナ以外考えられない。皇室から出すべきものであるし、ヨハン王の兄弟の系譜からたどっても、他にふさわしい人物は存在しないのだ。

順当に行けば、長子たるアーギュストであるが、幼年であることは同じでも、健康面の問題がある。盲目であるし、何歳まで生きられるかわからないほど病弱なのだ。しかし、次子アストリッドの場合には外戚となるブレーキング公爵家に問題がありすぎるのである。

会議は紛糾した、というよりも沈黙のうちに時間が流れた。時折、アルフレードら若手の文官からは意見のようなものがでるが、そのたびに、アンデシユやグスタフにやり込められるだけであった。

話が進まずに、数時間が過ぎ、ハンス・アクセルが意見を述べた。おしゃべりと言われる彼にしては、いぶん慎重に思われたが、その分だけ彼が十分に熟慮しての発言であることは間違いなかった。

「まず、考えられる選択肢をまとめてみましょう。アーギュスト、アストリッド両殿下のどちらかということは別にして、どのような体制とすべきかをまず考えるべきです」

続いて、述べた彼の言う選択肢は以下の三つであった。

- 1 幼帝を推戴し、その成人するまでの間、レーナ侯爵夫人を摂政とする
- 2 レーナ侯爵夫人を推戴し、その死後、すでに成人しているであろう両殿下のどちらかを推戴する
- 3 レーナ侯爵夫人を皇帝ではなく監国として推戴し、両殿下の成

人後どちらかを推戴する

三つめの選択肢の監国とは、皇帝不在の際に代理皇帝とも言うべき立場で帝国を統治する人物である。スカーディナヴィア半島の歴史上には存在しないが、半島の政治はほとんどはフリップ王国から学んだものである。フリップ王国では過去に何度か国王不在の時期があり、監国がその王権を代理したことがあった。

「なるほど、第一案が常識的ではあるが、幼帝のどちらを推戴するかで問題が起きる。第二案であれば失礼ながらレーナ公爵夫人が亡くなるまでは、継承問題を先送りにできるし、第三案であれば幼い殿下二人が成人するまで待つて、その器量を示されてから改めて判断できるということか・・・」

低い声でそう論評したのはグスタフ・ストーメアである。第一案意外であれば、年齢からしておそらくは自分は面倒な継承問題が再燃する頃には、すでに死んでいるか、少なくとも完全に政界を引退して隠居している頃の話であろうと思われた。

そんな前宰相の言葉を皮肉げな顔で聞きながら、ハンス・アクセルは『そうです』と同意してみせた。

宰相夫妻はあえて発言を控えていた。この場で唯一、戴冠の当事者であるから当然のことで、下手に口を挟めば高官たちから反感を買うことが眼に見えていたからである。継承者候補の名をわざわざグスタフに挙げさせたのもそうした配慮からであった。だが、議事の進行はこの場の主催者たる帝国宰相が行わざるをえない。慎重に、私見を挟まずに議論を促す。

「今のご意見、三案について諸卿はどう思われますか？」

「第一案については、すでに議論の余地もないのではあるまいか？
今、我々がこうして悩んでいるのは、幼いお二人の殿下どちらを推
戴したとしても、帝国がまとまることが難しいと思われるからだ。
第二案、第三案は問題の先送りと言えるかもしれないが、候補者が
幼いという問題は時間が解決してくれるもの。両殿下の持つそれ以
外の問題も時間が経てば状況が変わるかもしれぬ」

グスタフの発言は、優柔不断な消極案にも思えるが、少なくとも
次子アストリッド大公については、数十年たつてブレイキング公爵
との関係が改善されたり、あるいは現ブレイキング公爵マルティン・
アンドレセンが死ぬなどということがあれば解決される問題であつ
た。梟雄と呼ばれる公爵も四十三歳。アンデスル帝が王位を継いだ
のは二十五歳であるから、アストリッド大公がその年齢に達する頃
には六十を越すことになる。仮にまだ元気だつたとしても、その間
に、ブレイキング公領の勢力を弱めていくことは可能であるし、仮
にレーナの戴冠という第二案を取った場合には、順当に考えてレー
ナはマルティンよりも先に死ぬ可能性は少ない。そして幸いにもレ
ーナには後継者がおらず、今以上に後継問題が難しくなることはな
いように思われるのだ。

病弱なアーギュストがそれまでに命を保つことができなければ、
自動的に次はアストリッドが戴冠することとなるし、生きていたと
しても成人して健康が回復しないなら、やはり同じこととなる。逆
に健康面が回復し健やかに育つた上で、賢明さと君主としての器量
を持ち合わせていたなら、盲目であること自体は皇帝に取ってはそ
れほど大きな問題ではない。スカーディナウエアでは過去に盲目の
名君が幾度か誕生していた。監国案を用いるならば、その時は、再
度長子相続の原則に立ち戻ってアーギュスト大公を推戴すればいい
のだ。

「なるほど、さすが叡智を誇ると言われるフリース將軍。吹雪の夜に日光が差し込んだかのようですよ」

やたらと汗を吹きながら、グスタフが絶賛してみせた。急に会議は話が単純化し、幼い大公二人の継承問題をどこまで先送りにするか、両大公が成人するまでか、レーナ・クルーガーが死ぬまでかのどちらかを決める形に会議の流れは変わっていった。見事に一石を投じたハンス・アクセルであったが、そこにどんな思惑があったのか、それは誰にもわからない。ただ、彼には『油断ならぬ人物』という、単純に賞賛とは取れない評価があるために、多くの者が内心、様々な疑惑を胸に蠢かせていた。

話は分かりやすくなったが、だからと言ってすぐ決まることではなかった。レーナを監国とするか皇帝とするかと言う問題は政治的な面だけでなく、形式やしきたりの観念論が入り込む。だが、ヴェクトルにとってはどちらでもよかった。レーナが摂政になった場合には、自分は宰相の地位を去らねばなくなる。外戚の力はブレーキング公爵ではなく、ウブサラ公爵であったとしても、目の上のたんこぶとなり、摂政と宰相という地位を夫妻で独占することを許さないであろうからだ。しかし、レーナが、皇帝もしくは監国となるならば話は別で、夫として至尊の座についた妻を支えるという名目が立つ上に、その場合は自分が外戚の立場となる。クルーガー家は元々門閥貴族などではないため、他の重臣たちからも警戒されることはない。

議論は進まないが紛糾しているわけではなかった。ほとんどの重臣たちはどちらとも決めかねている中立派である。監国案を支持するアルフレードと皇帝案を支持する式部卿ヒューゴ・ビクセルとい

うやはり若手の文官同士がやたらと声を高めてやりあっているだけであつた。

あまり、実質的ではないやり取りに、年長の重臣たちがあくびをしかけた頃、さすがにくたびれたヴィクトルが一時休憩を提案しようとした矢先、すでに八割方皇帝か監国として至尊の座につくことが決まり、当事者として一切の発言を差し控えていたレーナが口を開いてポツリと呟いた。

「血の……匂い……」

女将敵襲を予期し元帥三將に号令す

ほとんどの者はその言葉の意味を理解できなかった。いや、文官たちは理解できてなかった。しかし武官達、とりわけ四剣候はたちまち表情に緊張を走らせた。近衛騎士団長レーナ・クルーガーの危機感覚には定評がある。理屈では説明できないが、彼女が危険と感じたときは確かに危険な何かがあるのだ。『戦場の女神』という通り名は美貌からだけで得られたものではない。

フリース城の城主として警備に責任を持つハンス・アクセルが状況を確認しようと部屋の扉を開けた瞬間、一人の騎士が飛び込んできた。騎士は普段の警備用の軽装のままであるが、すでに兜には大きなへコミができていた。騎士は部屋に入ってきたものの、咳き込みつつ、興奮でうまくしゃべることすらできない。

「落ち着け。落ち着いて状況を報告せよ！」

あくまで冷静に、だが文官たちが肩を竦めるほどの大音響で叱咤したのはカール・ビランデルであった。本来であれば、騎士の直接の上司であるハンス・アクセルの役割であるが、騎士の様子から状況が逼迫していることがわかる。ハンス・アクセルが詰問するのを待っていられなかったのだ。

「ひ、東の門から所属不明の軍勢が突然城内に……」

「馬鹿なっ！ いった何処の……いや、どうやって侵入されたのか？ 兵力は？」

「せ、正確には把握できません……しかし、東の門と見張り塔が占領されました。続々と城内に侵入してきています。五千は下らないかと……」

武官たちは戦慄し、文官たちは恐慌をきたした。フリース城は第三騎士団の拠点ではあるが全軍が駐屯しているわけではない。監視すべき主要街道や、公爵領に近い城砦に分散しており、騎士団全体では五万に達する兵力を持つものの、フリース城にあるのは一万程度である。しかし、それも駐屯している部隊の兵力であって、この急場に戦闘に参加できるのはその半数程度。侵入してきたという敵兵と同数程度ということになる。すでに城内に侵入されたとあっては、奇襲の効果も相まって、数通りの力を発揮することもおぼつかない。

「い……いつたい何処の軍勢が……」

震える声で言ったのはアルフレードであるが、それは愚問であった。そんなことを確認する意味は今はない。分かっていることは、極秘であったはずの、この部屋の会議のことがどこから漏れていたということである。帝国の重臣が集うこのタイミングを狙ってフリース城を攻めてきたのだ。

うるたえる文官たちに対して、四剣候は落ち着いていた。警備の手落ちを指摘されるはずのハンス・アクセスですら動揺した様子はない。彼らにとっては、この程度のことは日常茶飯事であった。平穏な数年間であったとは言われるものの、それは、地方に駐屯する彼らの努力があつたことである。未発の反乱や表沙汰にならなかつた武力衝突はいくらでもあつたのである。これほど大規模なものはないが、それもここ数年の話でしかない。若いといえどクリストフェルですら、戦場での勲功があつて現在の地位を手にした者たちなのだ。

クリストフェル、ハンス・アクセル、そしてレーナはカール・ピ

ランデルの前に跪いた。皇帝候補と言えど今は一将たる近衛騎士团长である。そして、彼女もこの危機にあって全く動揺していない。それどころか、この部屋の中で誰よりも早く、異常を察知したのである。『血の匂い』と言う一言は、決して嗅覚で感じてのことではないだろう。武人としての勘のようなものだ。あるいは女の勘と呼ばれるものかもしれないが、口にした瞬間にはその表情は宰相婦人のものではなく、女性ながら不世出の武人として緊迫感に満ちたものとなっていた。

皇帝不在の場合、軍事の全権は元帥の称号を持つカール・ピランデルが掌握する。この場の意思決定の責任は彼にあった。

「五千もの軍勢に侵入されたとあっては、余談を許さない！フリーア将軍！城兵はこれを支えきれるかっ？！」

「すでに東の門と見張り塔を占拠されたとなると、五千以上の戦力に対してこれを支えきれるかどうかは心もとなない状況です。落城までどうにか時間稼ぎをするのやっとかと」

厳しい口調の詰問に対して、あくまで落ち着いて答えた。決して卑屈にもならず事実だけを正確に伝えている。これは、武人としては当たり前なこと、失敗を悔いていられるような状況ではないのだ。

「脱出の方法はっ？！」

「この部屋と、近くにある別の部屋からの二つの脱出路がございます。はしごを使って降り、地下道を通ってそれぞれ別の出口にでられます。合図を出せば、周辺の拠点から脱出口まで千名単位の護衛の部隊が来る手はずとなっております」

この辺の芸の細かさはさすがと言えた。ハンス・アクセル・フリ

「スは帝国軍一の策士であり、城砦の建設や防城、攻城戦の名手でもある。単純な武人ではなく、こつした脱出を目的とした仕掛けなどは、猪武者には考えられないことである。最も、単純な猪武者などが四剣候にまで上り詰めることはありえないことであった。」

「では、二つの脱出路、それぞれの案内人を用意し、要人の脱出までの間、第三騎士団を指揮して時間を稼げっ！」

「はっ！」

「ただし、脱出が済んだら無理せず、城を捨てよっ！その後は、分散した兵力を招集し、城砦の奪還の機会がくるまで待機っ！どこに駐屯すべきかは独自に判断せよっ！以上っ！」

「拜命っ！承ったっ！」

急ぐでもなく、ハンス・アクセルは部屋出て行った。時間を稼いだ後に城を捨てて脱出せよとは、本来無理な注文である。落城直前まで耐えた上で、かつ、隠し通路を使わずに出来る限りの兵力と共に城外に逃れなければならない。だが、カール・ビランデルはハンス・アクセルであればその程度のことには兎戯に等しいと理解していた。

程なくして、それぞれ二つの脱出路を案内する騎士が二人ずつ、四名が現れる。カール・ビランデルは彼らに二、三質問してから、クリストフェルに指示を与えた。

「エリクソン將軍っ！武官達を護衛し、この部屋の脱出路を用いて逃れよっ！脱出後はヘルシンフォスに向かい、文官と合流して帝都に帰還すべしっ！」

「拜命っ！承ったっ！」

これは囿であった。いかに巧妙に隠された脱出路であっても、そ

れを発見される可能性は皆無とは言えない。要人たちのうち武官だけを彼に護衛させるのは、先に逃げる方がより危険性が高いからである。ハンス・アクセルの脱出路もこの部屋からのものは幾分発見されやすい入り口になっていた。おとり作戦は脱出の場合に既定のものとなっていたのである。

「クルーガー將軍っ！宰相閣下と文官達を護衛し、もう一つの脱出路から逃れよっ！私も同行するが、文官たちと共に先行せよっ！殿しんがりは私が務めるっ！」

「はっ！」

「脱出後はヘルシンフォスで先行するエリクソン將軍たちと合流し、速やかに帝都へ帰還する！」

「拜命っ！承りましたっ！」

武官たちに比べて、文官達の方が万が一の場合の影響が大きかった。幹部ばかりが集まっているとはいえ、軍隊にあつては、騎士団長にも代理がいる。文官にも代理はいるが、帝国宰相をはじめとする閣僚たちが、同時に不在となつては、政治など出来るはずもなかった。ましては、公表されてないとはいえ、今は皇帝が不在なのである。レーナには文官を護衛せよと述べたが、実際には、カール・ビランデル自身がレーナと文官たちを護衛するものである。

この会議にあつて、騎士団長たちは十数名程度の配下の騎士を隣室に待たせていた。將軍としては当たり前の随員であるが、それが脱出時の護衛部隊となる。前方にレーナの近衛騎士団、後方にカール・ビランデルの第一騎士団の騎士たちが付き、脱出路が発見され、後方から追跡されたときには、死を賭してカール達第一騎士団が防ぐための備えである。

レーナはすべてを承知でそれを受け入れた。武人として上官に逆

らうことは論外であるということもあるが、今の自分の立場というものもよくわきまえていた。フリース城を襲撃され落城となれば、不名誉ではある。だが、帝国の重要人物たちが無事脱出さえできれば、敵の狙いはくじけ、ただの一事件で終わる。数千もの兵力を秘密裏に城砦に向けて進軍させ、不意をついて強襲するというのは余程用意周到な計画があつての事だろうが、単にフリース城一つを占領したところ大した意味はない。第三騎士団を招集して奪還の軍は発すれば、程なく解決する程度のことである。

敵の狙いは皇帝空位の時期に、中枢にある重要人物達を殺害もしくは監禁し、反乱鎮圧の号令をかけさせないことにある。仮に他の閣僚が殺害、または捕縛されようと、近衛騎士団長であり、また、帝位の継承候補者で唯一成人しているレーナが無事であれば、何があるかと体制を立て直すことは可能であつた。例え他の文官が全滅しようと思つただけは脱出を果たさねばならない。

襲撃者たちの誤算は、帝国の誇る四人の騎士団長、四剣候達の武勇と指揮能力、知略が彼らの想像を超えていたことにある。秘密の脱出路の存在ぐらいは想像できていたであろうが、彼らが脱出の体制を整える前には、フリース城の最深部にある白雪の間に辿りつけると考えていたのである。だが、それは不可能なことであつた。

白雪の間を出たハンス・アクセルは戦闘の展開されている東門には向かわず、あまり離れていない、城内の中央にある最も大きな見張り塔を駆け上がった。そこは防城戦の際の司令部となるべく設計された部屋である。昼間であれば、城内と周辺の様子が一望できる部屋であるが、すでに夜であり僅かに屋内から漏れ出る光でかろうじて城の輪郭が確認できる程度であつた。

ハンス・アクセルは司令部に入るとすぐさま当直の騎士に角笛を吹かせた。戦闘指揮用の特殊な角笛で、城内の何処にいても聞き取ることが出来る程の音量が出る。指示を受けた騎士は、司令部にある階段を登って塔の屋根の上に出た。懐のメモを確認し、取り決めに従った吹き方で合図の曲を奏でる。次の瞬間に起こったことは、敵兵には天変地異か魔法のようにしか思われなかったであろう。突然、城内の数力所から、強い光が放たれ、僅かな時間の間にその光が城を覆っていった。屋内だけでなく、屋外も明るひかりに照らし出され、敵兵の動きは丸見えになってしまったのである。

築城に造詣の深いハンス・アクセルならではの仕掛けであった。フリース城の城壁や建物の屋根には至る所に細い溝が付いている。そこには常に少量の油が流れており、城内に複数設置された管制室から火をつけると、短時間で溝に掘って火が広がっていく仕掛けになっているのだ。東の見張り塔の下にもこの設備があるが、襲撃者たちにはその設備の意味はわからなかった。今や東門周辺を除いた全ての箇所がこの仕掛けによって、明るく照らし出されたのである。

さらに角笛を持った騎士は演奏を続ける。今度はさらに大掛かりな仕掛けが動き出した。城内の大きな通路の全てが使用不能になったのである。ある箇所では床が大きくずれ十メートル近い深さの穴が出現し、ある箇所では天井が崩れ落ち瓦礫の山によって塞がれた。襲撃者たちの一部はこの仕掛けに巻き込まれて死傷しているが、城内の第三騎士団の騎士たちは一人も巻き込まれなかった。角笛が鳴り始めた時点で、全てそれを承知していたのである。

大きな通路が全て塞がれるとフリース城はまるで迷宮のように入り組んだ構造となる。奥に行こうとしても、思わぬところで行き止まりになってしまい、狭い通路にはいつぺんに大勢が通ることはで

きない。奥に行こうと侵入してきた部隊は、思わぬところから第三騎士団の奇襲を受けた。第三騎士団の騎士たちは通路を使わず、隣接した部屋の壁に隠された扉を使って移動する。さらに、城中に張り巡らされた伝声管を通じて、司令部は敵の侵入経路を全て把握していた。

伝声管は金属製の管を城壁の中の狭い空洞を通し、城内の様々な箇所に露出させたもので、全ての管は司令部に通じている。平時であれば、管の末端の蓋を開けて大声で叫べば司令部と会話ができるが、戦闘中にそんなことをする余裕はない。彼らは手に持った武器を使って、事前に決められた要領で伝声管を叩き、状況を報告していたのである。

その情報を利用し、やはり伝声管を使って、迎撃の騎士たちに指示を与える。相互の連絡が取れず状況を把握しにくい屋内での戦いなのだが、ハンス・アクセルが設計したフリース城にはそれは当てはまらなかったのである。

攻城側の兵たちは細く複雑に入り組んだ通路を進む中でいくつかの小部隊に分散してしまい、いつの間にか背後に回ってきた第三騎士団の兵に強襲され、僅かな前進の為にも大量の出血を強いられたのである。

クリストフェルと武官たちは、白雪の間の暖炉に隠された穴から地下に降りた。巧妙に隠されてはいるが、隠されていると知っていれば見つけられる程度の入り口である。こちらは発見された上で、迎撃しながら逃亡し、敵を引きつけつつ、最終的に逃げきらなければならぬ。そのため、全員が軍関係者で一人として武術の心得のない者はいない人選であった。護衛の第二、第三騎士団の要員をあ

わけて、四十名程度が地下に降りた。一番最後がクリストフェルである。

「エリクソン将軍。無事、生還してくれ。ヘルシンフォスで会おう」

クリストフェルが地下に降りる直前、重々しい口調で声を掛けたのはカール・ビランデルである。だが、クリストフェルは敬礼を施しただけで、何も言わずに降りていった。第三騎士団の騎士がすぐさま入り口を隠す。

隣室では文官たちが別の脱出路に入っていくところであった。まず、部屋の中央にあるテーブルの上にさらに一回り小さなテーブルを置き、その上にさらに椅子を置く。案内の騎士は身軽にその上を登っていき、イスの上に立ったところで、天井の一部を押し上げた。地下に降りていく脱出通路の入口が天井にあるのだ。ハンス・アクセルらしい仕掛けであった。天井裏から部屋の壁の中にある空洞を通って、地下まで降りる構造になっている。騎士が天井裏に入ったところで、テーブルと椅子は片付けられ、縄梯子が下ろされた。文官たちはふらふらとしながら、それを登っていく。こちらは文官十数名に、近衛騎士団と第一騎士団、さらに第三騎士団の人員を加えて五十名程度の一団となった。

「さあ、元帥も早くっ！！」

第三騎士団の兵士が急かすのを、カールは無視した。廊下に面した扉で聞き耳を立てる。扉の向こう側はにわか騒がしくなった。何十名かの兵士たちが迷うことなく白雪の間に駆け込んでいく。程なく、暖炉に隠された入り口も発見された様であった。時間は十分に稼げた。ハンス・アクセルも時間稼ぎを辞めて、撤退の準備を始めたのだらう。そうでなければ、ここまで敵が来るはずもないのだ。

それをおかめてからカールも天井裏に上り、蓋を占める。この仕掛を知っているか、神がかりな勘の良さを持つ者でもない限り、この脱出路に気づく者はいないはずであった。

智将策士を欺き老将隻腕となる

「そろそろ良かろう」

ぼそりと、まるで独り言のようにハンス・アクセルは呟いた。だが、彼の腹心の騎士たちに取っては、それは明瞭な指示であった。伝声管を叩いて城内の騎士たち全員に指示が飛ばされる。返答の合図を数えてから、司令部の騎士たち全員と共にハンス・アクセルは塔を降りた。すでに階下には敵兵が侵入してきている。ハンス・アクセル等は階段ではなく、別の出口を使って地下まで降りていった。

攻城側の騎士たちは、どうにか最深部まで侵入してきたものの、困惑しっぱなしであった。突然、城内全体が明るく照らし出されたり、通路が崩れて使用不能になったり、さらに考えもしないところから城兵が現れ背後から襲いかかってくる。彼らにはフリース城がまるで魔女に占領された城か何かのように思っていた。ようやく、最深部の白雪の間にたどり着いた切り込み隊の部隊長はさらに不思議なことに気づいた。いつの間にか忽然と城兵は一人もいなくなったのである。脱出路を探していても、まったく遭遇しなくなったのだ。

まさか五千は下らないはずの城兵の全てが脱出路から逃げられるわけもない。だが、彼らに取っては城兵がどうなったかは問題ではなく、この白雪の間から逃亡した帝国の重要人物たちを追うことが重要である。部隊長はいぶかしく思いながらも、白雪の間を搜索し、暖炉に隠された脱出路を発見した。すぐさま、かき集められた百名程が地下に降り、追跡を始める。

攻城軍の本営はすでに城内に設営されていた。東門から入ってすぐの広場に首謀者と思しき人物が二人、摩訶不思議としか思われぬ報告を聞きながら、どうやらフリーヌ城を制圧できたことに旨をなで下ろしているのは若い男であった。

「ふむ。これでどうやら根拠地を得ることができたな・・・」

「ですが、それだけでは足りのうございます。帝国の重臣たちを捉えることができれば、すぐに討伐軍が発せられましょう」

「わかつておる。脱出路は発見されたのだから、程なく捕縛したの連絡が入るであろう・・・」

二人のうち若い男の方は堂々とはしているが、実態は年配と思われる男に頼りきりのようであった。会話からすれば、若い方が上位にあり、年配の男はその臣下のようなようではある。表情や雰囲気からすれば、家柄だけが自慢の坊ちゃん貴族と、老練で抜け目ない執事の老人という感じの二人である。

「さすがは、四剣候一の智将と呼ばれるハンス・アクセル・フリーヌだ・・・まるで魔界の城のごとし。しかし、それもこれだけ不意を疲れては時間稼ぎにしかならなかったようだな・・・」

「仰る通りですが、最後まで油断はできませぬぞ・・・」

「わかつておる・・・ん？」

北門の方から血相をかいて走ってくる兵士の姿が目にとまった。さらに南門の方からも同様に駆けてくる兵士もいた。

「何があつた?!」

問いただしたのは年配の方の男である。

「き、北門に千名単位の敵兵が殺到してきました!」

「み、南門も同様に・・・」

「馬鹿なっ! 一体どこから・・・」

年配の方の男はすぐに自体を悟った。急に敵兵の姿が見えなくなったという報告はあったが、どうにかして、何箇所かに兵力を招集し、一気に城門へ殺到してきたのである。二人共知らなかったが、フリース城内では壁の至る所に空洞があり、秘密の通路となつている。ハンス・アクセルの鍛えた第三騎士団は個々の武勇では他の騎士団に比べて優れているわけではないが、主将の作戦通りに一糸乱れずに動く点に置いては他の追隨を許さない。城内数千の兵の全てが、予め決められた計画に従い、秘密の通路を使って地下のホールに集まり、一気に北門と南門に殺到したのである。

「すぐに増援を出せっ!」

「なりませんっ!」

血相を替えておしとどめたのはやはり年配の男である。

「全ての城兵を殺すことなどできないのですから、脱出しようとするものは勝手にさせておけばいいのですっ! ここは余計な損害を出さないために、北門と南門の兵はこちらに戻しましょう」

「なっ、馬鹿なっ!」

「城兵は八千を下ることはありませんまい。一気に逃亡を図ってきたというのなら二箇所なら四千ずつ。全てが二箇所に集まったわけではなくとも、二千か三千はいるはず。こちらの兵力では抑えきれませぬっ! 増援を出せばこちらが手薄に・・・」

男の言うことは正しかったが、それだけでは間に合わなかった。突然、東門の広場の奥にある建物、兵士の詰所であろうと思われる建物の壁が崩れ落ちた。次の瞬間、そこから次々と騎馬が吐き出される。千騎の騎馬が東門を直指して駆けてくる。

ハンス・アクセルの作戦は見事の一言に尽きた。城兵八千のうち四千を北門、三千を南門に向けて殺到させ、対応に迷うであろう瞬間を狙って自らが統率する騎兵千を敵の本営たる東門に叩きつけたのである。東門には二千の兵士がいるが、不意を突き、しかもこちらには騎馬である。勢いのついた一段は一気に城門に向かって疾走する。

年配の男が若い男に注意を促そうとした。ハンス・アクセルの狙いは脱出と同時にこちらのあわよくばこちらの主将を斬ることにあつた。すぐに気付いたこの男の読みは大したものであつたが、若い方はそれに気づかなかつた。下がるように声をかけようとした瞬間には、目の前に騎馬が迫る。

「押し込み強盗殿っ！その首貰い受けたっ！」

軽口を口にした次の瞬間には、ハンス・アクセルの細身の剣が若い男の首を跳ね飛ばしていた。一度、騎馬を止めて、年配の方の男に話しかける。

「これはこれは、稀代の策士、アルヴァ・シベリウス殿。私の騎士団に密偵を潜ませて、不意の攻撃に出るとはさすがにお見事。その知略は健在と見えますが、相変わらず担ぐ神輿の芽生えはよくありませんでしたな」

「貴様・・・気づいて・・・」

「何のことかはわかりませぬが、この城はしばらくお貸し致しますので、後片付けの方はよろしくお願いします。その後も、できるだけ綺麗に使っていただきたいものですな」

ふざけた捨て台詞を吐いたハンス・アクセルはアルヴアが何も言えないうちに、馬の腹を蹴って場外へと駆け出した。口を開けたマヌケ面のまま転がっている若い男、スウェーダ王国における最後の王、ホーコンの弟ハルステン、長男インゲはその名を世に知られようと直前で命を落としたのである。

「何をやっているっ！こつちの方が倍の人数なんだぞっ！ひるむなっ！」

強い口調で叱咤したのは、白雪の間の暖炉に隠された脱出口からクリストフェルらを追跡した部隊の指揮官であった。百名の部下たちと共に搜索に出た彼らは出口まで半ばほどのところで、逃亡を計る一段を発見し、戦闘を開始したのだが予想外の反撃にあったのである。彼らは知らないが、逃亡しているのは全て武官たちであった。一人として戦闘経験の欠く者はいない。クリストフェルの指揮の元、第二、第三騎士団の護衛と軍部の高官たちで編成される一隊は想像を絶する精鋭部隊であった。

通路はそれほど広くはない。横に五人が並んで歩ける程度でしかないのだが、その狭い通路でいわゆる車懸り戦法をやってみせたのである。三名一組が同時に駆け出し、追跡側の戦闘に切り込み、一撃を与える共に後続の右側を通って後ろに下がる。追撃しようとするればすぐに次の三人が斬り込んでくるのだ。本来であれば、このよ

うな狭い場所では実現不可能な戦術なのだが、優れた騎士のみから編成されるこの部隊には可能であった。

次々と繰り出される三人組の切り込みによって、百名の追跡部隊は半数にまで減らされる。逃亡側の部隊では数名軽傷負ったものがある程度だった。

「いつ、一度下がれっ！体制を立て直すっ！」

そう指揮官が叫んだ瞬間、逃亡側は脱兎の如き勢いで走りだした。戦闘直後だというのに疲れを感じさせない疾走ぶりである。逆に寄せ手の方は疲労困憊であった。追撃の指示が飛んでもその動きは鈍く、あつという間に引き離されてしまう。この部隊はほぼ被害もなく逃走に成功したのであった。十分に時間もかせいでいたが、敵の搜索の目をこちらにそらすことができたかどうかは、神に祈るしかなかった。

「クルーガー將軍！走れっ！文官たちは任せたっ！」

カール・ピランデルが叫ぶのにレーナは頷き返して、文官たちを急かした。囷作戦は成功したかに思われたが、あと少しというところで背後から追跡してくる部隊を発見したのである。こちらも追跡側は百名程度。しかし、追いつかれたとなると、クリストフェルの一隊よりも分が悪い。戦闘に参加できる者は半分程度しかおらず、殿しんがりの第一騎士団の護衛たち以外は先に行かせる必要があった。僅か十数名で百名を相手に良く手を阻まねばならない。カール・ピランデルは死を覚悟した。

「剣を持ったものは前へっ！短槍を持ったものはその後ろにつけっ！こちらからは前進するなっ！攻撃が来ら前面の抜剣隊が防御っ！短槍隊はその隙に味方越しに攻撃せよっ！」

抜剣隊、短槍隊と言ったところでそれぞれ十名に満たない。だが狭い通路にあつては有効な戦術であつた。闇雲に突っ込んできた敵兵はまず剣を持った騎士たちに阻まれ、鏑迫り合いをしているうちに、槍で脚や肩を突かれた。お互い軽装で、大した防具は身につけていない。こちらは、戦闘を想定しての準備ができてなかつたからだが、敵側は恐らく資金面で防具を揃えることができているのではないであろう。少なくとも、正体不明の敵が常備軍を持つ地方領主などではないことがわかる。

十数度に渡り敵軍は無策にも同じように仕掛けてきた。人数は少ないとはいえ、第一騎士団の面々は一人一人が一騎当千の強者であつた。だが、すでに全員が肩で息をしている。第一騎士団はヨハン王の時代から存在する最も伝統ある騎士団であるが、そのため、カールの側近にはどうしても古参の騎士が多い。よく言えば歴戦の勇士たちであるが、すでに老齢に達している者が多かつた。体力はどうしても若いものほどには続かない。

相手はこちらの十倍近い人数である。数を減らしたと言っても焼け石に水であつた。レーナ達はすでにだいふ先に進んでいるはずである。意を決してカールは叫んだ。

「聞けっ！ここが我らの死に場所だっ！帝国の存亡がかかる戦いで死ぬることを誇りにせよっ！」

「オオーッ！」

僅か十数名の、それも老兵たちが地下通路の天井が崩れるのではないかと思われるほどの大音響で鬨の声を上げた。狂おしいほどの喜びにまで満ちているかのような恍惚とした表情の者までいる。皆、死に場所を求めているような者たちばかりであった。

「地下通路というのは辛気くさいですが、元帥と一緒になら悪くないですね」

カールと同年輩の最古参の騎士がそうつぶいた。すでに最初の陣形を維持することはできず、槍隊の中心にあったその騎士は、前へ出て短槍を振り回していた。肩で息はしているが、その動きはほとんど鈍っていない。

「派手に暴れて小僧どもに思い知らせてやりましょう。観客が少ないは残念ですがね」

別の老兵も言う。髭まで真っ白になり、顔には年齢を重ねた証に深いシワが刻まれていた。こちらは剣を振るっている。

「よし・・・そろそろクルーガー將軍たちは出口に着いたことだろう。冥土の土産に屍山血河を築いてやろうぞっ！突っ込めっ！」
「オオーッ！」

再び上がった歓声に、敵兵は身を震わせた。目の前の老兵たちは正しく死兵であった。八十名程度まで数を減らしていた追跡部隊は十数名の部隊に切り込まれ混乱を極めた。

だが、やはりどうしても数が違う。奮戦しながらも一人、また一人と第一騎士団の精鋭たちは数を減らしていった。最後まで残ったのはカール自身と、先程会話を交わした二人の老兵だけである。し

かし、この三人が頑強に抵抗を続けるのである。三人が背中合わせになって、襲いかかってくる敵を一人ひとりほ振り続けた。すでに疲労でその顔は青黒く、荒い息を履き続けているが、目だけは異様にまで光を帯びていた。

らちがあかないと思った追跡部隊の部隊長は地下では使うことはないと思っていた弓矢をつがえた。乱戦のさなかで狙いをつけて放てば避けることは不可能である。カールの周りに残った二人は部隊長の放った弓矢を受け、動きが止まったところを仕留められた。

残るはカール一人である。そう悟った瞬間、帝国唯一の元帥は弓をつがえた部隊長に向かって突っ込んだ。すでに狙いをつけていた部隊長はそのまま矢を放つ。

『ば、馬鹿なっ！』

矢は外れてはいない。確かにカールの喉元目掛けて飛んでいったのだが、それをカールは腕で受けた。深々と左腕に刺さった矢を生やしたまま、全く気にもしていないかのようにこちらに向けて突進してきたのである。部隊長は矢を放った直後の姿勢のまままで応戦体制を整えていない。

『ぬかつたわっ！』

部隊長は弓を前につきだして身構えた。だが、カール・ビランデルの剣は振り下ろされてこなかった。すぐ横にいた兵が、剣が振り下ろされる瞬間、正確にカールの肘に自分の剣を叩き込んだのである。カールの右腕は切り飛ばされ、地下の闇の中に消えていった。

腕だけではない。カールはその手に握られていた剣も失ったので

ある。左腕には矢が突き刺さったまま。すでに戦う手段を失っていた。だが、傲然と立ったままの姿勢でカール・ビランデルは部隊長を睨みつけた。

「さあ、ヨハン王の三傑の首を取るが良いっ！」

追い詰め、圧倒的優位に立ったはずの部隊長の背中に冷たいものが流れた。ヨハン王の三傑とは、ヴェスタラの躍進に大役を果たした三人の重臣をさして言う。

宰相にして経済成長の立役者となったグスタフ・ストーメア。武将であり軍隊をまとめ上げ空前の戦果を上げたカール・ビランデル。無位無官でありながら他国への外交と謀略で秘密裏に活躍したステファン・エリクソンの三名がこれにあたる。ステファンはすでに十年ほど前に病死。グスタフは強い発言力は維持しているものの公式には政界から引退している。カール・ビランデルは唯一現役の三傑であった。

部隊長は一瞬ためらった。と言って、生かしておくことなどできない。すでに戦闘力を失っているが、捕虜としての価値もないし、はじめから殺せという命令を受けている。だが、例え傷つき丸腰の上に瀕死の重傷を負っていても、自分にこの老将を殺せる気がしなかった。

部隊長がひるんだその瞬間、レーナたちが逃げた方角から多人数の足音が聞こえた。

「ビランデル元帥っ！ご無事ですかっ！」

声の主は第三騎士団の制服を来ている。その背後には二百名以上

の騎士たちがいた。脱出に成功したレーナたちが出口で待機していた騎士たちの一部を迎えに出したのである。

「いかんっ！引けっ！」

人数的な不利を悟った部隊長は撤退を指示した。敵側は生存者を助けることが目的であるから、こちらを追跡してくることはない。こちらは要人の殺害という狙いを達することはできなかったが、すでにそれはどうしようもなかった。

「元帥・・・」

脱出路の出口まで運び出されたカール・ビランデルを見てレーナは絶句した。右腕は肘から切断され、左腕の矢はすぐに抜かれて応急処置がなされたが、出血のためにすでに気を失っていた。このフリース城の襲撃において失った最大のものは老将カール・ビランデル元帥の右腕だった。

帝都白狼に奪われ、二将信を得ず、女帝誕生す

「エリクソン將軍はどこに行ったっ？」

ヴィクトル・クルーガーは苛立っていた。レーナと共に脱出した文官達は、二千の第三騎士団に護衛されながら、旧スオメル公国首都ヘルシンフォスに到着した。ヘルシンフォスは旧スウエーダ王都スタクファームと帝都レーラムの中間にある。内戦と藩国同盟によって破壊しつくされたスタクファームと違い、ヘルシンフォスはヴェスタラ王国誕生後に再建され、かつての栄華を取り戻し、ヴェスタラ帝国建国後は副帝都に指定されている。この都市を治めるのは帝都から派遣された地方官僚である都市総督で、封建体制のヴェスタラには珍しい封建領主のいない皇帝直轄の都市である。

武官達は先に到着しており、都市総督の手引きによって、政府高官たちの宿舎も用意されていたのだが、武官たちと一緒にいたはずのクリストフェルの姿が見当たらないのである。ヴィクトルが問い質したのは、高級武官の一人で皇帝直轄の統帥府を統括する軍監総長ボルガー・キュレーゲル伯爵であった。

「は、クリストフェル・エリクソン將軍は我々とヘルシンフォスマで来た時点で、単身、第二騎士団領に向かわれました。極秘のはずの選帝会議の情報が漏れていたなら、ブレーキング公も動かないはずはないからと・・・」

「それも含めて、このヘルシンフォスで対応を打ち合わせてからのことではないかっ！」

「し、しかし、騎士団長には独立した指揮権がありますし、明らかに不正でもない限り、私には騎士団長への命令権や逮捕権はありませんので・・・」

統帥府は本来位置づけ的には全帝国軍の上位に位置する監査機関である。だが、実際の戦場での功績を上げるのは各騎士団に所属する者達であり、組織としても発言権は低下、集まってくる人材は武官というよりも文官に近い官僚的な人物ばかりになってしまっている。元帥の称号を持つカール・ビラン出るに比べ、どうしてもボルガーの存在感は薄い。決して無能な人物ではないのだが、その態度には何処か卑屈で打算的な傾向が見られ、事なかれ主義の面が目立つのだ。このような人物を全軍の監視役である軍監総長に任じたのはアンデルス帝のミスであった。

武官も文官たちも生命の危機から脱すると、フリース城襲撃という事態の異様さに気付き始めた。まず、皇帝の崩御すら秘されているとこのように、極秘の選帝会議の開催をどのようにして首謀者達は知ったのかということである。皇帝崩御は宮廷内では厳しい戒厳令が敷かれ、文武の高官のみにしか知らされていない。選帝会議もしかりで高官たちは別の出張先を部下たちに告げて集まってきたのである。内部に情報を漏洩した者がいたとしか思われないのだ。

次に帝国一の智将と呼ばれるハンス・アクセル・フリースが本拠地への襲撃をやすやすと成功させてしまった失態についての疑念である。五千を超える軍勢を秘密裏に城砦の近くに潜ませるということと自体不可能に近いことであるが、それも、完璧主義のハンス・アクセル・フリースに気づかせずにとっているのはありえないことのように思われた。あつという間に東門が占領された経緯からすれば、内部に埋伏の兵が潜まされていた可能性が高い。だが、そんなことに気づかぬ男でもないのである。軍事に明るい武官達はいぶかしんだ。

そこに来て、クリストフェル・エリクソンの無断での単独行動である。皇帝不在の状況にあって、軍部の最高幹部たちの行動に不審

な点があることは、政府の高官達を大いに不安にさせた。帝国元帥たるカール・ビランデルの負傷が不安に拍車をかえる。

レーナの手には、本来、カール・ビランデルのみが所持を許されている元帥杖が握られていた。カール本人はヘルシンフォスにはいない。フリース城からの脱出の際、右腕を失う重症を負った老将はヘルシンフォスまでの道程にも耐えることは難しく、第三騎士団の護衛三名と共に、途中の村落に預けてきたのである。意識を取り戻したカールは、自分は老いたと言いながら、レーナに元帥杖を譲り渡した。これは、正式な形ではないが、代理として全軍の指揮を取ることを依頼したことになる。これをしなければ、帝国軍の指揮系統は麻痺してしまうのだ。

相互に疑念を持ちながら、帝都への期間の計画を立てようとした矢先、新たな混乱の種が舞い込んできた。ヘルシンフォスの総督府にポロポロの騎士たちが突然現れたのである。

「さ、宰相閣下・・・帝都で変事が・・・」

総督府に現れた騎士の服装をよく見れば近衛騎士団の制服であった。代表者として現れたのはレーナの腹心の部隊長である。レーナ不在の間の近衛騎士団長代理であった。

「何があつたつ!？」

「はい。帝都レールム・・・十日前にブレーキング公爵の軍に強襲され、僅か三日で落城いたしました・・・」

十日前、それはちょうどリース城で選帝会議が催され、所属不明の軍隊に強襲を受けた正しくその日であった。騎士団長レーナ・クルーガーが不在とはいえ、近衛騎士団五万のうち主力の二万はレルムにある。また、その他にも市街の治安維持を目的とする保安兵や城兵を合わせれば、帝都の防備には平時でも五万近い兵力がある。レルムの巨大な城壁を以てすれば、五倍以上の兵力を以てしても、簡単に落城させることは難しいはずであった。

ブレイキング公爵軍は、リース城を襲撃した軍よりもさらに手の込んだ方法でスカーディナウイア最大の城塞都市であるレルムを占領してみせたのである。ブレイキング公爵マルティン・アンドレセンは、僅か三千の兵力を持って、秘密裏に帝都に接近していた。山道を選び、少数の目撃者は全て殺害しての進軍である。この程度の兵力であれば、公領を監視している第二騎士団の目を盗んで進軍することも不可能ではない。だが、もちろん、三千程度の兵力で帝都を落城させられるはずがない。

実際には攻城戦と言えるものはほとんどなかった。攻撃は帝都の内部から始まったのである。

帝都レルムの人口はこの三年ほどで一気に膨らんだ。五十万人程度と言われている。従来の城壁がめぐらされた範囲では土地が足りなくなっており、拡充も検討されていた。膨らんだ人口の多くは、戦災によって土地を失った者たちで、アンデルス帝は彼らを手厚く保護する政策を取っていた。戦が減り、再び急速な発展を始めた商人や手工業者にとっては、人手はいくらでも必要であった。帝都に出れば、職にありつけることができ、それまでの生活も保証されて

いたのである。これは、ブレイキング公爵との和睦直後から始まった政策であった。

マルティン・アンドレセンはその頃からその巧みな策略を思いついていたのである。ブレイキング公領はスカーディナウイア半島の付け根にあり、厳しい自然環境ではあるが、人口はそれなりに多い。それゆえに、単独でヴェスタラ帝国に反抗し得る力を持っていたのだが、経済力の面では厳しかった。和解の結果、ブレイキング公領の軍事力は著しく制限され、兵士たちも解雇せざるを得ず、失業対策も考えねばならなかった。彼はそれを逆用したのである。

帝都レールムへの移住を奨励したのだ。これは、実はアンデルス帝とも打ち合わせてのことである。長らくの間、戦費を費やし続けて来たツケで、領内は荒廃しており、流民が出ていることから、彼らを発展著しい帝都に移住させたいという申し出で、先の保護政策もこの話を皮切りに立案されたことであった。実際に送り込まれたのは流民ではなく、形の上では失業した兵士たちだったのである。ブレイキング公領では、住民達はいくつかの部族にわかれており、部族内での結束は極めて強いものだった。軍隊も部族単位で結成されているもので、マルティンにとってみれば、族長さえ説き伏せれば、決して裏切らない強力な軍隊を組織できた。それを密かにレールムの市街に送り込ませたのである。

彼らはこの三年間、主に商人や手工業者の見習いとして生活していた。若者に限らず、拡大し続ける需要に追いつくために、中年の者であっても労働力として重宝されていたのである。その数は三万ほど。ブレイキング公領の和睦前の総戦力五万と試算され、和睦後の軍縮で二万ほどになっていたはずであるから、軍縮によって解雇された兵力の全てがレールムに潜伏していた計算になる。

その彼らが一気に蜂起し、宮殿と城門を襲撃したのである。レールの戦力は合計五万、しかし、三万のブレーキング軍の行動は極めて迅速であった。はじめから、宮殿に全兵力を集中したのである。宮殿そのものは城ではない。近衛騎士団が警備していたとしても、三万の軍勢が一気に攻めこまれて守れるような体制にはなっていなかった。何より、臨戦態勢になく、騎士団長も不在のために指揮系統は混乱を極めた。数時間のうちに城内にあった近衛騎士団は壊滅し、宮殿はブレーキング軍の手に落ちた。三日という時間は城内での掃討戦にかかった時間である。城門から悠々と乗り込んできたマルティンは翌朝にある宣言文を配布したという。

「宣言文？」

「はい。発布されたのは我々が脱出する直前でした。恐らく、数日のうちに帝国全土に広がるのではないかと思います。こちらです」

騎士が差し出した書簡を広げたヴィクトルはわなわなと震えだした。

『臣ブレーキング公マルティン・アンドレセンは、君側の奸たる帝国宰相ビクトル・クルーガーを弾劾する。アンデルス陛下の崩御という重大事を隠匿し、臣下として最高位たる公爵位を持つ我々をないがしろにし、奸臣達と計り婦人たるレーナ・クルーガー内親王を推戴して、帝国の実権を手中にする謀が明らかになった。それを阻止するため、臣は心ならずも武力を用い、汚泥に満ちた宮廷を改めることとした。ついては、速やかに嫡子たるアーギュスト大公殿下を推戴し、アンデルス陛下の国葬を行うと共に、ビクトル・クルーガーの一党を掃討する。心ある帝国の貴族は帝都に参集せよ・・・』

アンデルス帝の崩御を隠匿したのはブレーキング公爵らに隙を見せないためであった。だが、その情報が彼に漏れていたとなると、

こちらが逆に弱みを握られた形になる。マルティンの言うことにも一理あった。地方公爵に相談せずに、中央政府の高官のみで事を計ろうとしたのは、新帝の即位によって、自分たちの特権が失われることを恐れてのことである。地方公爵が皇帝の後ろ盾になることで、独自には広大な領地を持たない自分たちが、要職を負われることを恐れたという面は確かに文官たちにはあったのである。

「しかし・・・なぜ、ブレーキング公はアストリッド殿下ではなく、アーギュスト殿下を推戴するのだろうか・・・自分の孫を皇帝に出来ければ磐石であろうに・・・」

そう疑問を口にしたのは、アルフレード・バウエルであったが、アンデシュがすぐに答えた。

「多少なりとも体裁を取り繕おうとしてのことでしょう。アーギュスト殿下はお体が弱い。亡くなった後でアストリッド殿下を推戴すれば良いということでしょう」

「しかし、お体が弱いと言ってもいつ亡くなるかなど・・・まさか・・・」

「元々お体の悪い殿下が少しずつ病状を悪化させても誰も不思議に思いません。手元に置くことができればいくらでも方法はあります」

さらに追い打ちを懸けるように新しい報告が入る。また、別の騎士が伝令として現れたのである。騎士は第二騎士団領から書簡を運んできたが、それも宣言文であり、帝国全土へ同じように発布されたものであった。

「臣第二騎士団長クリストフェル・エリクソンは、アンデルス帝の弑逆犯たるブレイキング公爵マルティン・アンドレセンを誅滅するため、心ある帝国貴族をここに募る。ブレイキング公はアンデルス帝の病臥をきっかけに開催された選帝会議によって、重臣が不在となった帝都を強襲し、病床にあつたアンデルス帝を殺害した。謀反人に天誅を加えるため、心ある帝国貴族は第二騎士団領に集結されし。すでに、アストリッド殿下は救出され第二騎士団領にあり・」

グスタフによって読み上げられた内容に全員超えもなかった。

「おかしい・・・」

最初に疑問を口にしたのは、会議の場ではいつも発言を控えているレーナである。

「クリストフェル卿はまだ第二騎士団領に到着していないはず。日数が足りませぬ。それに、レールムからのブレイキング公爵の檄文とほぼ同じタイミングで届くのもおかしい。これは、公爵の激に対してのものではなく、事前に用意されていたとした思われませぬ・」
・それに・・・アストリッド殿下がなぜ第二騎士団領に・・・」

クリストフェルの檄文が発布されるのは、まず、ブレイキング公爵の動きを事前に察知し、さらに、公爵の帝都強襲の直前にアストリッド大公を脱出させる手はずが整っていないなければならない。そして、檄文自体は事前に作成し、署名した上で選帝会議に出席していたことになる。

「それだけではありません。フリース城の襲撃についても、事前に知らなければ、このような動きはできないはずです」

フリース城の襲撃がなければ、クリストフェルが独自の行動を取れるような隙はなかった。帝都が攻略されたからと言って、フリース城かヘルシンフォスに全騎士団を集結させ、帝都奪還の軍を起すことになり、騎士団長はそのまま高官たちと共にいなければならないからである。

「多分・・・ブレイキング公爵も同様でしょう」

現在、帝国中枢は機能を停止している。高官はフリース城を追われてヘルシンフォスにたどり着いたばかりである。このような状態でなければたとえレーラムを占領したところで、すぐに奪還に向かうことができた。問題は中央の指揮系統が混乱をきたしていることである。皇帝不在の場合は、政権を掌握するのは宰相たるビクトルであることは問題ない。しかし、立太子されていない状態での次期皇帝を選ぶ手続きは確立されていないのである。ビクトル達宮廷貴族の動きが鈍くなる瞬間について、別の者が皇帝を推戴してしまうと誰が正当とは言い切れ無い状態になってしまう。それでも、選帝会議が開催され、その場で議決が取れていれば、それなりの体裁は整っていたのである。ブレイキング公爵の行動は、フリース城襲撃による選帝会議の中断が大前提となっているのであった。

「ふーむ・・・つまり、エリクソン將軍はフリース城襲撃と、ブレイキング公による帝都襲撃を事前に予測していた。ブレイキング公爵もフリース城襲撃を予測し、それ以前にアンデルス陛下の崩御と選帝会議を知っていた。フリース城を襲撃した者たちもアンデルス陛下の崩御と選帝会議を知っていた・・・と言うことですか」

妙に落ち着いた様子でそう話を纏めたのはグスタフ・ストーメアであった。若手からはすでに過去の人物と思われがちだが、数々の

修羅場をくぐってきたヨハン王の三傑の一人は、極めて冷静に状況を分析していた。

「エリクソン將軍の不可解な行動には二つの可能性がありますな」
「それは？」

グスタフの発言に、疑問を投げかけたのはレーナである。この場を仕切るべき立場にあるビクトルは何も言えないでいた。

「一つはエリクソン將軍はフリース城襲撃とブレイキング公の帝都襲撃を事前にある程度予測し、最悪の場合に備えていた可能性。彼には元々秘密主義的などころがありますからな。完全な確信が持てなければ、自分だけで備えて我々には一言も言わないということもあるでしょう」

「もう一つは？」

「もう一つは情報漏えいの源泉である可能性。つまり、フリース城襲撃もブレイキング公の帝都襲撃も、彼の意志によって起こされ、我々も彼らもエリクソン將軍の手のひらで踊らされているだけという事です。その場合、彼の狙いはアストリッド帝を推戴して自らその後見となることでしょうか。ブレイキング公爵とはぐるの可能性もある……」

「そんな……」

「いや、不審なのはエリクソン將軍だけではない。フリース將軍も事前に襲撃を予測していながら、それに対してわざと備えてなかった可能性がある。彼ほどの男が、気づかぬはずがないし、逆に元々気づいてなかったにしては、脱出や防戦の手際が良すぎますな。いかにフリース將軍と言えど。襲撃されてからの準備だけをしていたように思われる」

グスタフの話が何処に執着するのか、誰もが息を詰めて見守って

いた。

「エリクソン將軍にしても、フリース將軍にしても、その意図は今は推測するしかありませんし、確信が持てないならばそれも無意味でしょう。ストーメア侯爵は我々はどうすべきとお考えですか？」

グスタフと会話をしているのはレーナだけであった。他の者達は完全に思考を停止している。

「両將軍の意図については、おっしゃるとおり。考えたところで仕方ありません。が、エリクソン將軍について言えば、アストリッド殿下を保護されてはいらっしやるようですが、皇帝として推戴するとの記述は宣言文にありません。あくまで、彼が独立した行動を得るための正当性を象徴させているに過ぎないように思われます。問題はブレーキング公爵がアーギュスト大公の推戴を宣言していること」と

「・・・」

「我々は、正体不明の軍に占領されたフリース城とブレーキング公爵によって占領された帝都レールム・・・その中間にいるわけです。短期間のうちにこの二つの城を奪還できればよし、それがかなわなければ・・・」

「かなわなければ？」

「他の地方公爵達は帝国政府を頼りなしと見て、独立に動き出すことでしょう。再びスカイデйнаウイアは群雄割拠し、戦乱の時代を迎えることとなりましょう」

レーナはこくりと頷いた。グスタフの言葉には明確な意志が籠められている。

「まず、今の時点での地方公爵たちの旗色を確かめて置く必要がある

るでしょう。ブレーキング公爵に付く者や、ひよっとしてフリース城襲撃について裏で糸を引いていた者がいないか、いや、これは、地方公爵だけでなく、第二、第三騎士団についても同じですな……」

「そのためには何から始めるべきでしょうか？」

「ブレーキング公爵がアーギュスト殿下の戴冠を宣言してしまうと、地方公爵達はブレーキング公爵についてしまいかもしれません。ここはなるべく迅速に……」

そこまで言いかけて、グスタフは上目遣いにレーナを見た。レーナはいつの間にかすつくと立ち上がった。

「帝国の重臣達よ……聞いてのとおりです。まず、たった今、この国は未曾有の危機に瀕しています。このまま二代皇帝の元でヴェスタラ帝国を忠臣としたスカーディナウエアの発展が続くか、再び分裂し、戦乱へと時代を逆行するか……そのどちらかですっ！」

レーナは元帥杖をテーブルの上に置き、変わって腰の剣を引き抜いた。これは皇族にのみ許された意匠の施されたものである。引き抜いた剣を斜めに突き出した姿勢で宣言する。

「アンデルス帝が皇妹レーナは、自らを皇帝として推戴されることを帝国の重臣に対して求めるっ！この場に異議のある者はいるかっ？！」

部屋の中はしんと沈まりかえった。誰も動き出そうとしない中、まずグスタフがレーナに近くに寄って跪いた。

「グスタフ・ストーメア、女帝レーナ陛下に忠誠を誓います」

慌てて、他の重臣たちも跪いた。

「女帝レーナ陛下に忠誠を誓いまするっ！」

夫であるビクトルも含めた全員がそれに従った。

「グスタフ・ストメーア侯爵！そなたを臨時に宮廷書記総監に任じるっ！」

「はっ！」

宮廷書記総監という地位はヴェスタラ帝国には存在しない。しかし、スウェーダ王国には存在した。スウェーダ王国における宮廷書記総監は、宰相とは独立に国王に仕え、国王の代理として文書を起草、発布する役割を持ち、皇帝が親政する場合には、宰相以上の力を持つこともあった。

「早急に戴冠宣言書を起草せよっ！」

「承りましたっ！」

レーナとグスタフを皆交互に見ていた。驚きを隠すことができない。レーナは皇妹にして、騎士団長と言う型破りな人物ではあるが、自ら女帝として戴冠しようと言い出すような人物ではなかった。武人としては大胆不敵な作戦と神がかり的な直感力で評価を上げていたが、結婚後は、軍事以外は夫である宰相を立てて、目立たたぬように心がけていたのである。会議の場でもほとんど自分の意見は述べていない。

グスタフ・ストメーアもここ数年、ビクトルに宰相の職を譲つてからは、時折助言をする程度で、宮廷顧問という自分の職務から外に出ることは全くなかったのである。

「それ以外の高官は当面留任とするっ！軍監総長ボルガー・キュレ
ーゲル伯爵っ！」

「は、はっ！」

武人というより軍官僚というべき人物は慌てて返事をした。

「二將軍の意図を知る必要があるっ！戴冠宣言書の直後に届くよう
に、第二、第三騎士団長に対して、状況の報告をするように伝える
書簡を出せっ！」

「はっ！」

「もう一つ、第一騎士団領にも使いを出し、二万の軍勢をヘルシン
フォスに向かわせよっ！残りの兵力で管轄公爵領のうち、特にセー
デル公領の動きに警戒せよとも伝えよっ！」

「しよ、承知いたしましたっ！」

すぐさま、ボルガーはその場を走り出て行った。

「近衛騎士団部隊長イングマール・ワルドナー男爵っ！」

「はっ！」

そう呼ばれたのは、帝都陥落を報告してきた近衛騎士団の部隊長
である。

「そなたを臨時に近衛騎士団長代理に任ずるっ！急ぎ、帝国本領内
に分散している近衛騎士団の残存兵力をヘルシンフォスに集結させ
よっ！」

「拜命っ！承ったっ！」

くたくたになっていた騎士が、弾かれるように立ち上がり、下が

っていった。

「帝国宰相ビクトル・クルーガー侯爵っ！」

「はっ！」

今この時点から、レーナは皇帝であった。それは夫であるビクトルに対しても、明確に上位の人物になったことを意味する。否、帝国においては人間以上であることを意味するのである。私においては妻と夫であっても、公にあつては皇帝と宰相なのである。

「ブレイキング以外の地方公爵達に書簡を送るっ！レールム及びフリース城奪還の為に、それぞれ一万以上の兵力とそれに見合った糧食の提供を依頼せよっ！返答によって、彼らの立ち位置を計るっ！」
「はっ！承知いたしました・・・」

ビクトルは唇をかみしめた。これでは、妻であるレーナの右筆ではない。自分の意見や判断ではなく、皇帝たる妻の指示のままに書簡を作成するという仕事だけが与えられたのである。戴冠宣言書を起草するグスタフよりも格下になったようにすら思われたのだ。実際、この場にいる高官達はそのように思っていた。レーナを女帝にしたのは夫であるビクトルではなく、グスタフ・ストーメアだったのである。

女帝レーナー一世の誕生、それは秋も終わりに近づき、長く厳しいスカーディナヴィアの冬が目前に迫る季節の出来事であった。

帝都白狼に奪われ、二将信を得ず、女帝誕生す（後書き）

今回、やたらと長いですね……。そして急展開と……。なかなか重たい話ばかりですが……。

不死騎の力リスみたいなのがキャラを出したいんですが、馴染むかなあ……。色恋沙汰もちよつとは書きたいなあ……

と、悩んでおります。

暗中に疑心沸き起こり魍魎跋扈す

男は部屋の中をなんども右往左往していた。落ち着かない様子ではあるが、うろたえているわけではない。これは、難問を解決しようと思案をするときの彼の癖であった。年齢は四十を超えたあたりと見える。体格のいい立派な身なりの男ではあるが、名門貴族というよりは武人としての貫禄が目立つタイプの男である。

男の名はマルティン・アンドレセン。ブレーキング公領を支配する地方公爵であり、十数年前まではブレーキング公国の君主であった。マルティンは父親の死により、二十一歳即位すると同時に、ヴェスタラ公ヨハンの国王即位と公国の属領化があり、それ以来、ヴェスタラ王国、帝国に対して戦いを挑み続けた男である。今回の作戦は三年越しの計略であり、虎視眈々とアンデルス帝の崩御という機会を逃さなぬように、ありとあらゆる布石を打ち続けてのものであった。

「あの若造……こつちのやることに全て気づいていたのか……」

独り言であった。人前では口数の少ない男であるのだが、顔の下半分を覆う髭の中では、実はほとんど絶えず独り言を口に出している。聞こえない声で話すだけなのだ。

「気づいていたのなら、選帝会議をレールムで開催すれば良かったはずだ。皇帝崩御を隠匿するためだろうが、このように私に公開されてしまったては、隠匿した事で立場は悪くなる……」

落ち着きなく、部屋の中をグルグルと歩きまわる。イライラしているわけでもないのだが、考え事をするとうとうしてもこつちしてしま

うのである。だから、難問を抱えているときは、鍵を掛けて自室に引きこもることが多かった。今、彼が歩き回っている部屋は、帝都レールムの宮殿で、帝国宰相ヴィクトル・クルーガーの執務室である。

「何より、なぜ・・・エスナとアストリッドをさらったのか・・・」

エスナとはアストリッド大公の実母であり、アンデルス帝の皇后である。アストリッドが即位すれば、皇太后となるべき女性であり、マルティンの娘である。マルティンは娘を愛していなかったわけではない。だが、政略の道具にしたことは間違いない。それを引け目に感じないわけではない。だが、そんなことを態度にだしてしまっただけで、マルティンは子供ではなかった。

まだ四十代ではあるが、マルティンに孫がいる。それがアストリッドなのだ。マルティンの元々の計画では、アストリッドが戴冠し、エスナを摂政として、自分は地方公爵の身分のまま外戚として権力を振るつもりだったのである。それを修正する必要性に迫られたのは、レールムを占領した時点で、エスナもアストリッドもすでにレールムにはいなかったからである。

時は少し遡る。事が起こったのは、レールム城内のブレイキング諸部族が蜂起する前日である。

その日は、アストリッドの乳母と共に、皇后自らが三歳になった我が子を寝かしつけていた。すっかり眠りについた息子の寝顔を見て、乳母と口元ほころばせた直後、美しい、まだ幼さなの残るエスナの表情に緊張が走る。視線は寝室の窓に向けられていた。

男は無言で寢室に入ってきた。一言も言葉は発しない。エスナは緊張し、乳母は震えている。だが、二人とも声を上げることはなかった。知ってはいたのである。ただ、いつ、どのような形でかを知らなかったので少々驚いただけであった。男は無言のままうやうやしく最敬礼を施す。

「お迎え、大儀でした」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

労いの言葉に対しても無言であった。本来であればこれは十分不敬罪にあたる。

「私とアストリッド、そしてその乳母の三名、脱出の手はずはできてますね？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男はやはり何も言わず、ただ跪いて、胸に手を当てた。

「そうですね。特に荷物はありません。すぐお願いします・・・」

そういった瞬間、男の背後から三名の男たちが現れた。全員黒装束をまとっている。男たちはアストリッド、皇后、乳母をひとりずつ背中に背負い、最初に入ってきた首領格の男の指示で窓から外にでた。地上七階の高さに有る窓だが、いつの間にか地上に向けて張られているロープを伝って一気に場外に脱出する。騎士団長であるレーナ不在の近衛騎士団は緩みきっていた。当直の者もそれほど周囲に気を払っていない。拍子抜けするほど簡単に、皇后、大公、乳母の三人は場外への脱出を果たしたのであった。

城壁から少し離れた森の中で待ち構えていたのは、完全武装した二千程の騎兵であった。その先頭にある指揮官らしい男が武人らしい飾り気のない礼をしめして話しかけてきた。

「エスナ皇后陛下・・・第二騎士団レールム駐屯部隊長ベール・エストマンと申します。我が騎士団長クリストフェル・エリクソンの命令により陛下とアストリッド殿下を第二騎士団領にお連れいたしまする」

ベールと名乗った男は片目を黒い眼帯で隠し、右腕は布で吊っていた。エスナは知る由もないが、スヴェン・ホシユベリーの馬術によつてつけられた傷である。片目は回復の見込みが無いほど潰れ、右腕も完治はしていない。

「わかりました。よろしくお願い致します。クリストフェル殿は無事フリーズ城を脱出されましたか？」

「はい。高官たちをヘルシンフォスまで送ったあと、単身で第二騎士団領に向かつておられるとのことでした」

「計画通り進んでいるということですね・・・」

特に深い感情がこもっているように見えない。いや、そう思うものは観察不足であつたかもしれない。少なくともベール・エストマンはよくも悪くも実直な男で、女の内心がわかるほどの人生経験もない。だが、もう一人、エスナをこの場まで連れてきた、黒装束の男たちの頭目は違つていた。しかし、この男はそんなことが分かつて興味はない。

「フギン殿、引き続きレールム城内への潜伏をお願いします。例の計

画を進めてもらいたい」

フギンと呼ばれた頭目はやはり何も言葉にはせず、感情を籠めずに小さく頷いただけであった。

「ムニン殿もフリース城での工作で活躍されたとのこと。將軍もお二人にはどうにかして暑く報いたいとのこと。難しい任務だが……命は大切にされよ……」

フギンはやはり無言であった。

二千の騎兵に守られた母子と乳母は用意された馬車に乗り、第二騎士団領に向い、数名の黒装束の男たちはレールム城内に戻っていった。その翌朝、城内の使用人や警備兵達が皇后の不在に気づく前に城内での反乱が始まったのであった。

即位から半月、女帝となったレーナの前にひざまずいているのは、三人の高官であった。夫であり帝国宰相の地位にあるヴィクトル・クルーガー、暫定的には軍事の最高責任者にあたる軍監総長ボルガー・キュレーゲル、そして新たに宮廷書記総監となったグスタフ・ストーメアである。

「キュレーゲル卿……つまり、三つの騎士団はいずれもヘルシンフォスに出向くつもりはないということですか？」

レーナは女帝となっても言葉遣いは丁寧で、お高く止まった口調

で声高に叱りつけるようなことはしなかった。だが、元来、武人でもあった彼女が、例え丁寧な口調であっても詰問する側に回れば、男たちは震え上がってしまう。それだけの、威厳は自然に備わっていた。

情けないことにブルブルと震えながらボルガーは答えた。

「は、はい・・・クリストフェル・エリクソン將軍は、第二騎士団の戦力を持って、レールムとブレイキング公領の連絡を分断し、機を見てブレイキング公領を攻略する作戦を返答替わりに進言してまいました・・・」

「檄文についての釈明は？」

「あ、ありませぬ・・・ただ、將軍は自分は臣であつて、帝国に仇なすようなことは決してないと改めて忠誠を誓っておりますが・・・」

「帝国に・・・か・・・」

レーナは一瞬だけ、下唇を噛んだ。クリストフェルの行動はほとんど意味を理解出来ない。わかるのは、どう考えても彼はフリース城とレールムでの異変を事前に察知していたということだ。問題は彼がそのことを利用して何をなそうとしているのかであった。

「では、第三騎士団の方は？」

「ハンス・アクセル・フリース將軍は・・・第三騎士団領のヨンシヨール領境付近にあるカレリア城に兵力を結集させておりますが・・・フリース城に備蓄していた食料は敵の手に渡つたため、糧食が足りないとのこと。現在、ヨンシヨール公に依頼して、進軍に必要な糧食を借り受ける交渉中との返事がありました・・・」

「裏付けはとりましたか？」

「は？」

「ハンス・アクセルともあろう者が有事に備えて主城以外に食料の備蓄をしていないなんてことはありえません。おそらくは嘘……だが、ヨンシヨー公に協力を依頼しているのは本当かもしれない。使者以外に監察官は派遣しなかつたのですか？」

「あ……は……も、申し訳ありません……」

ボルガーは床に這いつくばった。監察こそが本業のはずなのだが、この男には武勇優れる男たちに不正がないかを監察する仕事などではできそうもなかつた。どうも、アンデルス帝はこの監察の役割を軽視していたようであつた。

「第一騎士団はっ!?!」

「し、使者が戻りませぬ……立て続けに五名の使者を出しましたが、一人として戻つてはおりませぬ……が、何分第一騎士団領へはフィンマルク山脈を迂回するか、山脈を横断する険路しかありません……天候によつては往復にこの程度かかることはおかしくはありませんので……」

「下がつてよろしい」

「は、は……」

レーナはいらいらを態度に出すようなことはなかつたが、ボルガーに対しては失望を禁じ得無かつた。と言つても、今は自分に変わつて軍事に関する動きを代行できる者は、この軍官僚しかないのである。近衛騎士団長代理に任じたイングマル・ワルドナーは、首尾よくレールム城外に分散していた近衛騎士団の兵力をヘルシンフォスに集結しつつあつた。しかし、つい先日まで部隊長クラスの地位しか得ていなかった彼に、將軍位にある騎士団長たちとの折衝を担当させることは荷が勝ちすぎる。

次い質問を浴びせたのは自分の夫であつた。

「地方公爵達の動きは？」

「ブレイキング公領に隣接するポツテン公爵は第二騎士団への協力を受けたようです」

「それは、まあ、いいでしょう・・・」

「ヨンシヨー公爵は第三騎士団への協力を申し出ています。ウブサラ公爵は何も言わなくても、第一騎士団へ協力することでしょう」

そもそも第一、第二、第三騎士団は担当地域の地方公爵を監視することが平時の任務であるが、関係が良好になれば、帝国直轄の隣人であり、戦時には所轄の騎士団を通して協力するのが普通であった。だから、公爵達のこの反応自体を非難することはできない。だが、各騎士団の自体の忠誠心に疑念をいだいてしまった現状においては、いかにも不安であった。

「その他、スコーネ公爵及び第一騎士団管轄のセーデル、ノール公爵からは使者が戻っておりません」

「セーデルとノールは別にしてスコーネ公爵の様子は気になりますね・・・」

「は、現在使者以外に密偵を潜ませて情報収集を始めております」

セーデル公爵はブレイキング公爵と並んで帝国への反抗を繰り返してきた地方領主である。ブレイキング公爵やフリーズ城を占領している軍と共謀している可能性は否定出来ない。また、ノール公爵は通称『居眠り公』と呼ばれており、その態度はいつも優柔不断で危機感に欠けている。あらゆる式典などにあっても、遅刻常習者と言われている人物であり、使者が戻ってこないことなど不思議でも何でも無い。家臣達が判断に困っている間、公爵自らがのんびりと使者を歓待しているのだろう。

スコーネ公爵は新たに爵位をついで数年、実質的な領土経営を始めて三年程度の若い人物である。アルヴィド・ミユルダールは二十四歳の若輩ながら、農業を奨励しスコーネ公領の農業生産力を著しく高め、『スカーディナウエアの食料基地』と言わしめるまでにした若き名君である。セーデル公爵やブレーキング公爵のような野心家ではなく、レーナの面識があり信頼に足る人物ではある。だからと言って、中途半端な形で即位した女帝レーナに従うとは限らないのである。

「わかりました。引き続き、各公爵達の動きを探ってください」

「承知いたしました」

「下がって結構です」

夫の引き下がる姿を見て、レーナは小さく嘆息した。もちろん、ボルガーとは違い、ヴィクトルは信頼に足る手腕を持っており、耳に心地よい話が入ってこないのは彼の責任ではない。彼女に憂鬱な態度を取らせた理由は、夫の覇気の無さであった。仕事はそつなくこなすが、自分の判断で動くことができていないのである。以前であればそんなことはなかった。独創的な政策立案こそがヴィクトル・クルーガーの真骨頂であったのだが、レーナ即位後に全てが変わってしまったのだ。ヘルシンフォス到着後の急展開の中で、主導権をグスタフとレーナに奪われたことで自身を喪失してしまったのかも知れない。

レーナとて、夫の政治家としての手腕には期待していたのであるが、即位の経緯が彼を傷つけてしまったことには申し訳なく思いつつも、そのようなデリケートな面については苦々しく思っているのであった。

「ストーメア卿、帝国内領の地方貴族達についてはどうなっています

か？」

帝国内領とは、ヴェスタラ帝国の領土たるスカーディナウイア全域の中で、地方公爵の所領を除いた土地の事を言う。そのうち、旧来のヴェスタラ公国時代からの領土を『本領』と呼び、それ以外の内領地域とは区？していた。本領外の内領を統治しているのは主に旧スウェーダ王国、旧スオメル公国の遺臣たちであった。

「旧スウェーダ貴族たちの動きは鈍いですな。返事が返ってきた領主も消極的な玉虫色の回答しか来ておりません。旧スオメル貴族たちは従順で、ヘルシンフォスへの兵員と糧食の供給を約束する返事が大多数です」

スオメル公国はスウェーダ王国の手によって滅ぼされた国であり、ヴェスタラに吸収されたとは言え、帝国に対する恨みはなかった。まして、旧首都であるヘルシンフォスで即位した女帝に好意を持たようであった。

一方、スウェーダ王国の遺臣達は、自分たちと同等かむしろ侮っていた地方公国が今やスカーディナウイアの統一国家となっていることについて、あまり品の良くない憎悪をいだいていた。

「ふむ・・・スウェーダ貴族については、フリース城との連絡がないかと、過去半年間に代わった動きをしていなかったかを徹底的に調査してください」

「はっ！それから、スオメル、つまり、ヘルシンフォス周辺の貴族たちの協力により、二万程度の戦力が集まりそうです。糧食もそれに見合う以上の量は確保できそうです。しかし、本領内の貴族たちについては、レールムからの進撃を警戒して動けないとの返答が来ております」

これにより、レーナは近衛騎士団四万と、それ以外の統帥府直轄の小部隊合計三万にスオメル貴族二万が加わり、合計九万の兵力を有することとなる。

「わかりました・・・しかし、もう時期冬となります。雪が積もればフリース城にしるレールムにしる奪還軍を進めることは困難となります。半月以内に十万以上の軍勢を集めることができなければ、この冬はあきらめざるを得ません。ストーメア卿はその場合の対応を検討してください。そうしなければ、クルーガー侯爵とキュレーゲル伯爵で話は収められるかと思えます」

グスタフは深々と頭を下げた。ヴィクトル・クルーガーに対しては多少後ろめたく思わなくもない。なにより、自分は第一線から一度退いた人間であるため、それほどしゃばるつもりもない。最悪の場合に備えて対応を検討しておいてくれというのは、グスタフにとってレーナの聡明さを知らされる一言であった。

しかし、自体は悪い方向に動いていく。半月後、ヘルシンフォスに集結したのは予めその意志を示していた、スオメル貴族と近衛騎士団、それ以外の小規模部隊の九万のみであった。レーナはレールム奪還の軍を起こすことを延期すると共に、ハンス・アクセル・フリースにはフリース城の奪還を、クリストフェル・エリクソンにはブレイキング公領とレールムの連絡を断つことを命じた。

最後まで様子がわからないのが、主将不在の第一騎士団であった。

三帝乱立し群盜全土に猖獗を極める

帝都レーラムでは二代皇帝の戴冠式が執り行なわれた。新たな皇帝の誕生を祝う式典としては質素すぎる、皮肉とも思われる規模のささやかな式典である。

ブレイキング公は元々虚飾にまみれた式典等を好む質ではないが、極端に式典が質素になった理由は帝都周辺の食糧事情の悪化であった。本来刈り取り後の時期であるのだから食糧不足など考えられる話ではない。凶作であったわけではなく、むしろ、近年稀に見るほどの豊作だったのだ。しかし、本来であれば帝都の大市場に溢れ返るはずの食料が極端に少なかった。

その理由は一つは、遠方の特に食料生産が近年著しく向上したスコーネ公領からの商隊が宮廷の異変により、帝都への輸送を見合わせたことによる。若輩ながら名君と名高いスコーネ公爵の取った政策であった。だが、一部の特産品などを覗けば帝都で消費される食料の大部分は周辺の大農園で生産されたものである。帝都周辺に複数存在する大倉庫に蓄えられた食料が必要に応じて運び込まれるのだが、ブレイキング公がそれらの食料の一部を糧食として徴発しようとした時には、ほとんどの大倉庫は空であった。

大倉庫を管理する農務府の担当者を聴取したところ、ブレイキング公が帝都を手中に収めた数日前から、数度に渡って第二騎士団の小部隊が現れ、穀物のほとんどを買い占めて行ったというのである。食料は第二騎士団の部隊が運び出した以外に、ポツテン公領の商隊と思われる一団に引き取られていったものもある。結果として、大人口を抱えるレーラムは僅かに残された分の穀物のみで冬を越さねばならず、急激に値段が高騰し経済的な混乱に陥ったのであった。

大規模な戴冠式を行うことなど望むべくもない状況だったのだ。

ブレイキング公は皇帝の後見人として摂政を務めることになったが、戴冠式は終始苦虫を噛み潰したような表情であった。

同様のことは、スウェーダ王国の残党によって占領されたフリーズ城でも起こっていた。主城を奪われたハンス・アクセル・フリースは、脱出のついでに敵の旗頭を切り捨てただけでなく、フリース城内の食料倉庫に内堀の水を引き込み、倉庫を水浸しにして穀物を食べられなくしてしまったのである。

「サウリ様、食料の欠乏は由々しき問題ではございます。しかし……」
「兵士を飢えさせるわけにはいかないだろう？ 篡奪者たるヴェスタラに抗して、正当なスカーディナウエアの統治者たるスウェーダの復権のためだ。民も進んで食料を提供し、我々の聖戦に手を貸すのが筋というものだ」

アルヴァ・シベリウスの言葉に答えたのは、先日戦死したインゲよりもさらに若い男であった。サウリもスウェーダ王国最後の国王となったホーコンの弟、ハルステンの子である。インゲとは異母兄弟にあたった。ハルstenは僅か二十二歳でヘルシンフォスの獄中に繋がれ、数年後には病死したが、十六歳から浮名を流し、十八歳から立て続けに多くの庶子を設けていた。先日亡くなったインゲも、その異母弟であるサウリも正式に認められた遺児ではない。だが、王家の血を引く者がハルstenの私生児しか残されていない以上、アルヴァはハルstenが大量生産した落胤の誰かを旗頭にせざるを得なかったのだ。

そして、それは、単に正式に認知されていないというだけでなく、極めて質の悪い人物を頭上に戴かざるを得ないということであった。

サウリの発言にアルヴァは大きくため息をついたが、それ以上は何も言わなかった。スウェーダ王国の終焉を迎える頃には没落貴族そのものであった家柄の娘が後宮に女官として務めた時、ハルステンが手をつけて産ませた男である。母親はそれにより莫大な財宝を下賜されたが、元々浪費家の質であった母親はそれをあつという間に使い尽くしただけでなく、息子にまともな社会常識を教えることすらしなかつたのである。まして、為政者としての自覚や矜持が簡単に芽生えるはずもない。

アルヴァはここ数年の間にハルステンの遺児を数名かき集めた。相互に争うことのないよう、互いの存在は教えずに別々の場所で、体裁を取り繕える程度には教育を施したつもりではある。だが、一人として彼が満足するような生徒ではなかった。ほとんど娯楽として『戦に関心を持つ』『インゲや、多少なりとも』政治に興味がある』サウリぐらいしか、新生スウェーダの君主候補になれる者はいなかつたのである。

捨て台詞にハンス・アクセル・フリースが口にした『相変わらず担ぐ神輿の見栄えは悪い』という言葉が思い起こされた。

糧食不足は深刻な問題であり、確かに何らかの形で手を打たなければならぬ。旧スウェーダ貴族のうち、ヴェスタラに下った者たちの同調を期待していたのだが、初戦で旗頭を失ったために、印象が著しく悪くなった。結果として彼らは様子見をしている。ヴェスタラの女帝レーナ側に積極的に協力を申し出た者がいないだけましで、何らかの形でもう一度実績を示すことができれば、次は味方と

なることは確信している。問題は、次に戦を行うとすれば、それは冬が終わった雪解けの後ということだ。女帝レーナの陣営同様、冬に入れば大軍を動かすことは難しい。その冬の間の糧食の確保に問題を抱えていることは不安ではあるが、アルヴァの説得で糧食の供出程度の協力を得られる貴族はいないわけではなかった。

アルヴァは別の事を話題にした。

「糧食の件はともかく、サウリ様には急ぎスウェーダの再生を宣言していただかねばなりません」

「ああ、分かっている。いよいよ私が国王となるわけだな」

「いえ、国王ではありません」

サウリは驚いてアルヴァを見た。

「スウェーダの再生を宣言するためには、新たな国王が立たねばならぬではないか！」

「旧スウェーダ本領を独立させる程度であれば、それでも十分でしょう。しかし、再びスカーディナヴィア全土に覇を唱える大スウェーダを再生するためには、国王では不足です」

「どういう事だ？」

怪訝そうな顔をする共に、傷付いた子供のような表情になる。サウリは多少なりとも政略に自信を持っていた。アルヴァに言わせれば『興味がある程度』なのだが、努力も経験もろくにないこの若者は、自分のことを優れた政治家だと過信している。アルヴァの策略の意味が理解出来ていないということは、彼の薄っぺらなプライドを傷つけた。

アルヴァはそれに気づきながら、無視して話を続けた。

「スウェーダの再建を宣するなら、それはヴェスタラ以上か少なくとも同等の権威を示さねばなりません。サウリ様は国王ではなく皇帝として登極していただきます」

「皇帝・・・スウェーダ皇帝サウリとなるわけか？」

「作用でございます。それでこそ、スカーディナウエアの支配者として認められるのでございます。日和見の旧臣たちも、皇帝となれば味方する者もでてくることでしょう。そうなれば、糧食など大した問題ではありません」

サウリはこの策略を思いつかなかったことを恥じる気持ちはあったが、すぐに皇帝という肩書きを得る優越感がそれに取って代わった。

「そうかつ！皇帝かつ！そういうえば、ヴェスタラでは二人の皇帝が並び立つ異常事態。そんな不安定な地位の皇帝よりも、古来よりスカーディナウエアを支配するスウェーダの皇帝の方が権威があるにきまつているっ！アルヴァよ、お前こそスウェーダの頭脳だっ！」

アルヴァを絶賛すると共に、自分の言葉に酔いしれ始めた。異母兄であるインゲは感情的で思慮に欠ける男であったが、サウリの場合はそれに過信しやすい性格という、より大きな欠陥が伴っていた。それでも、アルヴァ・シベリウスは自身の策によって、スウェーダ帝国の建国は可能であると考えていたのである。

新帝アーギュストとスウェーダ皇帝サウリが誕生して、二ヶ月が経過した冬の日、クライン農場ではウィルゴットが百人を相手に戦

つて以来の流血が迫っていた。

「急げっ！女子供は先に逃がせっ！」

柄にもなくズラタン・エドベリは声を張り上げた。すでに季節は冬。この日はひどい吹雪であった。戦に巻き込まれたならすぐに逃げろとスヴェンには言われていたが、戦が始まる前に別の惨禍に見まわれ、農園を後にせざるを得なくなってしまった。

「荷物は積み終わりましたっ！」

若い使用人がズラタンに大声で報告にきた。

「大馬車一台はここに相手行けっ！近づいてきたら、横に倒して逃げるぞっ！」

街道のレールム方面から軍隊とは違った、より危険な集団が近づいてきた。ブレイキング公の徴発により、食料を奪われた飢民の群れである。その数二万。農園の使用人たちではあまりに多勢に無勢であった。

飢民の群れは軍隊ではない。ある意味では軍隊よりも質が悪かった。軍隊の略奪は指揮官さえしっかりしていれば、それなりの規模で終わらせてしまう。過剰な収奪は戦略的に見てもうまくないからだ。だが、彼らにはそんな戦略などない。すでに複数の農園が彼らに襲われ、種籾までが奪われていた。そうして、農民の使用人たちも暴徒の中に飲み込まれていくのである。

人獣の集団がズラタン達に近づいてきた。雪の中を徒歩で進んでくるのだから素早くはない。それが、数十メートルの距離まで来た

瞬間、ズラタンは使用人たちに鋭く指示を発した。

「今だっ！荷馬車を倒せっ！」

先の指示で道を塞ぐように配置してあった大きな荷馬車が数十名の使用人たちの手によって横倒しにされる。荷馬車の上からは、大量の麻袋がこぼれ落ちた。中には麦などの穀類が詰まっている。

飢民達はすぐに麻袋の中身に気づき、それに群がった。輸送用の荷馬車は以前、第二騎士団長公邸に騎士たちの死体を運んだものと同じものだ。それに満載された麻袋はかなりの量ではあるが、二万の飢民を食べさせるには十分とは言えない。統制されているわけでもない彼らは、それを奪い合い、仲違いを始めた。

「今だっ！乗れる者は馬に乗れっ！それ以外の者は櫓に乗れっ！」

使用人たちのほとんどは、四頭のトナカイに惹かれた複数の櫓に飛び乗った。ムチを入れると、トナカイは勢い良く走り始める。目の前の食料しか目に入っていない飢民達は、それ以上彼らを追うことはできなかつた。

飢民、野盗はレールム周辺だけの話ではない。ヴェスタラ宮廷の心証を良くしようと考えた、ヘルシンフォス周辺の旧スオメルの遺臣達は、無理な徴発で糧食を準備した。フリース城周辺では、皇帝に推戴されたサウリ自身の指揮する略奪部隊によって、民衆たちはやはり飢え、野盗となる者があとを絶たなかつた。

各地方公領では、そうした野盗の侵入を食い止めることに必死で

あった。冬のことであるから、飢民達の移動も楽ではない。しかし、命がかかっていれば、その程度の苦難は乗り越えてくる。それに備える側も必死であった。

皇帝の乱立、食糧不足、それに伴う治安の著しい悪化は、ヴェスタラ宮廷の権威を損なった。各公領領主たちは、宣言こそしないものの、自らの領地と領民を守るためには、独自に行動を起こさねばならない状況に追い込まれる。

こうして、スカーディナウエアは再び複数の地域に割拠し、戦乱の時代へと突入していったのであった。

三帝乱立し群盗全土に猖獗を極める（後書き）

久しぶりの更新となりました。そして少し短いです。

これでやっと、プロローグが終わったというところでは。

次回以降、久々にスヴェンやフレデリカ達が登場します。

少しはテンションの高いキャラや、ちよっとコメディ的な要素も入ってくることでしょう。

『Kらぼ』などと並行しての更新ですが、あわせてお読みいただくと嬉しいです。

奇妙な道連れ

時は遡る。

アンデルス帝の崩御から半月後、スヴェン達三人がクライン農場を出てから一月が経過している。その間、第三騎士団領フリース城への謎の軍団の襲撃、ブレーキング公爵によるレールム占領、第二騎士団長クリストフェル・エリクソンの檄文、さらに近衛騎士団長にして皇妹たるレーナ・クルーガーの即位の報が各地にもたらされていた。

スヴェン達は当初の予定とは違う道程をたどっていた。理由はない。スヴェンの思いつきであった。目的のない旅と言っている。強いて言うなら、フレデリカを陰謀の道具に遣わせないための旅であるのだが、それは行方さえ眩ませればいいだけで、むしろ、旅をして動き続けている方が安全かもしれない。少なくとも今時点で、クリストフェル以外にはフレデリカの存在を知り、且つ、その容姿を知る権力者はいない。

そんなことを急に言い出し、スヴェンはレールム、ヘルシンフォス、スタクファアルムを繋ぐ帝都街道は使わず、雪が降り始める前の山道や林道を使って、西方に向かって移動していた。とりあえず、第一騎士団領に入り、そこから、スコーネ、ウブサラ、を経由してノール公領に入るつもりである。

さすがのスヴェンも、フリース城やレールムでの事件を予測できなかったわけではないが、こうした変事が起こることは意外とは思っていなかった。帝国の要たるアンデルス帝が崩御すれば、皇帝という蓋によって押さえつけていた諸勢力が妄動し始める。これは当たり前

のことなのだ。

帝都街道を使わなかったのは正解であった。そして、二箇所での事件以外は大規模な戦闘などはまだ起きていない。戦乱も巻き込まれないように注意さえしていれば、旅人にはそれほど危険はなかった。ただ、食糧不足などが発生すると、その地域での旅行には様々な困難がつきまとう。その意味では、第一騎士団領を通過して、スコーネに入るとは合理的な理由がある。帝国の何処で食糧不足や飢饉が起ころうと、スコーネ公領が食糧不足になることは考えにくい。そのままスコーネにとどまることもできるし、十分に準備して、戦乱に巻き込まれる可能性の低いノール公領まで移動することも考えられる。

思いつきのようできて、スヴェンの行動には合理性があった。だからニルスが彼の考えに反対することはない。また、フレデリカにとっては、どこであっても未体験の新しい土地であるので、好奇心旺盛の彼女にとっては関係なく楽しみなものだった。

急ぎの旅でもない。クライン農場を離れた直後は多少急ぎ足であったが、その後は、寄り道をしながらゆっくりと進んでいった。急げば第一騎士団領までは半月もあれば辿りつける。三人は途中途中の村に滞在して物見遊山を楽しんだり、食料の補給という言い訳をしながら、狩猟を楽しんだ。

スヴェンとニルスにとっては意外なことに、フレデリカはウィルゴットに狩猟を仕込まれており、野宿にも慣れていた。半弓の腕もなかなかのもので、フレデリカが射止めた鹿をやはり本人が調理した時には、スヴェンは思わず唖つたものである。

「ふむ・・・ニルスの作る飯に比べたらなんと贅沢なことか・・・」

「先生が作る料理は塩気が効きすぎてダメです」

「お前のは味が薄すぎて、食事というよりただの栄養補給という感じだ。ろくな調味料もないのに、木の実だの野草だのを使って、それらしく仕上げるとはな。そっぴやあウィルゴットは山歩きが好きだった。しつかり自分の趣味に染めてやがったか・・・」

鹿はなかなか立派なもので、すぐに食べきれない肉については、干し肉にして旅中の保存食とした。これまでの男二人の旅に比べてなんと贅沢なことかと、スヴェンは独り言を何度も口にしていた。

寄り道をしながらの旅でも、そろそろ第一騎士団領には近づいてきていた。秋からの旅であったため、すでに周囲には雪が積もり始めている。と言っても、第一騎士団領は南方にある。また、スコーネは第一騎士団領とはスカーダ山脈を隔てているが、半島を縦に分断するその山々を超えれば、気候はだいぶ温暖なものとなる。

軍隊のような大規模な移動は難しいが、たった三人であれば、雪の振ったあとの冬の移動も難しくはない。ズラタンの用意した荷馬車は実に便利なもので、車輪の代わりに橇を取り付けることもできるし、それ自体、住居としても利用出来る作りになっている。食料さえあればその中で冬を越すこともできる。

その日の食事はニルスが用意した。と言っても、今は保存食の干し肉やパンなどしかない。

「ま、今日の飯に関しては、ニルスのせいとは言えないか・・・フレデリカだって、今の食材じゃたいしたもんはできんだろ？」

「ちゃんと街に入ったときに、野菜の酢漬とかぐらいは買ったとい

の方が良かったと思いますよ。叔父様は旅慣れているはずなのに、
どうしてそんなに無計画なのですか？」

「仕事なら計画的な旅を考えるさ。せつかくの目的のない旅だ。計
画の必要のないときは無計画を楽しむものさ」

「先生・・・計画が必要ないってことはないと思うんですけど・・・
」

年少の二人は、自分たちの保護者と言っていいはずなら男のこ
とを半眼で見ながら嘆息した。と言っても、実際にスヴェンは無計画
でも致命的に困るような状況に陥ったことはない。その場その場で
たいていの困難はどうにか出来る自信があるから、これほど気まま
な生き方ができるのだろう。

とにかくスヴェンは旅が好きだった。

「うまいもんが食えるってのは幸せなことだが、三度の飯より好き
だってもんがあるのはさらに幸せなことだ」

そう嘯いてみせた。

「なるほど・・・叔父様・・・それだけの放浪癖なら騎士団なんか
が性に合わないわけですね・・・農園主も無理でしょうね」

「そりゃそうだ。ブラタンも冗談でしかあんなことは言わないさ」

フレデリカは亡き父とスヴェンを比べて見ていた。ウィルゴット
はスヴェンに比べればずっと勤勉で生真面目だった。レーナとの間
に自分が生まれることさえなければ、騎士として出世していたこと
だろう。少なくとも今頃は四剣候の一角を占めるくらいにはなっ
ていたはずである。

だが、一方で比較してみたところで、スヴェンが父に劣るとは思っていないかった。個性の違いはあっても、二人共立派な騎士であると思う。騎士身分を捨てたと言っても、その本質には清廉な騎士道精神が宿っていた。父ウィルゴットは娘のため、叔父スヴェンは己の生き様のために騎士団を辞め、義兄弟のうち唯一クリストフェルだけが出世を果たしたのである。

クリストフェルも自分にとっては義理の叔父にあたる。だが、今は彼のことは考えないことにしていた。父の死の直接の責任は間違いないクリストフェルにある。しかし、それ以前に自分が生まれたことが父の人生を大きく狂わせたのではないかと思われるのだ。

一方で、母レーナについては、生まれてすぐに引き離されたため、フレデリカの記憶には全く存在していない。今は会いたいとも思わなかった。まして、その母親は今やスカーディナウエアの第一人者たる皇帝である。自分が名乗り出たりすれば、殺される可能性が一番高いことぐらいはよくわかっていた。

そんなフレデリカの思案を一部についてはスヴェンは理解していた。相談されでもしない限り、スヴェンは自分から直接的に助言を与えることなどはしない。偉そうに人生について語れるほどの人物ではないと自分で思っているからだ。世慣れたこの男特有の言い回しで、本人に気づきを与えようとすることはあった。これはニルスに対しても同様で、剣術の教授ですらこの形を貫き通している。

「どんな生まれかを気にするのは後ろ向きすぎる。どう死ぬかを思い煩うのはつまらなすぎる。今をどう生きるかを考えることだな」

唐突に、これだけを口にしたことがあった。フレデリカはこれが自分に対する言葉だと気づくまで数瞬を必要とした。だが、この血

の繋がらない姪はそんな何気ない一言に救われたのであった。自分が女帝の隠し子であることなど、気にしなければなんてことはないのだ。元々隠し子なのだから、隠れたままでいて一向に問題はないと思われたのである。叔父ほどには放浪好きになるとは思われないが、自由奔放な生き方にも憧れが生まれてきたのである。

「ニルスさ・・・ニルスは一人前になったら何になるつもりなの？」

スヴェンに言われて、ニルスを呼び捨てにしようとはしているのだが、フレデリカには同年代の友人などいた事はない。そもそもが敬語を使う必要のない相手がほとんどいなかったので、なかなか慣れていかなかったのであった。

「本人が望めば知り合いに頼んで、騎士団に推薦してもらおうぐらいのことはできるんだが・・・」

「両親のことは別にしても、騎士団には今一興味がわきません。先生の話を聞いても楽しい世界には見えませんから」

「それはわかるけど・・・じゃあ、なんでそんなに一生懸命剣を学んでいるの？」

「自分と自分の守りたい人を守るぐらいの力はほしい。それだけです。一人前になったら・・・先生みたいに手紙配達人とか商隊の警護とかをしながら旅をして生きるのもいいと思っています」

スヴェンに言われてもニルスはフレデリカに対して敬語を使う。こっちの方が物事に頑なだった。

「じゃあ、フレデリカはどうするつもりなんだ？」

これはスヴェンにとっては重要な問いだった。単に世を忍んで生きるというだけでは、この聡明な娘の人生としてはつまらなすぎる。女性であるから、どこかでいい男でも見つけて結婚すればというのはあるが、それまでの間、自分がずっと面倒を見続けられるとは限らない。何らかの技を身につけて、身を立てられるようにはなっほしいところだった。

「まだ、何も決めてないです。私、農園から出て暮らしたことはほとんどありませんでしたから、世間知らずだと思えます。こうやって旅をしながら、将来を考えられたらいいかなって……」

「ふむ。まあ、悪くないな」

「でも、一つ、叔父様にお願ひがあります」

「ん？」

スヴェンは意外そうな顔をした。フレデリカが何かをねだることなど殆ど無いからだ。

「私にもニルスと同じように、剣術を教えてください」
「……なぜだ？」

フレデリカの表情には見覚えがあった。ウィルゴットが死んだ後、クリストフェルの屋敷に向かう時に同行する旨を告げた時と同じであった。強い決意の上で我を押し通すときの顔なのだろう。

「これからどんなことがあるかわかりませんが、何かあっても、自分で自分の身体ぐらいは守れるようになります。女だからって関係ないです」

「まあ、女だからってのは関係ないさ。君の母親は女だてらに騎士団に入団していたくらいだ」

スヴェンは一瞬だけ、復讐のために剣技を習いたいと言っているのでは疑ったが、フレデリカの表情にはそうした暗い情熱は感じられなかった。

「ふむ・・・お前さんは間違いなく筋はいいだろう。俺は向かない奴に剣技を教えるなんて無駄なこととはしないからな。だが、俺の指導法はニルスに聞けばわかるが、たいして何も教えたりはしない。訓練の方法は指示してやるし、撃剣の相手ぐらいは努めてやるが・・・あ、いや・・・とりあえず、フレデリカへの指導はニルスっ！お前にやつてもらおう」

「えっ？」

「教えられたこと、身につけたものを他人に教えるというのはそれはそれでいい修行だ。いいなっ！」

「は、はあ・・・」

これはスヴェンなりに考えての事だった。フレデリカもニルスも同年代の友人がいない。別に恋愛にまで発展しなくても構わないが、多少は人馴れして社会性を身につけて欲しいのだ。ちょうど同年代なのだから、仲良くなって悪いことはない。

「はあ。了解しました。フレデリカさん、私も慣れてないですが・・・」

「あの・・・とりあえず、私の方が教えてもらう側なのだから、その・・・敬語、やめない？」

「・・・」

「はあ・・・まったく・・・」

スヴェンは深い溜息をついた。ニルスのこういうところはかなり頑固なのだ。

「私がフレデリカさんに敬語を使ってたって、剣術の指導はできませんよ」

結局、ニルスは剣術の指導は引き受けることにはしたものの、言葉遣いについては折れることはなかった。

「で、ニルス、フレデリカの剣術はどうだ？」

「すごいです」

「ほう・・・追いつかれそうか？」

「うかうかはしてられませんね」

その日は、すでに第一騎士団領と目と鼻の先のところにまでたどり着いていた。その日も野宿である。スヴェンは、これはウィルゴツトもそうであったが、下手な宿に泊まるぐらいなら野宿の方が好きであった。ズラタンの用意した馬車のお陰で、雪が降っていても寒さに震える必要はなかった。車内に小さなペチカが組み込んであり、調理にも利用可能なのである。

今は雪は小降りであった。フレデリカは調理に使う水を確保するために、鍋に雪を取りに外に出ている。

「まあ、不意打ちとは言え、あのクリストフェルに一太刀浴びせたぐらいだから・・・」

「ですが、先生の仰ったとおり、攻撃よりもまず身を守る事を教えてくださいます」

「ああ。別に兵士とか剣術師範になろうってわけじゃないんだ。身

を守るための手段として教えてやる必要がある。たまには俺も練習を見てやるから、頼むぞ」

「はぁ……」

元気の良い返事を期待していたのだが、ニルスは深い溜息をついた。

「ん？なんか不満でもあるのか？」

「……」

「女の子と話すのは苦手か？」

「苦手も何も……まともに会話するのも始めてです」

「じゃあ、いい機会だ。慣れておけ。相手も似た様なものだろう」

「はぁ……」

再びニルスがため息をつくと同時に、入り口からフレデリカが入ってきた。

「ハア……ハア……叔父様っ！大変ですっ！」

フレデリカには珍しく血相をかいている。顔は紅潮し、白い息を吐いていた。

「街道の方で物音がしたので、雪山の上から覗いてみたんですけど、武装した数人の騎士とそれに追われている旅人らしき人が……」

「その何が大変だ？別に知り合いでもないだろう？どっちかが明らかに悪いってんなら、加勢してやらんでもないが……」

「それが……追っている方の騎士は……騎士団の服装をしているんですっ！」

フレデリカは第二騎士団の騎士を自宅と騎士団長公邸で見たに過

ぎないが、その印象は極めて強かった。

「マントの色は何色だった？」

騎士団はそれぞれに定められた象徴する色がある。第一騎士団は赤、第二騎士団は青、第三騎士団は緑、そして近衛騎士団は白である。

「緑色ですっ！」

「では、第三騎士団だな……ここは第一騎士団領に近い。噂に聞いたフリーズ城の事件からすると……まあ、ハンス・アクセルも何を考えているかわからん奴だが……とりあえず、様子を見てからだな……」

あまり乗り気ではない様子でスヴェンは外に出た。

「あれです……」

フレデリカが目撃した地点よりも、さらに第一騎士団領に近づいた地点から、様子を眺めた。まだだいぶ遠くではあるが、ここはほとんど遮るもののない広大な雪原である。

追われている側と思われる人物が必死に馬を急かしている。

「ほう……追われている奴は隻腕だな……」

「良く見えますね……」

「詳細まで見えなくともなんとなくわかるさ。確かに追っている奴らは第三騎士団だ。が、追われている奴が脱走した盗賊とかかもし

れんしなあ・・・もう少し、近づいてくるまで待つてみよう」

ため息混じりであった。基本的にズボラで縦のものを横にするのも面倒なたちなのだ。

「フレデリカっ！お前は馬車に戻っているっ！ニルスも一緒にいけっ！けが人を運び込むかもしれないから、準備しておけよっ！」

「叔父様っ！私は・・・」

「追われている奴がお前のことを知っていたらどうする？身分のある人物で、陰謀を企むような奴だったら？いや、そういう奴じゃなくても、宮廷や騎士団に関わる連中にはできるだけ会わない方がいい。ニルスっ！フレデリカを連れて行けっ！」

そう言われるとニルスは無言で、フレデリカの肩に手を置いた。スヴェンに言われたことに納得したのだろう。素直にニルスに従って馬車へと戻っていく。

二人が戻ってから程なくして、追われている側の人物がだいぶよく見えてきた。フード付きの外陰を着ているが、風になびいてその下にさらにマントを着けているのが見えた。

「・・・赤マント・・・第一騎士団の騎士か・・・仕方ない・・・」

第三騎士団の騎士が第一騎士団の騎士を追っていれば、間違いなく、第一騎士団の方に味方する。スヴェンは今のヴェスタラの政治や勢力争いには興味はない。一種の世捨て人なのだが、それでも、為政者や身分ある者の中に好き嫌いはある。第三騎士団の騎士団長、ハンス・アクセル・フリースのことは嫌いだった。武勇も知略も認

めるが、野心とその表れ方に嫌悪を覚えてしまうのだ。

騎士団に所属する騎士同士が戦っているとすると、これはすでに異常事態だろう。逃げている方が犯罪者か何かであれば、こんなに必死に追跡する必要はない。第一騎士団に連絡して捕らえさせればいいだけであった。ここまでするのは、第三騎士団側の何か後ろ暗い策略があるからに決まっていた。状況が状況だけに、ハンス・アクセル・フリースをまともに信用することはできなかった。

追跡者の人数は十人。スヴェンは背中にしよっていた弓に矢をつがえた。武道百般のこの男は剣術と馬術に次いで弓が得意である。狙点を定め、引き絞り、放つ。

一射目は追跡者の先頭の男の肩に当たった。予想外の攻撃と苦痛に耐えきれず、もんどりをうって落馬する。二射目は最後尾の男を狙い、馬の脳天に命中させた。

追跡者達は思わず立ち止まった。近くの雪山の上で弓を構えるスヴェンに気づくには数瞬必要であった。その瞬間、スヴェンは櫂に飛び乗る。櫂は買物などの際に荷物を運ぶためのものだが、スヴェンはそれに立ったまま乗って、左手で綱を握った。驚くべき平衡感覚で乗りこなし、雪山から滑り降りていく。第三騎士団の騎士たちが気づいたときにはすでにかなり近くまで接近していた。

第三騎士団の騎士たちは状況が把握しきれなかったが、それでも体はすぐに反応する。第三騎士団の騎士たちも十二分に訓練された男たちなのだ。残った八名のうち半数の四名がスヴェンに向かって馬を走らせた。だが、スヴェンの櫂のスピードは予想外であった。四騎が取り囲む前に左側にいた騎士の横を通り過ぎる。その瞬間・

その騎士は何が起こったかわからないうちに気絶されられ、落馬した。自分の右側を通りすぎようとした櫓の男に右手に持っていた槍を突き出したのだが、それは空振りに終わった。次の瞬間、自分の左側から強烈な打撃を頭部に受けて気絶したのである。

周囲の騎士たちは、スヴェンの恐るべき早業を目の当たりにしている。騎士の右側に櫓を進めたスヴェンは、槍の一撃が繰り出された瞬間、急激に櫓の方向を変え、仰向けになったのだ。走っている騎馬の腹の下をそのまま掻い潜り、左側から馬具の留め紐を掴んで体を引き上げ、剣の柄で思い切り殴ったのである。

スヴェンの姿は馬上にあった。残り三名は当然に三対一の騎馬戦を挑む。

スヴェン・ホシユベリーの武術は元々はステファン・エリクソンが仕込んだものである。だが、スヴェンはそれに自己流の解釈を加えて、自分らしい自由奔放な変幻自在の戦闘術に昇華させた。スヴェンは体格や膂力ではウィルゴットに劣る。スヴェンが優れているのは天性の平衡感覚と瞬発力であった。それを最大限に生かし、馬術をはじめ、様々な乗り物に乗りながらの戦闘術を編み出したのである。先程の櫓による騎馬に対する強襲も、彼一流の戦術の一つであった。

三騎に囲まれたスヴェンは、正面の一騎に向けて突進する、正面の騎士は槍を構え、それ以外の騎士は後ろから攻撃するためにやはり槍を構えて近づいて来た。騎士たちにはスヴェンの行動は無謀な突進にしか見えなかった。

三人が同時に槍を突き出す。

ザシユツ・・・

騎士たちには何が起こったかわからなかった。正面にいた騎士には二本の槍が胸に突き立っている。そして、それ以外のスヴェンを後ろから襲いかかった二人の騎士は、後ろから首の中ほどまでを剣で切り裂かれていた。三人の騎士たちから吹き出す血でたちまち周囲の雪が朱に染められた。

スヴェンは三人の騎士が槍を突き出した瞬間、近距離では一瞬で姿を消したと思われるほどの人間離れた動きで、体を横に倒し、馬の腹の下にへばり付いた。ほぼ同時に二人の騎士の槍が正面の騎士の胸に突き立っている。次の瞬間、スヴェンは腹の下からくると馬の尻の上に回り込み、さらにそこから飛び跳ねた。二人の騎士はその時点でスヴェンの馬の半馬身ほど後ろで左右に並んでいた。二人の騎士の視界にはスヴェンの姿は入っていない。そのまま、空中で剣を一閃さえ、二人同時に後ろから首を掻っ切ったのであった。

スヴェンは、すぐに馬に乗って、残りの四人を追いかけた。が、さほど離れていない位置に、四人の騎士の死体が転がっていた。追跡されていた男が自分で倒したのである。

「ほう・・・たいした腕だな・・・加勢は必要なかったか？」

誰かはわからない、おそらくは第一騎士団の者と思われる隻腕の男に話しかけた。

「四、五人ならどうにかなるが、さすがに十人は無理だ。病み上が

りでな。左手の剣にもまだ慣れてない」

そう返してきた男は、フードを下ろした。銀色の髪と髭を生やした精悍な顔付きであった。その男の目が見開かれ、驚きの声を上げた。

「……ん？スヴェンっ！スヴェンかつ？！」

スヴェンは怪訝そうな顔で男を見る。隻腕の男に知り合いはいない。だが、左手の剣に慣れてないというのなら、右腕を失ったのは最近のことなのだろう。そう思いながら、再度まじまじと男の顔を見た。

「……っお……おやつさんっ？！」

「たわけっ！帝国元帥のことをおやつさんなどと呼ぶのはお前だけだっ！」

スヴェンが助けた男は、フリース城で右腕を失った第一騎士団長カール・ビランデル元帥であった。

老将を継ぐ者

スヴェンとカール・ビランデルは馬に乗ってフレデリカとニルスの待つ馬車に向かった。スヴェンの乗る馬は第三騎士団の騎士から奪ったものである。カールも元々は第三騎士団のものであった馬を盗んで逃亡に使っていた。

「ま、この程度は戦利品と思っていいだろうな」

「ハンス・アクセルは騎士団を使って国を乗っ取るうとしているんだ。奴のしようとする盗み比べたらかわいいものだろう」

そんな戯言を言いながらゆっくりと馬を歩ませる。スヴェンとカール・ビランデルは既知であった。スヴェンが騎士として所属していたのは、カール・ビランデル直属の第一騎士団である。クリストフェルと並んで若手の出世株であった。ステファン・エリクソンの推薦であるから当然だが、それ以上に、カール自身が二人を気に入って重用していたのである。寡黙で生真面目なクリストフェルに対し、自由奔放で型破りなスヴェンには手を焼いていたが、同時に最も期待していた部下でもある。面白みのある男がカールは好きであった。

「先生っ！けが人は？」

「ああ、大丈夫だ。負傷していない。飯にしよう。用意してくれ」

「フレデリカさんが準備しています。お腹をすかせているだろうって」

馬車の外ではニルスが待っていた。ニルスは両親を殺された際に

カール・ビランデルと会ったことがあるが、すぐには気付かなかつた。なにせまだ幼かつたし、自分の面倒を見てくれたのはスヴェンで、カールとは二、三尋問を受けただけである。カールの側でも、ニルスの両親の事件は苦い記憶として覚えてはいるが、成長したニルスを一目で記憶の中の子供と直結させることはなかった。

「叔父様っ！鹿の干し肉を戻してスープを作ってみました」

「そいつはありがたい。客人にも出してやってくれ。ワインもまだあつたか？」

「だいぶ減ってますけど……まあ、無くなっても私とニルスには関係ないですから……出しましょうか？」

「ああ、頼む」

スヴェンはカールを馬車の中に案内した。その広さと行き届いた設備にカールは驚く。グラスにワインが注がれ、フレデリカの用意したスープや干し肉などの食事を四人で始めた。

「これまた……ずいぶんと贅沢な旅のようだな……」

「ああ、俺でもこんなのは始めてだ。農園の経営者が用意してくれてな……」

「農園……ウイルゴットの農園か？」

「そうだ。ウイルゴットは死んだがな……」

「何っ？」

カール・ビランデルはステファン・エリクソンと並び称させるヨハン王の三傑の一人である。また、ウイルゴット、スヴェン、クリストフェルの三人を引き受けて自分の騎士団に入団させたのも彼であった。ウイルゴット・クラインの騎士団引退の真相を知る数少ない人物の一人である。

「耳には入っていないか・・・第二騎士団と斬り合いになつてな・・・」
「クリストフェルが？しかし・・・奴にとっては兄のようなものだろう？」

「ステファンが死んでから、俺もウィルゴットもあいつには会っていなかった。立場が変われば考え方も変わる・・・」

カールは深い溜息をついた。すでに宮廷の権威が失墜し、領内が諸勢力に割拠するところまで来ている。詳細は入ってきていないが、四劍候もうち二人が独自の動きを始めていた。

クリストフェルもハンス・アクセルも自分が見出して、四劍候にまで取り立てた男たちである。ハンス・アクセルはともかく、クリストフェルに帝国に対して異心があることなど想像できなかった。いつまでも、単純な武人のままではいけない。これは、ヨハン王の三傑の中では若年であったカールに対し、生前のステファンがしっかりとくい聞かせていたことである。カールは己の不明を恥じた。

「あの、叔父様？お知り合いの方だったのですか？」

親しげに話す二人を見ながら訝しげにフレデリカが尋ねた。

「叔父様？」

「ああ、ウィルゴットの娘だ。フレデリカと言う。ウィルゴットの代わりにおれが預かることになった」

「フレデリカ・クラインです」

「ウィルゴットの娘・・・ということとは・・・」

「ああ、そういう事だ」

スヴェンはバツの悪い表情を浮かべた。つい先刻、フレデリカに

は身分ある人物にはできるだけ会つなと言つたばかりである。しかし、片腕のカールを放置するわけにも行かず、ここに連れてきたのであった。

一方で、カール・ビラントは策略や野心とは無縁の武人肌の人物で、その点では信頼もできた。

「フレデリカ・・・ニルスも、こちらは第一騎士団長カール・ビラント元帥だ。昔の俺の上司。ああ、ニルスは一度会ったことはあるな」

「こちらは？」

「俺が騎士団を辞めた時のあの事件の・・・」

「ラーソン一家への略奪事件か？じゃあ、君が・・・」

「ニルス・ラーソンです」

「大きくなつたな。スヴェンのお供か。こいつは気まぐれだから大変だろう？」

ニヤリとカールは歯を見せて、笑いかけた。謹厳実直を絵に書いたような人物であるのだが、今は優しい父親といった趣がある。

「で、おやっさんはどうして第三騎士団に追われていたんだ？そもそも隻腕になつたのは？」

フレデリカのことはカール・ビラントも承知している。無理に内親王として迎えるとか、陰謀に利用するとかそういう思考法をする人物ではない。だが、それでも、スヴェンはできるだけ、フレデリカの身元に関する話題からは遠ざかりたかった。

「腕については、フリース城を脱出するとき不覚をとつただけだ。フリース城の襲撃事件については耳に入っているのだろうか？」

「ああ」

途中に滞在したいいくつかの村で、すでにこの時点までにあった出来事は概ね耳に入っていた。スヴェンは村に泊まるときは必ず酒場に赴く。酒を呑むためというより、情報収集のためであった。

「あの時、フリース城では選帝会議が開かれていた。俺は要人たちを脱出させる際の殿に立つたんだが、ヨハン王の三傑も年齢には勝てん」

「なるほどな」

右腕を失うという大きな事態に対して、二人の会話はあまりにも気楽に聞こえた。それは、スヴェンもカールも一流の騎士であるが故であった。戦場で指揮官として先頭に立つものが、負傷をむやみに恐れてはならないし、その結果を甘んじて受けて、かつ、うるたえない必要がある。スヴェンにしてみれば、カール・ピランデルがこの程度の事態で悲嘆にくれることなどありえなかった。

カールはフリース城脱出の経緯を詳しく語ってみせた。

「ところがだ、最初は三名だった私の護衛は一人、二人と増員されていた。そのうち、宿舎を提供した村落の長老はいくつの間にか姿が見えなくなった。俺も耄碌したと思うが、冷静に考えれば、ハンス・アクセルの様子には怪しいところばかりだ。密かに脱出を試みてみれば、完全武装の第三騎士団の連中が十人も集まって俺を追跡し始めたというわけだ」

「耄碌したというが、達者なものだな。慣れない左腕一本で乗馬も剣もこなしてみせたということか」

「ふんっ・・・それぐらいはどうかなるが、何分、病み上がりだし着の身着のままだったからな。これは久々の飯だ。保存食で用意

した割にずいぶん上等な料理だ」

「ありがとうございます。おかわりもありますから、どんどん食べてください」

フレデリカがニコリとしながら答えた。箱入り娘だった割に、ニルスに比べればよっぽど社交的である。周りは年上の大人たちばかりだったので、目上の人間への対応は慣れているのだろう。

「第三騎士団の動きも怪しいが、あんたの第一騎士団だっておかしくないか？」

「ああ、こんな状況だ。騎士団長代理が動いてヘルシンフォスと連絡を取るぐらいはするはずなんだがな・・・」

「今回の事件は後ろでハンス・アクセルが手引きしたのか、単に状況を利用したのかは分からんが、あいつのことだ、一番近くの主力騎士団をそのままにしておくはずもない。どうなっているかは分からんが、状況だけは俺自身で確認しなければ気が済まなくてな・・・」

「はんつ！今頃レーナ陛下は周りにまともな将士がいなくて困っているんじゃないのか？」

「ああ、クリストフェルが領地に戻ったらしいからな。高位の武官はあのボルガー・キュレーゲルだけだ・・・」

ボルガー・キュレーゲルは元々は第一騎士団の部隊長だった男だ。家柄の良さから出世したが、武人としては半人前もいところだし、そもそも胆力が足りない。実を言えばボルガーが軍監総長まで出世できたのは、ウィルゴットとレーナのお陰であった。この二人が最初に所属したのが、ボルガーの部隊だったためである。二人の功績を認めるためには、上官も認めなければならぬ。反乱鎮圧における二人の功績は膨大なものであり、その上司にも何か報いなければならなかった。カール・ビランデルに相談したアンデルス帝は、実

戦とはもつとも関わりのない軍監総長への昇進と言う人事を決めたのであった。

「さて、ところで、スヴェンよ。お前はこれからどうするつもりだ？」

「どうするってなんだよ？」

「手紙配達人なんて仕事は平和なうちしか出来んだろう？子供ふたりも連れてどうする気だ？」

「金は間に合っているよ……」

「で、ただ単にぶらぶらとしているだけか？」

スヴェンはまたバツの悪い顔になった。実を言えばカール・ビラデルのことが苦手なのである。自分の奔放な性格を認めてくれる数少ない人物なのだが、自分の痛いところをずけりと口にする人物だからだ。

「フレデリカの事情は……あんたも知っているだろう？今の状況じゃ、戦乱に巻き込まないだけで精一杯だ。あんたも誰にも口外しないようにしてくれ」

「ああ、彼女のことは忘れることにしてもいいが……出来の悪い元部下については気になるところだな」

「だから、フレデリカを連れて、ノール公領あたりで戦乱が終わるまで隠れているか、エスラの港から、フリップ王国とやらに出てみるか……どのみち俺もフレデリカもこの国の状況に興味なんてないさ……」

カールはワインを一気にあおった。フレデリカがすぐにおかわりを注ぐ。

「俺はいい加減、引退時だ。第一騎士団がどうなっているかはわか

らないが、クリストフェルやハンス・アクセルとやりあえる奴じゃないと後を任せられない。なにせこの状況だ。ウィルゴットが死んだ今、そんな奴は一人しか思い浮かばないのだがな」

「興味ねえって・・・引退するなら、全軍引き連れてヘルシンフォスに向かえばそれで済むだろ？」

「お前なら分かってているはずだ・・・単にレーナ陛下に力を集めるだけで、戦乱を終わらせることはできん・・・」

「まだ、フリース城とレールムだけだろう？合戦があつたのは・・・」

「冬になつたから先に伸びただけだ。合戦はなくとも、この冬の間
に帝国の分裂は進むことだろう」

スヴェンにもそんなことは分かっていた。自身はそれほど戦争そのものを嫌っているわけではない。戦があれば、先頭を切って一騎駆けすることだろう。だが、それにとまって、一般の民に振りかかる不幸や、軍隊内の矛盾や人間関係、内部での勢力争いや謀略、策略など、そうしたドロドロとした部分には触れたくないのである。

気楽な一兵卒ならともかく、主力騎士団である第一騎士団の司令官になるなど想像したくもなかった。高位の貴族や出世主義の連中とやりあわねばならないところなどに戻る気など一切なかったのである。

「フレデリカ様・・・」

カール・ビランデルはあえて丁寧な口調でフレデリカに話しかけた。

「あ、あの・・・か、カール元帥？」

「私はすでに元帥杖をレーナ陛下に返上しております。今は一将軍。

それも療養中の身です……」

「ええ、ええと、では……ビランデル卿、私は『様』付けや敬語が必要な相手ではありません……」

「あなたが、宮廷や政治の世界に入ること望まないのなら、それは無理にとは申しませぬ。おそらくは、ご自分の出生を知ったのも最近のことでしょう？各地を旅しながらゆつくりと考えていただければ良いのです。スヴェンについても、今すぐどうしてくれとは申しませぬ……」

「ビランデル卿……」

「ただ、あなたにはどうしてもお話しておかなければならないことがあります。ウィルゴット・クラインの志についてです」

スヴェンはすでに幾分酔ってはいたが、カール・ビランデルはまったくその兆しはなかった。恐らく一目見て直感的にフレデリカのことには気づいていたのであろう。

「長い話になりますが……ウィルゴットは私の部隊にいました。そこで、レーナ陛下と出会ったのです」

老元帥は、ゆつくりとウィルゴット・クラインとレーナ・ステーンローズの過去について語り始めた。

レーナとウィルゴット

カール・ビランデルの言葉にフレデリカは真剣な表情で答えた。ウィルゴットはフレデリカに実の娘であることすら話してなかったのである。まして、母親との出会いなどは一切に口にしなかった。母親が誰かということさえ亡くなった後で知ったのだ。ウィルゴットが自分について語ったのは、ステファン・エリクソンに育てられたことだけである。

「長い話になりそうですね。飲み物でも飲みながらにしましょう」

ニルスの提案に皆が賛成した。スヴェンとカール・ビランデルはワインを、ニルスとフレデリカは山羊の乳を温めたものを口にしながら話が始まった。

「あれは、もう十六年前になりますか。セーデル公領での反乱が激化した時の話しです・・・」

セーデル公は独立志向の強い人物で、スウェーダ王国時代から幾度と無く反乱を起こしていた公領であった。ヴェスタラの時代が来てもそれは変わらない。スウェーダやヴェスタラに取って代わるほどの力はないが、独立勢力として、大国の掣肘を受けない体制を強く望んでいた。

アンデルス王の五年。セーデル公の軍は後の第三騎士団領、旧スウェーダ直轄領のスタクファルムの周辺へ進軍した。当時はまだ四剣候の制度はなく、主力三騎士団もなかったが、カール・ビランデルを中心とする主力部隊がスタクファルムに駐屯していたため、これを撃退することで、セーデル公領の独立性を高めようと計ったのである。

これに対し、アンデルス王は自ら親征することを宣言。ヴェスタラの全力を持って反乱を鎮圧する意志を固めた。だが、そこに思わぬ難問が持ち上がる。アンデルス王の妹でまだ十六歳であったレーナ内親王が従軍を希望したのである。レーナは王族の姫君ながら、乱世に育ったが故か武術を好み、一騎士として軍に入ることを希望したのである。実際、その武術は巧みで大人の男でも太刀打ちできる者は少なかった。

妹の我侭に困り果てたアンデルス王はヴェスタラの軍権を掌握しているカール・ピランデルに対して相談したのだ。

「私は、まあ、困ったものだとは思いましたが、本人は一兵卒でも構わないとまでおっしゃいますもので、三百名ほどの民兵部隊の指揮官として、主に後方の輜重隊の護衛を担う形で受け入れることにしたのです」

「今のお前と比べても二歳年上だったが、ずいぶんとお転婆だったらしい。そのうち、お前もそうなるんじゃないのか？」

スヴェンが茶化したのが、フレデリカはそれを無視した。

「まあ、とにかくそれでご本人も納得されたのだが、と言って、お目付け役がないと不安だ。そこで、まだ若く従軍経験も不足はしていたものの、武術と判断力に定評のあるウイルフゴットがその役を担うことになったわけです」

「と、言えば聞こえはいいが・・・ステファンの養子であるということ、たいした家柄でもないのに、いきなり士官になったウイルフゴットに対するやつかみもあつたんだろう？他の目立つ役割に付けるわけにもいかないから、我侭なお姫様のおもりなんて仕事を押し付けたってことだ」

「そう言つと身も蓋もないんだが・・・まあ、そういう面もたしかにありました。ウイルフゴットは高位の貴族が多い軍の中枢では人間

関係に苦勞していましたから・・・」

生真面目なウィルゴットは、そんな仕事でも真剣にこなした。レーナをなだめすかして危険な行動を押しとどめ、彼女に戦場での慎重さと補給の重要性を教え、輜重隊の護衛という任務が如何に大切であるかを伝えたのである。最初は地味な仕事に不平を口にしていたレーナもそのうち素直にウィルゴットの言う事を聞くようになった。

一方で、ウィルゴットはレーナの持つある種の『力』に気付き始めていた。恐ろしいほど勘が鋭く、特に危機を察知する能力に極めて長けていたのである。

レーナとウィルゴットが担当したのは、ウブサラ公領からセーデル公領までの輸送部隊の警護であった。セーデル公はゲリラ戦術に長けており、ウブサラからの輸送も決して安心はできなかった。前線での兵糧不足に悩まされたアンデルス王とカール・ピランデルは配下の部隊長ボルガー・キュレーゲルに輜重隊の警護を任せただのである。その際、レーナの民兵中心の小隊も参加していた。

「その、ボルガーと言う男は正直軍人には向かない男で、輜重隊の警護ぐらいしか任せられなかったのですが、これは私の完全な誤算でした。ボルガーには実際には輜重隊の警護すらできなかったのです」

ボルガー・キュレーゲルはヴェスタラの旧家の出身で、そのためにヨハン王の時代から部隊長の地位についていた。年齢的にはもう少し上の地位に上がっても良かったのだが、判断力に欠け、前例や規則に従うことしか出来ない人物であったために、それ以上は重要な責任を負わせることができなかったのである。

一方で、地味な仕事でも不平を言うことはなかった。輜重隊の警護という仕事には適任に思えたのだが、それはカール・ピランデルの人選ミスであった。

最初、ウブサラに進軍してきたセーデル軍は、ウブサラ軍が想像以上に頑強な抵抗を示したことで、ヴェスタラ本軍が救援に現れたことで、すぐに撤退した。アンデルス王は後日を考え、セーデル公を完全に服従させるため、セーデル領内まで追撃、戦場はセーデル公領内に移動していた。

輜重隊がウブサラ公が提供した糧食を本陣に運ぶ道程、先行していたレーナの表情が突然こわばったことにウィルゴットは気づいた。

「どうなされたのですか？」

「たしか・・・この先はずっと一本道のはず。西側には僅かな野原と大きな森。襲撃されることは考えられないだろうか？」

このころのレーナは、軍中で唯一の女性士官であることを気にしてか、言葉遣いは男っぽかった。

「・・・ありえますね。しかし、そのために我々がいるわけで。警戒を高めましょう」

本来、軍内の階級ではウィルゴットとレーナは同級であった。騎士団内の部隊のうち、臨時に作られた小部隊の隊長だが、この二人の場合は、二人で一つの隊を指揮する変則的な形式を取っていた。だが、ウィルゴットは王族であるレーナに丁寧な言葉づかいを選んでいた。

「それだけでどうにかなるだろうか・・・」

「と、言いますと？」

ウィルゴットは怪訝そうにレーナの顔を覗き込んだ。心ここにあらずと言った体で、前方を眺めたまま、独り言のようにつぶやく。

「道幅は広くない。警備隊はどうしても輜重隊の前後に配置されている。騎馬による奇襲を受ければ、迎撃体制を作る前に糧食が焼かれてしまう……」

ウィルゴットは戦慄した。レーナの言うことは言われれば尤もであるが、それ以上に、自分同様に戦場での経験が浅い彼女からそのような推測が出てくるとは思えなかったからだ。

「たしかに……ここで奇襲を掛けられては……糧食を奪うつもりならともかく、焼くつもりであれば防ぎ用がありません。キュレーゲル隊長に注進するようにいたしましょう……」

「しかし……キュレーゲル隊長は聞くまい……」

「と言っても、何も言わずに我々が動くわけにもいきませぬ」

「それはそうだが……」

にやりとするウィルゴットを怪訝そうにレーナは見た。真面目で骨惜しみをしない男であるとは思っていたが、こんな表情もするのだなと感心しながら、言葉の意図はつかめていなかった。

「注進した上で『勝手にしろ』となれば勝手にしても、命令違反には問われませぬ」

「なるほど……」

そういうものか、とレーナは納得した。こうした上役の人間への対処法などレーナには分かるはない。自分より上位にいる人間など、

亡くなった父母と現国王である兄ぐらいしかいなかったのであるから。ウィルゴットの場合は、そのようなことまでステファンに仕込まれていた。ステファン・エリクソンは自分の養子達がぶつかるとあるう困難もある程度予測して、教育を施していたのである。

「して、実際にどうやって防ぐ？おそらくは我々の民兵部隊だけで対処せねばならないわけだが・・・」

「それは最初だけです。実際に戦が始まってしまえば、キュレーゲル隊長も動かざるを得ない」

「しかし、あの・・・）キュレーゲル隊長の指揮では・・・」

「我々がお膳立てをして、そうせざるを得ないよう誘導すればいいのです。いや、その時はレーナ様が多少越権行為をしたところで問題ありますまい。レーナ様はこれから、隊長の元に警告しに行った上で、そのまま留まるようにしてください。そして、いざという時は兵士たちに号令を」

「承知した。で、初戦は民兵のみでの戦いだが、策はあるのだな？」

ウィルゴットはその場で思いついた作戦を披露した。レーナは驚愕と共に微笑を浮かべる。無理やり軍隊に入ったかいるかというものだった。こういう男がいるなら、ヴェスタラ軍の将来も心配はない。

「キュレーゲル隊長。申し上げたとおり、高い確率でこの先の一本道では奇襲を受ける可能性があります」

「まあ、可能性はいつでもあるな。だがそのために我々警護隊がいる。今更何を・・・」

「この先の一本道では、どうしても輜重隊の前後にしか警護隊を置けません。側面からの攻撃にはどうしても対処が遅れます。糧食を

奪うことを目的の攻撃なら乱戦となり、犠牲は出ても糧食を守ることはできるでしょう。しかし、初めから糧食を焼くことを目的にしていれば、それを防ぐ手立てはありませぬ」

「・・・・・・・・」

キュレーゲルは困った顔をしている。初めから『わがままお姫様』の話などともに聞く気はなかった。だが、あまりに話が理路整然としているので無視することもできない。こういう時のために、お目付け役のウィルゴットがいるはずなのだが、ウィルゴットは民兵部隊の指揮を守るために前方に残ったままだった。

「では、どうすると?」

「できるならば、警護部隊の半数を使って、一本道の西側にある森林を先に搜索して確保するのが望ましいのですが・・・」

「そんな作戦は許可できるはずがない。たかだか輜重隊を前線に送り届けるためにそんな大規模なことは不要だっ!」

輜重隊とその警護隊の役目は前線まで物資を届けることにある。

『たかだか』などと言うことではない。万難を廃して任務を実施する必要はあるはずだが、キュレーゲルは少しでも大胆な作戦を取ることを好まなかった。教科書通り、定石通りの行動しか取れない男なのだ。

「それでは、せめて我が隊には、西側の森への警戒の任務をお与え下さいませよう・・・」

「勝手にしろっ!」

ウィルゴットの言ったとおりになった。これで、西側の森からの強襲に対する対策は、レーナとウィルゴットに一任されたことになる。

レーナは頭を下げてその場は下がったが、随伴した部下の半数を
ウィルゴットの元に送り、自身は本体の近くに留まった。女性であ
りながら軍隊内で不世出の出世を遂げた女将レーナの最初の戦いが
始まるうとしていた。

過去

補給部隊はレーナが危険と感じた一本道に差し掛かっていた。レーナはボルガー・キュレーゲルには気付かれないよう、一般の兵士に紛れている。

ボルガーは不機嫌だった。自身、あまり軍将としての才覚がないことは自覚している。だから、前線での任務よりも補給部隊の護衛という地味な仕事は自分にあっていると思っていたのだ。そこに、厄介者以外の何者でもないレーナに余計な忠告をされ、まるで自分が補給部隊の護衛すら果たせないと指摘されたような気がしたのだ。そんなネガティブな感情をいだいてしまったのは、彼の狭量故であろう。

ふと、自分たちのいる場所がレーナに指摘された危険地帯であることに気がついた。

レーナとウィルゴットの部隊が警戒しているはずだが、警戒している兵士の姿はない。ボルガーが不審に思った瞬間、突然、馬蹄の音が響き渡った。敵の奇襲部隊が襲ってきたのだ。まさしく、レーナの指摘したその場所で、騎馬隊による奇襲攻撃である。

「なっ！ば、馬鹿なっ！」

ボルガーには何もできなかった。馬鹿なも糞もない。事前に予見できていたことなのである。それに対する備えを怠ったのは輸送部隊の警護隊長としては失策以外の何ものでもなかった。まして、注意を促した部下の進言を退けることである。

「ふ、ふせげっ！」

具体性のかけらもない指示に誰もが何をしていたのかわからなかった。輸送部隊の多くは新兵で、従軍経験に乏しい者たちばかりだった。下士官であつてもほとんどは家柄だけいいお坊ちゃまたちで、独自に判断をして動くことなどできはしない。

あまり広くはない野原の向こうにある林から百騎程度の騎馬が現れ、輜重隊に向かってまっしぐらに駆けてきた。レーナの指摘したとおり、護衛部隊は街道に沿って帯状に長く布陣しており、側面を警備する体制はできていない。

敵の先頭にいる騎士が馬上で弓を構えた。矢先には油に漬した布が巻かれており、火がつけられている。これを射られてしまえば、輜重隊の荷馬車は焼かれてしまうであろう。

ボルガーは口をパクパクと動かした間拔けな表情のまま何もできなかった。

『も、もうおしまいだ・・・』

おそらくは命をとられる心配はない。本格的な戦闘になれば、千名以上いる警備隊と百名程度の奇襲部隊とでは勝負にならない。敵の狙いは最初の一撃で糧食に火を放ち、そのまま逃亡を図ることである。

だが、命は助かってもヴェスタラ軍でのくれの立場は死んだも同然となることは間違いない。前線では食料が不足している。この輸送部隊の物資が届かなければ、一時的にせよ撤退せざるを得ない

状況なのだ。ボルガーは自分が輜重隊の警護すら勤まらないことを初めて自覚したのである。

ボルガーは敵が矢を放とうとした瞬間、目をつぶってしまった。だから一瞬何が起こったのかわからなかった。聞こえてくる声や周囲の雰囲気は、何かおかしい。歓声が聞こえてくる。糧食にはまだ火が放たれたわけではないようだった。

目を開けても、事態はよく飲み込めなかった。燃えているのは糧食ではなく、射程距離にまで近づいてきた奇襲部隊のいる地面である。人が立てば腰までは隠れてしまう雑草が異常な勢いで燃えているのだ。

「な、なんだこれは？」

これは声に出して訊いたのだが周囲の部下たちは何も答えなかった。彼らも啞然としている。

ボルガーは気付いた。敵の北側、ボルガーから見ると右の方向からいくつかの奇妙なものが飛んでくる。それは両端に何かを縛り付けた紐のようなものであった。両端の重石がくるくると回りながら、敵の騎士に向かって飛んでいく。

ウィルゴットの考えた作戦は民兵部隊の特徴を巧みに生かしたも

のであった。

レーナとウィルゴットが指揮する民兵部隊はスオメルのとある村の出身たちで編成されていた。彼らは元々狩猟を生業として生きていたが、スオメル討伐の際に猟場は戦場となり、村そのものはスウエーダ軍に略奪され、滅びてしまったのである。たまたまその窮状を知ったヨハン王は第二次スウエーダ討伐戦の進軍中に彼らを兵士として向かい入れたのである。

しかし、元々亡国の民である彼らの待遇はあまり良いものではなかった。ウィルゴットとしては何とか手柄でも上げて、彼らの待遇を改善したいと考えていたのである。

ウィルゴットはレーナと分かれた後、危険であると気付いた箇所を、一度、そのまま素通りし、腰の高さまである草むらの中を通過して、現場まで戻ってきた。林の中にはすでに敵が潜伏している可能性が高かったためである。元々猟師である民兵たちは完全に気配を絶ち、気付かれることなく草の中に潜伏することができた。

次に、輸送部隊にひそかに掛け合って馬車一台分確保していた油と酒精度の高い酒を、襲撃の行われるであろう地点に撒いておいた。敵部隊はそれほど離れていない林に潜んでいたのだが、まったく気付かせることはない。油をまく場所は丁度、弓矢の射程距離になるであろうと限定していた。

そうしておいてから、やや北側に移動し、元猟師たちに自分たちの武器を作らせたのである。主に野鳥や獣を狩る際に使うボーラと呼ばれる簡単な狩猟道具で、鎖や紐の両端に石や分銅を縛り付けて作る。それを振り回すことで勢いをつけて投げ、足などに絡ませて獲物を捕まえるのだ。

民兵たちはこのボーラの扱いに長けていた。ウィルゴットはそこに目を付け、弓などではなく、この武器を使って奇襲部隊を襲ったのである。狙いは足ではなく、火矢を構えた腕や弓であった。

思わぬタイミングでボーラによる攻撃を受けた襲撃者たちはあわてて火矢を落としてしまう。本来なら足元の草が焼ける程度でたいしたことはない。すぐに火は消える。だが、そこには大量の油と酒が撒かれている。揮発したアルコールと油の力によって火は大きく燃え広がり、馬が暴れだした。混乱に拍車がかかると、さらに火矢を取り落とす者も現れ、奇襲どころではなくなつたのである。

「先行、後続の弓隊はそれぞれ輜重隊の前に並んで矢をかまえよつ！ 号令を待つ必要はないつ！ 位置についたらすぐに矢をはなてつ！」

ボルガーが状況を把握することもできないでいるうちに、よく通る女性の声がすぐそばから聞こえた。ボルガーにとってはそこにいるはずのない人物であった。少年兵化と思われるほど小柄な、しかし颯爽とした立ち姿は明らかに雑兵ではない。脱いだかぶとの下から現れたのは美しい女性の顔であった。一般の兵士の装備を着込んだままのレーナである。

「騎馬隊は左右から回りこんで敵部隊の後方を突けつ！」

やはり、ボルガーが何も言えないでいるうちに、下士官たちはレーナの指示に従って動き始めた。下士官たちは名門貴族の子弟たちであるから、内親王という王族に連なる人物の権威に弱いところが

ある。

だが、それだけでなく、一般の兵士の格好をしながら、指示を与えたレーナの声は彼らにとって戦の女神の神託に等しいものに聞こえたのである。

敵部隊は混乱をどうにか収められるかと思われた瞬間、前方から大量の矢を浴びることになった。すでに先駆けとなった数十の騎士たちは、奇襲攻撃の要である火矢を落としてしまっている。暴れだす馬を制御することに必死であった。

奇襲部隊でも気の利いた者たちは混乱している前方の騎士たちを避けてを側面から回りこもうとしていた。だが、その途中、レーナの指示で両側から駆け込んできた騎馬隊に行く手を阻まれる。経験不足の者ばかりとは言っても、左右それぞれが二百程度はいる。わずか数十名の奇襲部隊とでは勝負にならなかった。

数は元々襲われた側の方が多い。奇襲の効果を失った瞬間から勝負は決まっていたのである。

ウィルゴットの戦術の巧みさと、初めて発揮された女将レーナのカリスマ性よって、輜重隊は無傷で危険地域を抜け、前線に食料を運び込むことに成功したのであった

「その後、問題になったのはレーナ様とウィルゴットの処遇でした」

「手柄を立てたのは確か。臨機応変な対応で二人は戦果をあげたのに妬み深い連中が現れたというわけだ」

カール・ヴィランデルの言葉に横から口を挟んだスヴェンはやや不機嫌そうに言った。スヴェンは軍隊のこうした陰湿な部分を心底嫌っている。ウィルゴットと同等以上に評価される武術と将才を持ちながら、頑なに騎士団への復帰を承諾しない理由がこれであった。

「と言っても、人事を行うのは私と陛下。まして、現場にいた下士官たちは、すでにレーナ様を崇拜すらしていた。そこで、二人にそれ以上、妙な嫉妬が集まらないよう、二人の行動は全てボルガーの指示で行ったこととして、ボルガーを昇進させ、それに伴って二人も昇進させる形をとったのです」

苦々しい表情を浮かべながらカールは話す。

昇進はさせるとしても、戦場では一切役立たないことを露呈したボルガーに大軍を任せたりできるはずがない。結果として王都で補給物資の準備や徴兵を担当する後方担当者として出世させたのだ。こちらの人事はある程度適切であったようで、後方の事務処理に関してはボルガーは手堅い功績を上げていった。その結果、予想以上の地位にまで出世してしまったのである。

「まあ、ボルガーについては、とりあえずはそれでよかったです
が、ウィルゴットは納得しませんでした・・・」

「お父様が人事に不満？」

フレデリカが不審に思ったのは、父親であるウィルゴットには出世欲のような、ギトギトした感情を持ち合わせていたとは、とても思えなかったからである。高く評価されれば喜ぶが、無欲で誠実な

人柄であった。それは農場経営の方針にもよく出ていたことである。短期間で拡大していった農園であるにもかかわらず、周辺の同業者とはきわめて良好な関係を築けていたのは、この人柄のおかげであった。

「自身の処遇についてはありません。ウィルゴットとレーナ様が率いた民兵部隊の扱いについてです」

「これも、軍隊内のご事情ってヤツだな。見下げていた民兵部隊が活躍したってところを気に入らない連中がたくさんいただろうさ」

スヴェンは酒を一気におった。滅多にないことだが、多少絡み酒になってきているのかもしれない。

「まあ、そういうことです。ウィルゴットとレーナ様は昇進の上、前線の戦闘部隊の指揮官となる人事となったのですが、民兵部隊はそのままでした。そこでウィルゴットは・・・」

「お父様なら、昇進を拒否して隊にとどまったではありませんか？」

ニコリと笑ってフレデリカは言ってみせた。父親のことは誰よりもわかっていると思っている。父の過去についてはほとんど知らなかったが、父の考え方や生き方については、間近で見えていく理

解していた。

少し驚いた表情を見せて、カールは続けた。

「おっしゃるとおりです。昇進を辞退した上で、民兵部隊の指揮官に留まることを希望してきたのです。それはウィルゴットだけではありませんでした。レーナ様も同様に民兵部隊に留まることを希望したのです」

ウィルゴットは元々民兵たちに人気があつた。指揮官であつてもお高く留まることはなく、若いながらも気配りのできる人物で、軍隊の中で鼻つまみ者として扱われていた民兵たちも彼を慕つていた。

一方で、レーナに対しては親しみを感じると言つのは難しい。何せ王族、現国王の妹たる内親王である。声を聞くのすらはばかられるのではないかと思つていたほどだ。

そのお姫様が、民兵たちを目の前にして宣言したのである。

「私もウィルゴット殿共にこの部隊に留まることにしたっ！ 今後は我々の戦場も後方から前線に移ることになるっ！ 前線でも大暴れして、騎士どもを驚かせてやろうぞっ！」

身分が高いうえに、女性であることを過剰に意識して、堅苦しい雰囲気を漂わせていたレーナがこのようなことを言うのはウィルゴットにとつても意外だった。

「レーナ様……なぜですか？」

ウィルゴットは素直に疑問を口にした。

「精鋭部隊の指揮官になつて手柄を立てても、それは当然のことであるっ？ 少人数、まともな訓練も受けていない民兵部隊で大暴れし

てみせる。なかなか痛快で面白いと思っただのだ」

レーナが冗談を言うのは珍しい。と言うより、この時が始めてであつた。

「……………」

「それから……………」

「それから？」

なぜか、やや顔を赤らめ、口ごもり、しばしの沈黙の後で、どもりながら言葉を続けた。

「私は所詮、わがままな姫君。お守りなしで前線に出たりすれば、周りに迷惑をかけることである。そんな役割を引き受けてくれるのはウイルゴット殿以外にいないので……………」

ウイルゴットはわけがわからないと目を白黒させたが、部下たちが酒宴誘う声に反応し、敬礼をほどこしてその場を去っていった。

その後、二人が指揮する民兵部隊は目覚しい戦禍を上げ続けた。獵師であつた彼らは元々強壯の者が多く、騎士が持つものとは違つても、様々な武器の扱いには長けている。気配を絶つ術や、罾を仕掛けたりする技術などは飛びぬけていた。

それらを駆使してウイルゴットとレーナは、行く先々の戦場で大功を成して行つたのである。

その結果、ついには民兵部隊に対する評価が一変した。ヴェスタ

ラでは四剣候の制度が成立するのと前後して、軍制が大きく変わったが、それに先立つこの時期にも、様々な形で変化が始まっている。軍中枢から名門貴族たちの影響力が排除されていったのもこの時期であった。

もつとも、名門貴族の影響力などと言うものは、貴族中心の政治制度である以上、完全になくなるなどということはそうそうないのだが……

とにかく、ウィルゴットの民兵部隊はカール・ビランデル直属の工作部隊として昇格を果たした。その隊長には、ウィルゴットとレーナの指揮下で仲間たちを取りまとめていた人物が就任した。平民出身でありながら、部隊長に任命すると言う大抜擢であった。

彼らの元々の指揮官であったレーナとウィルゴットは、最前線から後方の王都にまで呼び戻された。レーナについては、元々王族であるし、年齢から言えばそろそろ結婚も考えねばならない時期であったから、当然のことであった。

ウィルゴットの場合は、ステファン・エリクソンの薫陶熱い人物であると言うことが、ようやく認められ、将来の軍の幹部候補として、新たに編成された近衛騎士団の副部隊長に昇進を果たしたのである。民兵部隊の昇格はカール・ビランデルがウィルゴットに昇進を受け入れさせるために考えたと言う側面もあった

「ずいぶん前の話ですが……ウィルゴットは元々名もない没落貴族の息子で、天涯孤独の孤児でした。ステファン・エリクソン老の

養子にならなければ、平民並みの人生すら送ることは難しかったでしょう。それゆえでしょうか。軍隊内で高い地位に上っても、立場の弱い者たちのことを常に気遣っていたのです。強いものほど、弱いものを助けなければならぬ。そういう考え方をする男でした」

フレデリカは感じ入ったように目をつぶった。父親の考え方と言うのは、カールに言われるまでもなくよく理解していた。だから、決して意外な話を聞いたわけではない。だが、自分の知らない若いころの父のことを聞き、そして改めて父の人柄を他人の口から聞くことで、父親に元氣付けられたような気がしたのである。

快活で突拍子もないことを考える愉快な叔父スヴェンと、歳の近い生真面目だが温和で気配りのできるニルスと共にする旅は楽しいもので、父親を失った傷心から立ち直ることは容易かった。

だが、明るく振舞いながらも、時折、どうしようもない寂寥感と言うものが襲ってくることもある。

カールの話の聞き、姿はそこになくとも、やさしかった父親のことを聞くことができれば、いつでも会えるような気がしてくる。それが何よりもフレデリカはうれしかった。

「フレデリカ様・・・」

「は、はいっ」

「あなたに宮廷に入ることをお勧めしたりはいたしません。このスヴェンと同様、自由に生き方を選んでいただいで結構。ですが、ウイルゴットの志だけは、あなたには覚えておいてほしいのです。私にとっても、あれほどの男を失ったことは・・・」

カールは口ごもった。ややうつむいて、あふれ出る感情を抑えていた。少し、酒が回ってきたのかもれない。ヨハン王の三傑、カール・ビランデルともあるう者が年老いた者だと、髭に包まれた口の中だけで言ってから、話を続けた。

「あれほどの男が世を去ったことは痛恨の極みです。ですが、あなたがその志を忘れずにいれば、それが彼の生きた証となることでしょう……」

フレデリカは沈黙したままじつとカールを見返した。老将の思いは声よりも、少しだけ赤くなった両方の瞳から伝わってきた。

誰に言われなくても、父親のことは決して忘れない思っていた。だが、それ自分が知っている、農園主をしていた父親のことだけだ。もっと、自分の知らない父親のことを知りたいと思ったのである。それは、カールやスヴェンがこれからも語ってくれることだろうと思った。

フレデリカは柔らかな笑みを浮かべた。歳の割には大人びた、高貴さすら漂わせた微笑であった。それは、実は父親よりも母親の面影を思い起こさせる表情であったが、そう感じる事ができたのは、カールだけである。

「ビランデル卿。ありがとうございます。まだ、どんな生き方をするのか、私にもよくわかりません。でも、父はずっと私のことを見守ってくれていると思います。だから、父や父を慕ってくださった方々に恥ずかしくない生き方をしようと思います」

一度、すでに冷めてしまったミルクを上品に、少しだけ口に含んでから、言葉続けた。

「ビランデル卿も、それか叔父様も・・・これからも父のことを教えてくださいませんか？騎士団にいたころや・・・それから叔父様と一緒にお爺様のところで暮らしていた時のことも」

フレデリカがお爺様と呼んだのは、ステファン・エリクソンのことである。ステファンが亡くなったのはフレデリカが生まれた数年後であった。どうにか物心ついた時に、何度か会った記憶が残っている。温和で優しい好々爺というイメージではあったが、その実、ヨハン王の三傑数えられ、その中でももっとも謎に包まれた人物である。

一緒に暮らしていたとフレデリカは言ったが、実を言えばそのころは半分以上の期間を四人で旅をしていた。ステファンは少年たちに武術と学問を授けながら、秘密外交官あるいは密偵として様々な活動を行っていた。そんなことを少しだけ父親から聞いたことがある。

「ああ、これでも気を使つてあんまり話さないようにしていたんだがな・・・だが聞きたいと言つのならいいだろう。おやつさんも、第一騎士団領までは送つてやるけど、片腕じゃ居候でもだいしてできることないだろ？引退時だつてんなら、老人らしく昔語りでもする練習をしてくれや」

「このっ！口の減らないヤツめっ！」

「ハハハッ！」

フレデリカは父親が死んでから初めて、大きな声を上げて笑った。身分の高い人物とは関わるなと怖い顔で言つた叔父が、舌の根も乾かぬうちに帝国軍の総帥たるカール・ビランデル將軍を連れてきたときには驚いたが、今では感謝していた。ますます、この旅は自分

の好奇心をそそるものになりそうだった。

過去（後書き）

また、ずいぶん時間を空けてしまいました。

やっと、どうにか、レーナとウィルゴットの『馴れ初め編』が終わりました。

もちろん、そのうち、『別離編』をやるわけですが、スヴェンもウィルゴットも昔のことを語ってくれるとのことですので。

（お願い）

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。
厳しいご意見もドシドシお願いいたします。

雪原に馳せる

ブレイキング公領はスカーディナウイアでも最も過酷な環境での生活が強いられる土地である。半島の付け根にあるこの地域はおそらくは人が生活できるぎりぎりの最北端あり、極寒の大地は凍てつき、農産物を産することはない。そのため、ブレイキング公領の住民たちは元々穀物などは滅多に口にしない。彼らは主に狩猟によって糧を得ていた。

ブレイキングには多数の部族が存在している。狩猟民族の連合体というのが旧来のブレイキング公国を言い表すのに最も適切な言葉であった。よって、君主たる国公と言えど絶対的な権力を持っていたわけではなく、無数に存在する族長たちの代表者でしかない。スウェーダ王国に冊封された後もしばらくの間は、国公の地位は世襲ではなかった。

世襲になった後も、他の公国・公領に比べて公の地位は高いとは言えない。君主には君主たる度量と才覚が求められ、結果を出せなければ在位中でも廃位されることが幾度と無くあった。歴代のスウェーダ国王もそうしたブレイキング公領の風習については、何も言わなかったのである。

ヴェスタラの時代になってからは、ブレイキング公爵は一度も代替わりしていない。スウェーダ討伐戦の時点で、現公爵マルティン・アンドレセンが若かったというのもあるが、ヴェスタラへの併合、度重なる反乱の失敗がありながら、この人物の手腕に懸けると言う思いが、多くの族長たちにはあるのだ。

ブレイキング公領の住民たちは厳しい自然と対峙しながら、日々

を過している。それは、彼らをスカーディナウエアで最も優れた兵士とする結果を生んだ。兵力からすれば弱小なはずのブレイキング軍が幾度と無くヴェスタラ軍を翻弄してみせたのは、過酷な立地を巧みに生かしたマルティンの戦術と、兵士達の優れた資質によってであった。

最北端の強兵の故郷、ブレイキング公領には今、公爵たるマルテイン・アンドレセンがいない。帝都レーラムに進軍し、帝国宰相として幼帝アーギュストを推戴、ヴェスタラ宮廷を形式上支配している。

宮廷を支配していると言っても、彼が自由にできている領域は帝都レーラムを中心とした僅かな地域と、本拠地であるブレイキング公領、そして両者をつなぐ街道の周辺だけであった。そして、その街道も帝国第二騎士団長クリストフェル・エリクソン將軍の断続的な攻撃により確保することが難しくなっている。

元々マルティンは本拠地からの物資など全く当てにしていなかった。元々公領にはごくわずかの備蓄しかないのだ。帝都に行けばいくらでも糧食はあるはずであった。普段穀物を口にしないと云っても、帝都に駐留しているブレイキング人の大半は、かなり以前に公領から移住してきた者たちである。帝都での生活にも慣れており、習慣もヴェスタラ風のものへと変わっている。

だが、当てにしていたはずの帝都の糧食は、実際には第二騎士団とブレイキングに隣接するポッテン公領の商人たちによって買い占められていたのである。マルティンは窮地に陥る。季節は冬。ブレイキング領内は言うに及ばず、ヴェスタラ領に入っても糧食部隊の移動はままならない。僅かでも公領の残留部隊に指示した糧食の到着はとても期待できなかった。

公領の残留部隊は実を言えばレールムの状況など全く伝わっていないなかった。糧食の輸送を支持する書簡を持った使者は、クリストフエル配下のレールム駐屯部隊長ベール・エストマンの手により捕縛されていたのである。

駐留部隊の兵士たちは、マルティンが宮廷で実権を握り、巨万の富と権力を得て凱旋してくる日をただただ待ち焦がれる日々であった。何世代もの間、この厳しいブレイキングの地で命をつないできた彼らも、その過酷さに飽いていた。急速に発展した豊かな城塞都市レールムや、さらに南方のノール公領への移住を多くの者は希望していた。

『田舎者と馬鹿にされず、大手を振るって半島全土に浸透していくブレイキング人』

梟雄マルティン・アンドレセンはそういうブレイキング人の幻想を現実にできる人物として、彼らの頂点に君臨している。

兵士たちは自分たちの君主を悪逆無道な反逆者などとは思っていない。厳しい自然の中で生活する素朴な住民たちは、その厳しさから自分たちを救ってくれる救世主であると信じていた。と言ってもそれは建前の話だ。マルティンは決して家臣に冷酷な人物ではないが、度重なる反乱によって兵士たちの生活が少しでも楽になったかと言えばそうではない。

と言つても、断続的な反乱と膠着状態の中で、生活水準を低下させることがなかっただけでも、マルティンの手腕は評価されてしかるべきであろう。だからといって、いつまでも夢を見続けることが出来るほど、兵士たちも純粹ではなかった。この何年かで彼らも適度にすれてしまっている。仲間の何割かがレールムに移住したのち、帝都の様子を耳にした彼らは、自分たちの生活に疑問を持ち始めている。

「皇太后陛下・・・お疲れではありませんか？」

丁寧な口調で話しかけたのは、第二騎士団副団長の肩書きを持ち、クリストフェル不在の際には騎士団領の全軍を預かるヒューゴ・アールトと言う人物である。

ヴェスタラにおいては、騎士団長には副団長の任命権がない。騎士団長同様、皇帝自らが指名した人物が就任することになっている。これは、帝国最大の軍勢力とそれを支える領地の双方を預けると言う都合上、副団長は騎士団長の部下ではあるが、騎士団長に異心ある時にはそれを制する役割があるためである。

しかし、ヒューゴは今回の微妙なクリストフェルの動き、判断に対して何の告発も行っていない。それどころか、こうして作戦行動に参加している。それは、彼自身のための判断である。すでに皇帝の威光に陰りが見えてきた証拠であろう。告発することよりも、騎士団長に迎合する方が保身につながると言う思考が成立しているのである。

実際のところ、クリストフェルの腹心と言う意味では、レールム駐屯部隊長ベール・エストマンほどの信頼を得てはいない。だが、クリストフェルのヒューゴに対する評価そのものは高い。長年の信

頼で叶わないなら、ヒューゴは実績と実力によって、本来の意味でのナンバーツーにのし上がるまでであった。

ヒューゴが話しかけた女性は女帝を名乗るレーナ以外では、『陛下』の敬称が用いられる唯一の女性である。皇后エスナ。先帝アンデルス一世の皇后であり、その忘れ形見の一人、アストリッド大公の母である。アンデルス帝が崩御したとは言え、推戴された複数の皇帝の誰からも、皇太后の称号は与えられておらず、皇后の称号はそのままの状態であった。

だが、それだけではない。

皇后エスナは元はブレイキング公領の出身、それもマルティン・アンドレセンその人の娘である。

「お気遣いありがとうございます。しかし、私はこれから懐かしの故郷に赴こうというのです。心踊る気持ちはありますが、疲れなどはありません。ああ、アストリッドはまた寝てしまいましたね・・・」

大きな馬車の中には四人の護衛の兵士と、ヒューゴ、エスナ、そして、アストリッドとアストリッドの乳母だけがいる。馬車と言ったが実際に引いているのはトナカイ。また、車輪ではなく大きなそのりのある板が取り付けられていた。輸送用の櫓である。

「多少吹雪いてはありますが、予定通りの時刻にはたどり着けそうです。ポッテン公とシャウマン伯も順調に道を進んでいることですよ・・・」

「はい。心配しておりません。あなたも、ベール殿もクリストフェル殿が信頼を寄せる方々ですから」

若い・・・割には無表情で、歳相応の感情すらないように話すエスナ。息子と二人になった時だけに見せる笑顔を知っているのは、同行しているアストリッドの乳母だけであろう。

ブレイキング公領には都市と言えるほどの街はない。それぞれの部族がそれなりに大きい部落を形成していることはあるが、貨幣経済と無縁とは言えなくとも、商業はさほど発展しておらず、街と言えるほどのものを形成する文化はなかった。城はあくまで軍事的な拠点と政治的な中心であるだけである。よって、そこにいるのは兵士たちと、公爵の代理として合議制で公領を統治する部族長達だけである。

それとは別に、そのブレイキング城にたどり着くための唯一の経路である一本道には、巨大な門を備えた関がある。両側に断崖絶壁が迫り細くなっている箇所を設置されている。ここがブレイキングにとつては軍事的に最も重要な拠点であった。通称ノキア関砦。幾多の反乱、ヴェスタラ軍の進行がありながら、この関より先に侵入されたことは一度もない。

マルティン・アンドレセンが降伏に追い込まれた時も、この関から打って出たヴェスタラ本領内での大敗があつたのであった。

そのノキア関砦は、城とは対照的に空気が張り詰めていた。

ノキア砦の駐屯部隊は五千ほどだが、うち二千はレールまでの街道のうち、ブレイキング領内までを確保するために出撃している。その街道確保に向かった部隊からの定期的な連絡がここ数日ないの

である。

天候は良好とは言えないが、ブレーキング公領では当たり前と
って言い程度の吹雪でしかない。連絡が滞るような状態ではないの
だ。ノキア砦の駐屯部隊長はマルティンの信頼厚い気鋭の族長であ
る。

まだ、若者と言っているその男の顔から眉間のシワがしばらく消
えていない。年長の部下たちのように、伝令がサボったとか、途中
で事故にでもあったのだらうとか、楽天的な無責任な憶測など到底
出来るものではなかった。

「このノキア関砦は十倍の兵力を以てして攻め落とすことは叶わな
かったのですぞ？まして今は冬。ヴェスタラ軍も冬に攻めこんでき
たことはありません。ブレーキングの気候に耐えられる軍隊など我
々以外にはスカーディナヴィア存在しないのですからな」

そう言つて、暖を取るための酒で顔を赤らめている初老の副部隊
長にはいらだちを禁じえない。たしかにノキア関砦は今のところ難
攻不落である。だが、難攻不落であった理由は、常にその時その時
の守将が必死の働きで防いでみせたからである。経験不足の自分と
楽天家の副部隊長だけという人材枯渇の状態でいっただうやって
ここを守りきれるといふのか。

若者は少し神経質になっていたかもしれない。

例え、ノキア関砦を突破できうる大軍を派遣し、それが成ったと
しても、ヴェスタラ側に取ってはそれだけの意味はない。マルティ
ン・アンドレセンの本領を攻め落としたところで、帝都を奪われた
ヴェスタラ貴族たちは片田舎のしかも極めて劣悪な生活環境の地域
を得られるに過ぎないのである。ブレーキング公領はブレーキング

人が済むべき土地であり、それ以外の何人にとってもそれほど魅力のある場所ではない。少なくとも、真冬の強行軍と言つ無理をしてまで、攻め取る理由は彼らにはないのである。

少なくとも、『ヴェスタラ帝国軍』にとっては・・・

若者は水筒に入れた酒を一気にあおった。体を内側から温めねば命をつなぐことも難しくなる。それがブレーキング公領であった。

「あれは・・・?」

閉城の城壁の上からヴェスタラに続く街道に目を向けたときである。吹雪であるからあまり遠くまでは見えない。はつきりとは。だが、ぼんやりと小さな光りが見えたような気がしたのである。

それが、少しずつ、数を増やしていった。

「ふ・・・んつ、副部隊長！来たぞっ！」

一瞬、酒を吐き出しそうになった部隊長の若者はそれを飲み下してから叫んだ。

「へ？何が来たんですかな？ああ、伝令ですか？」

「違つっ！敵だっ！敵の軍勢が近づいてきているっ！・・・！」

「は・・・何を・・・ん????」

ゴッ！

若者は副部隊長を殴り倒した。暖を取るためならまだしも、軍勢

を指揮する者が泥酔するほど酒を飲んでいいはずがない。年長者として立てて来たが、今は役に立たない老いぼれの部下でしかなかった。

「総員配置に付けっ！それから城に伝令を向かわせろっ！」

副部隊長以外の部下たちも年長の者は反応が鈍かった。だが、密かに若年の部隊長を慕っている末端の若い兵士、それもまだ重大の少年兵たちは動きの鈍い年長者を蹴飛ばして動き出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5636n/>

ヴェスタラ戦記

2011年5月3日19時19分発行